

とある代表候補生の奮闘記

ジト民逆脚屋

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

IS 学園に通う一人の『荒熊』の名で知られる熊谷真琴の奮闘を描く物語です。

注意

時系列は二巻辺りからスタート

戦闘描写はほぼ無

せいたかのっぽ

ラウラが何故か娘役

目次

一冊目	1
二冊目	8
三冊目	17
四冊目	25
五冊目	32
六冊目	40
七冊目	49
八冊目	57
九冊目	65
十冊目	74
十一冊目	83
十二冊目	91

十三冊目	102
付録	111
十四冊目	123
十五冊目	132
十六冊目	142
特別付録	154
RE：十七冊目	161
RE：十八冊目	169
RE：十九冊目	177
RE：二十冊目	184
RE：二十一冊目	191
RE：二十二冊目	201
RE：二十三冊目	210

付録 とある掲示板	316
RE : 三十五冊目	308
RE : 三十四冊目	299
RE : 三十三冊目	291
RE : 三十二冊目	284
RE : 三十一冊目	277
RE : 三十冊目	270
RE : 二十九冊目	262
RE : 二十八冊目	255
RE : 二十七冊目	247
RE : 二十六冊目	237
RE : 二十五冊目	228
RE : 二十四冊目	217

RE : 三十六冊目

一冊目

「COOLIS 学園には幾つかの暗黙のルールがある。

一つ

『織斑千冬に逆らうな』

二つ

『更織楯無に齒向かうな』

三つ

『山田真耶を困らせるな』

四つ

『地下駐車場に行く時は覚悟を決めろ』

この他にも様々あるが、最近になって追加されたルールがある。それは『熊谷真琴を怒らせるな』

である。

熊谷真琴とは、日本の代表候補生であり現在最も国家代表に近いとされる少女だ。その実力は確かなものであり、あの初代ブリュンヒルデの織斑千冬も認めており、候

補生の身でありながら『荒熊』の名で呼ばれている。もつとも、IS 学園では違う名で親しまれているが

その戦い方は『荒熊』の名が想像させる様な力任せなものではなく、とれる手段を使いながら精密な操縦技術で確実に相手を追い詰めた上で『荒熊』の名に恥じぬ苛烈な攻めで仕留めていく。

このお話は、そんな『荒熊』こと熊谷真琴の奮闘を描く物語である。

私、熊谷真琴は『荒熊』とか呼ばれて好戦的な性格だと思われがちだけど、争い事は嫌いです。

図書館とかで本を読んだりしてるのが好きな一般的な女子なのに、何処で何を間違ったのか国家代表候補生になってしまいました。

なってしまったものは仕方がないと、諦めて自分に出来る限りのことをしていたら、あの初代ブリュンヒルデの織斑千冬と戦うことになり、その時の戦い方のせいで『荒熊』

と呼ばれる様になりました。

大体何なんですか『荒熊』って？確かに私の名前に熊の文字は入ってますけど15、6の女子につけるあだ名じゃないですよ。

やめて！次期国家代表とかやめて！私はか弱いの！

ごめんなさい、嘔吐きました。

私、身長が195cm あります。しかも、まだ少し伸びてます。運動も得意です。嫌いだけど。

私は読書が好きです。図書館の隅っここの席に座って読むのが好きです。ヘヤノスミスは私の友達。

今日も友達のヘヤノスミスの元で本を読むために、図書館へ急ぎます。

「母様、今日も図書館に行くのか？」

「うん……」

この子はラウラ・ボーデヴィツヒ。ドイツから来た転校生です。

前に起きた事件のせいで私のことを母様と呼んで、何をするにもついてきます。私と違って小さくてとても可愛いくて、その長い銀髪はサラサラで綺麗です。少しうらやましいです。

「ラウラ……」

「どうした？母様」

「なんで・・・背中・・・張り付いて・・・るの？」

「それは母様だからだ」

「そう・・・なの・・・」

『納得!?!』

『流石は「母熊」！安心の包容力!』

『そこに痺れる！憧れるう!』

何も言いませんとも、ええ言いませんよ。だって、ラウラに何言っても勝てる気がし
ませんから。

周りの人達も同じです。織斑先生に言われて、ラウラの面倒を見るようになってから
というものの私は『荒熊』よりも『母熊』の名で呼ばれる様になりました。

何ですか『母熊』って、『荒熊』もアレですが『母熊』って、だとすれば『父熊』も居
るんですか？私には残念ながらそんな相手は居ません。この歳でシングルマザーです
か、そうですか。

少しだけ鬱々とした気分で図書館へ急いでいると、淑やかな声がかかけられました。

「あら、真琴さん。ご機嫌よう」

「セシリア・・・ご機嫌・・・よう」

「セシリア、どうした？」

彼女はセシリア・オルコット。イギリスの代表候補生です。金色の髪をクルクル縦ロールした綺麗な人です。

「ラウラさんは相変わらずですわね。真琴さん、頼まれていた詩集が来週ぐらいに届きそうですわ」

「本当・・・セシリア、ありがとう・・・」

「良かったな、母様」

「うん・・・」

「いえいえ、この程度お安い御用ですわ。後、第一図書館は行かない方が良いでしょうよ」

「え・・・なん・・・で？」

今日は第一図書館で『クワンカの街を彩る糸ようじ』の続きを読もうと思つてたのに・・・

「鈴さんと一夏さんが待ち構えていますわ」

「えく・・・」

「またか、あの二人は」

うう、どうしてこうなるの？ 私は只、本を読みたいだけなのに

「ですので、行くなら第二図書館が良いかと」

「ううう．．．」

「母様？」

あの二人、もつと徹底的に潰した方が良かったかな？再起不能になるまで

「母様！顔が！顔が怖い！」

「あ、ごめん．．．ラウラ」

「ああ、あともう一つ。真琴さんがお読みになっていた本なら、第二図書館にもありますわ」

「本当？」

「ええ、本当ですわ」

「セシリア．．．ありがとう．．．」

「母様、早速行こう」

「うん．．．セシリア．．．また．．．明日」

「ええ、また明日」

さあ、急ごう。グズグズしていると、ヘヤノスミスの元でラウラを抱っこしながらする読書を邪魔しにお邪魔虫が二匹湧いてくる。

けど、私の努力も虚しく先に湧いていたお邪魔虫により私の癒しは奪われました。

なので、その後行われた模擬戦で二人は念入りにクマーしました。

シャルロットが居なければ、止めを刺せたのに・・・残念無念
クマーとは何だつて？ラウラがこういう表現はこうすると可愛いって、言うから使っ
てみました。

どうですか？クマー。可愛いですか？

二冊目

IS 学園第三アリーナで、織斑一夏は迫り来る雨のごとき銃弾に対し、必死に回避行動をとっていた。

「くそッ！近付けねえ！」

「来な……いで……」

何とかして自分の距離に近づこうとする織斑一夏と、己の機体『打鉄・甲』の右腕にマウントされた滑腔砲に搭載している機銃で追い払い続ける熊谷真琴の姿があった。

これだけ聞くと真琴が劣勢のようにも聞こえるが、実際は一夏の圧倒的劣勢で真琴の圧倒的優勢であった。

機銃に追い払われ、何とか安全な距離に逃れて体勢を立て直そうとしても、その隙を突かれ滑腔砲による大ダメージが叩き込まれる。例え近付けても、両肩の物理シールドとカーボンブレイドにより打ち払われる。

またもにダメージを与えられず、一方的にダメージが溜まり続ける。

一夏の機体『白式』は武装が近接武器である『雪片』のみという非常にピーキーな仕様だが、それ故に加速力や装甲、機体の反応速度といった性能は他の第三世代の中でも

群を抜いている。

その上単一能力『零落白夜』という自分のエネルギーを犠牲に相手のエネルギーを
ごっそり削り取る反則能力もあり、並みの相手であれば軽く斬り伏せることが出来るが
使い手を選ぶ機体だ。

そのパイロットである織斑一夏は、ついこの間まで全くの素人であったが、持ち前の
向上心と誰かを守るようになりたいという信念で、一年生の中でも上位に入る腕前と
なっている。

対する真琴の機体『打鉄・甲』は日本製第二世代『打鉄』の改修機である。

元々、防御に秀でた『打鉄』を更に防御に特化させるために装甲を増やし、肩部のシ
ールドも材質を変更して更に硬く仕上げつつ、スラスターを搭載し機動力を確保、追加し
た装甲の各所にもスラスターを追加搭載しており、重々しい見た目に対し中々の機動性
を持っている。

武装も滑腔砲と同軸機銃、カーボンブレイドの他多数の装備を搭載している。

パイロットの熊谷真琴は、長身とあの織斑千冬に匹敵する身体能力を持つているのだ
が、争い事が嫌いで超が付く程のインドア派であり、本を与えればずっと読み続け、そ
の間は梃子でも動かないことで有名である。

そんな彼女だが、何処で何を間違ったのか国家代表候補生になってしまい、あれよあ

れよと次期国家代表とか『荒熊』とか呼ばれる様になり、最近ではラウラになつかれた影響か『母熊』とか『ママ熊』とか『ママ』とか呼ばれている。

正直な話、『荒熊』より『母熊』の名で呼ばれることの方が多い。

そんな二人が何故、戦っているのか。それは以下の通りである。

「真琴、今日の放課後空いてるか？」

「・・・やだ・・・」

「そんなこと言わずに！この通り！」

「・・・！・・・いい・・・よ」

「よっしゃー！」

一夏が差し出したのは、真琴が好きな作家の一人『ミルズ・エーカー』の最新作『蒼い空に祈りを』であった。

発売日に早起きして、寝惚けたラウラを背中に貼り付けて最寄りの本屋に急いだが、着いた頃には完売しており、次回入荷も未定という事態で半ば諦めかけていた時に、まさかの人物がそれを持っていたのだ。本を差し出されて飛び付かない真琴ではない。いとも簡単に承諾してしまった。

これが今回の戦いの顛末である。

では、そんな二人の決着は？

「オラー！」

「来ないで……って……言ってるの」

残ったエネルギー量から、次がラストチャンスと悟った一夏は真琴の射撃の隙を突き、一気に加速し突撃を敢行した。

「ダアアアアアアアッ！」

一夏は勝利を確信

「クルナト……イッテルノニ……」

「嘘やん……」

したと思ったが、確定したのは一夏の敗北だった。

突撃を敢行した瞬間、右背のスラスタを撃たれ体勢を崩した処を真琴のカーボンネットに捕まり、脱出しようともがいているところに、左腕に搭載されたジェル発射管から発射されたジェルにより、何故かあの有名な『シエーの体勢』で固定され落下、そのままエネルギーが切れるまで滑腔砲を撃たれ続けた。

『試合終了！勝者、熊谷真琴！』

「やっとなんて終わった……」

大嫌いな戦いが終わり、やっとなんて本が読めると思った真琴であった。

だが、無情なアナウンスが担任教諭の声で告げられる。

『第二試合、熊谷 真琴対鳳 鈴音！』

「え……なんで……?」

「真琴、騙して悪いけど、あの本、結構高かったんだから、そう簡単に持つてかれたら困るのよ」

「そん……な……」

ガツクリと項垂れる真琴だが、次第にプルプルと震えだした。

鈴は、自分をジト目で睨んでいる真琴を見て、すぐに自分の過ちに気付く。やっち

「織斑先生く、おりむーの回収完了でくす」

「ふむ、ご苦労。布仏、織斑を機体から引き剥がして、シャワールームにでも叩き込んでおけ」

「りよ〜か〜い」

指示を出すのは織斑千冬、初代ブリュンヒルデにして真琴が『荒熊』と呼ばれる原因を作った張本人である。

「諸君、先程の試合から勝負を決めるのは、機体性能だけでなくパイロットの技量も必要だと言うことがよく分かった筈だ。良きパイロットに成りたければ訓練を欠かすな」

「はいー」

「宜しい、良い返事だ。だが諸君、只訓練をすれば良いという訳ではない。無茶な訓練をした身の程知らずは、必ずと言って良いほどあなる」

千冬が指差す先には

「それじゃく、おりむー逝ってみよう〜」

「待って！ノホホン〓サン！字が違うし、俺の背骨はそっちには曲がらなッ！」

「ヴー・・・ヴー・・・」

「グワー！グワー！」

「落ち着くんだ母様！それ以上は鈴が『鈴だったもの』になっちゃおう！」

そこには地獄があった。一夏は白式に下半身が残った状態で上半身があらぬ方向に垂れ下がりプラプラと揺れており、その回りをダボダボ袖のノホホンサンが謎の踊りを踊りながら回る。

鈴は、騙して悪いがしたため、真琴にクマーされていた。クマーのされ過ぎで何か別のものに成りかけているが、ラウラがそれを止めていた。

「分かったか？」

「「Hai ! !」」

「宜しい、諸君遅くまでご苦労。明日の授業は、これまでの復習として小テストのみとする。普段より早く授業が終わるから訓練なり休息なり自由にすると良い。では、解散」
「先生！熊谷さんボーデヴィツヒさんを抱っこしたまま、ヘヤノスミスの元で蹲つて離れませんか！」

「熊谷」

「・・・や・・・」

「母様」

「・・・やなの・・・」

完全にいじけてしまった。

その後、千冬が一夏と鈴の財布から『ミルズ・エーカー』の作品を買い与え解決した。

因みに、『ミルズ・エーカー』の作品を買う千冬の顔は、とてもビミョーな表情であったという。

後日、真琴には『本読み熊』の名が追加された。

三冊目

IS 学園1200号室、通称「熊兔図書館」。IS 学園内でも随一の蔵書量を誇る図書館である。

間違えた、真琴とラウラの部屋だ。

学園で本を捜すならまずはここに行け、ここに無ければ図書館だ。と言われる部屋だが、あくまでも、寮の一室である。

その1200号室に來客が來た。

「真琴ラウラ、居る?」

扉をノックし声をかけるのは、フランスの代表候補生『シャルロット・デュノア』だ。貴公子然とした少女で、編入当初はクマクマウサウサ色々あったが、今となつては何の問題も無く日々を過ごしている。

「あれ、居ないのかな?」

この「熊兔図書館」には、絶対のルールがある。これを守らなければ、ここを利用する資格無し。余りにいきすぎればこの主にクマーされる。

そのルールとは

一つ

「入る前にはノックと声かけを」

これは全室共通のルールだが、ここだけは何かがあっても絶対である。

何故なら、蔵書の整理の為に模様替えをしている時があり、最悪の場合、扉を開けた瞬間に本の濁流に飲み込まれ行方不明になる可能性があるからだ。

実際、ある生徒会長がやらかして二日程行方不明になっていた。

二つ

「本を捜す場合は事前に連絡を」

本は作者の名前で五十音順でシリーズごとにキツチリ整頓されているが、蔵書量が余りにあまりな量の為、素人では見付けるのに時間がかかりすぎるからである。

三つ

「本を読んだら感想とかくれると嬉しいな」

これは絶対ではないが、これをする主がとても喜ぶ。場合によっては、その人に合ったクマクマ厳選シリーズもしくはウサウサ厳選シリーズが貸し出される。

この厳選シリーズはファンが多く、教員にも利用者がいる。

扉の前で首を傾げるシャルロットも、そのファンの一人である。因みに、シャルロットは恋愛小説や伝奇物を好む。

お気に入りには、世界の中心で叫んだり、アニメ化もされたある漬物の略称で親しまれる作品である。最近では、ライトノベルの皮を被ったヘビーノベルにも手を出している。

「真琴のことだから、休みは部屋に居る筈なのに」

あれー？と再度首を傾げていると、部屋から半袖短パンの小さな司書が顔を出した。

「シャルロットか、どうした？」

「あ、ラウラ。真琴居る？」

「母様なら、隣で本棚の整理をしている筈だ」

「そっちなー」

1200号室の隣、1201号室は「第二熊兔図書館」として絶賛稼働中なのだ。

一時期、増えすぎた真琴の蔵書が問題になっていった。処分しようにも個人の持ち物だし、これと言って問題のある書籍がある訳でもないし、おまけに哲学書や学術書もあるし、何故か歴史的に貴重な文書まで見付かる始末であり、寮長である千冬が頭を抱えていたが、読書仲間の学園長『轡木 十蔵』の鶴の一声により、使っていない隣の部屋を書庫として使用することになった。

近々、「第三熊兔図書館」が開設予定である。

「母様に何か用なのか？」

「ほら、もうすぐ臨海学校でしょ。だから、水着とか買いに行かないかなって」

「母様なら、臨海学校には行かないと言っていたぞ」

「はい？ラウラ、今何て」

「母様は、臨海学校には行かないと言っていたぞ」

「ラウラ、ごめん。ラウラが何を言ってるのか分からない」

「？ 変なシャルロットだな。母様は臨海学校には行かないぞ」

臨海学校に行かない？何を言ってるんだ？

「えつと、ラウラどうして？」

「ふむ、シャルロットも知っているだろう。母様は露出をととても嫌うことを」

「うん」

確かに真琴は露出を嫌う。制服は皆（ノホホンⅡサン以外）半袖になり始めたというのにいまだに長袖だし、IS スーツも自分達のと違い露出は最低限、機体もほぼ全身装甲でこれまた露出は最低限。

一夏は装甲で押し上げられた胸に目がいつていたが、同性の自分達もそうだったのだから、異性で年頃の一夏は仕方無いとして赦してやった。

「いやでも、それなら水着にならなきゃ良いだけだよね」

「そうだな。だが、シャルロットよ、加えて母様は超インドア派だ」

「え？あ、うん」

確かに真琴は超がつく程のインドア派だ。休みの日はラウラにせがまれるか、自分達が誘いでもしない限り部屋若しくは図書館から出ない。加えて誘っても、気づけば本屋にフラフラと消えている。

「だから、行かないと？」

「うむ、因みに私も行かない！」

「いや、なんでそんなに誇らしげに言うのさ？」

「母様が行かないのであれば、私が行く理由は無いからだ！」

このお母さん大好きっ子め。誇らしげに胸に手を当て、フンスフンスと鼻を鳴らすラウラがだんだん子熊に見えてきたシャルロット。今学園では『ラウラ子熊派』と『ラウラ子兎派』による熾烈な争いがクマクマウサウサと繰り広げられている。

まあ、『熊兎図書館』の名から分かるように子兎派が優勢のようだが

「えっと、皆が臨海学校に行ってる間はどようするの？」

「うむ、私は母様に目一杯甘える！母様は本を読むか、第三図書館の開設の準備をするらしいぞー！」

ウーン、あの親にしてこの子ありといったところだろうか？

だが、このままではいけない！このままでは干物熊の出来上がりだ。若干手遅れな気もするが、まだ間に合う筈だ！

「ダメだよラウラ！」

「どうしたのだ？ シャルロット」

「それじゃあ、親子揃って干物になっちゃうよ！」

「その何が悪い」

「某フロムの死神のマネは良いから！ 鈴に借りてるんだね？ 次僕に貸して！」

「ふむ、鈴に頼んでおこう」

「お願いね、じゃなくて！」

「む、要らないのか？」

「いや、要るけど。それは置いて、買い物に行こうよ」

「むう、母様に聞いてみるか」

「うん、そうだね」

一人で1201号室の扉をノックし、中に居るであろう真琴を呼び出す。

「母様、居るか？」

「・・・どう・・・したの？・・・ラウラ・・・」

「真琴、ヤツホ」

「・・・シャル・・・やつ・・・ほ・・・」

中から顔を出した真琴は白のブラウスに黒のロングスカート、その上に紺のエプロン

という出で立ちであった。

「真琴、買い物に行こうよ」

「え．．．なん．．．で？」

「母様、臨海学校に行く為の水着を買いに行こうと、シャルロットから誘いを受けたのだ」

「．．．や．．．」

「いや、真琴。あのね？」

「．．．やなの．．．」

「母様」

「．．．やー．．．なの．．．」

拒絶の意思を示し、閉じられかけた扉の隙間にシャルロットの脚がダイナミックエントリーし、それを阻む。

「真琴、行こうか」

「．．．シャル．．．怖い．．．よ．．．？」

「行こうか」

「．．．う．．．うん．．．」

真つ黒な優しい笑顔を浮かべて、微笑みかけるシャルロットに従うしかない真琴で

あつた。

余談だが、熊は蛇が苦手であるらしい。けつしてシャルロットの後ろに巨大な蛇が見えたとかそんなことはない。

少しだけ怯えながら、エプロンを外して外出の準備を進める真琴であつた。

四冊目

シヨツピングモール『レゾナンス』市内最大のシヨツピングモールです。

今日は、臨海学校の為に水着を買いに来ました。

本当は来たくなかったですが、シャルが怖いから来ました。シャル怖い、蛇怖い。

「やっぱり、休日には人が多いね」

「うむ、そうだな。母様、大丈夫か？」

「・・・大・丈夫・・・だと・・・思う」

ええ、大丈夫ですよ。大丈夫ですとも

『おい、見ろよアレ』

『うお！三人共カワイイじゃん』

『奥の背の高い娘、見てみるよ』

『デカイな』

『何処がだ？』

『背だよ』

『そうか・・・』

『・・・すまん・・・嘘ついた』

『気にするな、誰だつて嘘くらいつくさ』

ごめんなさい、大丈夫じゃありませんでした。見られています、誰か助けてください。うう、私が少し薄着で外出するといつもこうです。私だつて、好きでこんなに大きくなつた訳じゃないんですよ。

この間、身長を測つたら198cm になつてましたよ。いつの間にか、3cm も伸びてました。クスン・・・

シャルとかラウラぐらいなら、こんなに見られることもないんですかね？

「母様、こつちだ」

「真琴、こつちこつち」

「・・・待つて・・・二人・・・共」

あう、二人が早いです。何をそんなに急いでいるんでしょう？
待つてラウラ、引つ張らないで。シャルも待つて。

IS プライベートチャンネル

熊兔娘？ 『シャルロット』

白猫？ 『ラウラ』

二人? 『ここから離れよう』

熊兔娘? 『なんだ今の連中は! 母様をあんな目で見るとは、許せん!』

白猫? 『まったくだね! 真琴をあんな目で見ると、信じられないよ!』

熊兔娘? 『兎に角、水着売り場に行こう』

白猫? 『そうだね。あそこなら、あんな連中にはいないだろうし』

プライベートチャンネル終了

ラウラとシャルに手を引かれて到着しました水着売り場です。到着してしまいました。
た。

それにしても、さつきまで二人共プライベートチャンネルで何か話してたみたいです
けど、何を話してたんでしょう?

加わろうとしましたけど、拒否されました。もしかして、実は嫌われてますか私?
やっぱり、のつぽで根暗はダメですか。仲良くなれたと思っただけです。・・

プライベートチャンネル

熊兔娘? 『シャルロット、まずいぞ。母様がどんどん暗くなってる!』

白猫? 『さつき、アクセス拒否したからかな?』

熊兔娘？ 『確実にそれだ！私としたことが抜かった、母様は気にしないのだ』
白猫？ 『どうしよう、ラウラ』

熊兔娘？ 『ぬう、ここは水着売り場から本屋に移動するか？』

白猫？ 『でも、もう着いちやったよ！』

二人？ 『これは詰んだ！』

??? 『私に良い考えがありますわ！』

プライベートチャンネル中断

二人がまたプライベートチャンネルで話しています。けど、やっぱり私はアクセス拒否されています。

ラウラ、母様と呼んで慕ってくれてると思ってきましたが……
何でしょう？私のチャンネルにアクセス申請が来ました。

プライベートチャンネル再開

蒼雫？ 『真琴さん、お早うございます』

本熊？ 『セシリア……おは……よう……』

熊兔娘？ 『あ、母様。やっと繋がった』

本熊? 『ラウラ・・・どう・・・いう・・・こと?』

白猫? 『いやね、さつきまでチャンネルが変に混んでたんだよ』

熊兎娘? 『うむ、それで母様が入れなかったのだ』

蒼雫? 『それで、私がチャンネルを拡大した。ということですよ』

本熊? 『そう・・・なの・・・良かった・・・』

蒼雫? 『そう言えば、三人共何処にいますの?』

白猫? 『レゾナンスの水着売り場にいるよ』

熊兎娘? 『母様の水着を買いに来たのだ』

蒼雫? 『まあ!それを早く言ってくださいな!私も合流いたしますわ!』

本熊? 『セシリア?どう・・・したの・・・』

蒼雫? 『真琴さん、待っていてくださいね。ビーチの視線を独り占めにする水着を選

んで差し上げますわ!』

本熊? 『待つて・・・セシリア・・・』

蒼雫? 『真琴さん、今行きますわー!』

プライベートチャンネル終了

どうでしょう、セシリアが壊れました。

「ラウラ・・・どう・・・しよう・・・」

「母様、ああなったセシリアは止められん。諦めてビーチの視線を独り占めにするしかない」

「織斑先生か箒がいたら、止められるだろうけど」

「二人共・・・いない・・・よ」

「諦めるしかないな(ね)」

「あう・・・」

このままでは、なんか凄い水着を着せられてしまいます。

誰か助けてください。

最悪、一夏と鈴でも良いです。あ、ダメです。あの二人、今日追試でした。

実技は上の方なのに、座学はダメダメでしたねあの二人。

まったく、もう。

『見て見て。あれ、「荒熊」と「貴公子」と「冷水」じゃない?』

『うわ、ホントだ!仲が良いってホントだったんだ』

『ラウラちゃん、オーバーオールにキヤスケツトってカワイイわー』

『それを言うなら、シャルロットさんだってポロシャツにミニスカートでシンプルで良いじゃない』

『それじゃあ、「荒熊」は?』

『白のブラウスに黒のロングスカートとつばの広い帽子、八尺様かな?』

私は子供を扱いませんし、ポポポとも言いません。それに八尺様は白のワンピースです。黒のロングスカートじゃないです。

しかも、私だけ名前で呼ばれてない。シヨックですよ。クスン・・・

「移動しよつか?」

「そうだな。母様、あそこの喫茶店に入ろう。あそこのクレープは美味しいぞ」

「そうなのラウラ?」

「うむ、休みが取れた筈と行ってきたのだ。母様が好きな蜂蜜クリームのヤツもあるぞ

!」

「蜂蜜・・・好き・・・行こう・・・二人共」

「それじゃ、行こうか」

蜂蜜は好きです。蜂蜜クリームのクレープ、楽しみです。

五冊目

クレープ美味しいです。蜂蜜クリームと蜂蜜クッキーランチがたっぷり入った上に、これまた蜂蜜がたっぷりかかって、とても美味しいです！

「フン・フン・フン♪」

熊兔娘？ 『シャルロット、母様のテンションが凄いことに！』

白猫？ 『来て良かったね！』

熊兔娘？ 『おおう、五つ目に突入したぞ！』

白猫？ 『キラツキラツしてる！真琴がキラツキラツしてるよ！』

ここ喫茶『五百蔵』は当たりですね。クレープだけじゃなくて、珈琲も美味しいです。ナポリタンやグラタンまであります。

おお！ラザニアまであります。作るのに手間が掛かるから、置いてある店は珍しいですよ。

「いちいちをどごうぞ」

「?・・・これ・・・頼んで・・・無い・・・ですよ?」

「お父さんじゃなかった、マスターからのサービスです!」

「ありがとうございます・・・ごさいます」

「良かったな、母様」

「では、ごゆつくりどうぞ」

どうやら、この店は家族経営みたいです。『吹雪』とネームプレートを胸に付けた子はマスターの娘さんみたいです。厨房に戻って行くときに、後ろで結んだ髪がパタパタしてカワイイですね。

あ、マスターが手を振ってくれました。

「私・・・より・・・背の・・・高い人・・・初めて・・・見た・・・」

「うん、僕も初めて見たよ」

「居るものだな」

ここの料理は、あの人を作ってるんですね。人は見かけによらないという実例を見ましたよ。

そう言えば、奥さんも背が高かったような。

「しかし母様、凄いパフエだな」

「蜂蜜尽くしだね」

「豪華・・絢爛・・」

「蜂蜜尽くしパフェ最高です！私ここの常連になります！今決めました！」

「皆さん、お待たせ致しましたわ」

「やあ、久しぶりだな。皆」

「箒だ、休み取れたの？」

「ああ、久々に取れたよ。真琴、お前は相変わらず蜂蜜が好きだな」

「箒ちゃん・・・やつ・・ほ・・・蜂蜜は・・人類最高の・・発見だよ」

「ふふ、そうかそうか」

「箒よ、何故母様の頭を撫でるのだ？」

「なんだ？ラウラも撫でて欲しいのか」

「うむう、悪くはない」

「箒ちゃんは、昔から格好いいなあ。ラウラの頭を撫でる姿も様になるなんて、私もあんな風になりたいなあ、無理かなあ。無理かなあ。無理ですね、はい。」

「箒さんとは、そこで合流しましたの」

「うむ、学園に戻るのに土産でも、と思ってな」

「そうなんだ」

「ああ、そしたらセシリアから真琴が水着をかうと聞いてな、これを逃す手はないだろう

「？」

「あう……」

「僕達四人で、真琴を変身させちやおうよ！」

ああ……箒ちゃん達が悪い顔してます。逃げたい、けど逃げたら、後が怖いです。これ、詰みましたね。

「では、真琴が食べ終わったら行こうか」

「うん……」

ああ……誰か助けてください。

「ふむ、これはどうだ？」

「ん、真琴に赤は少し合わないかなあ」

「あの……それ……布が……」

「なら、これはどうですか？」

「セシリア……それも……紐……だよ」

「母様、これならどうだ！」

箒ちゃんが真つ赤なビキニに、セシリアが紐を渡してきました。セシリアが、私をどうしたいのか分かりません。

ラウラは着ぐるみを持ってきました。私サイズの熊着ぐるみなんてよく有りましたね。

しかし、何故に着ぐるみ？ラウラ、お母さん貴女の考えが分かりません。

「やつぱり真琴には、紺とか藍色が合うんじゃないかな？」

「白も合いそうだな」

「黒はどうだ、母様は色白だから黒が映える！」

「確かに、真琴さんの肌は白いですから黒が映えますわね」

「ヘヤノスミス、ヘヤノスミスの元へ逃げたい。なんで、どれも布が少ないんですか？流行りなんですか、そうですか。後、セシリアはなんでその紐から手を離さないんですか？着ませんよ、意地でも。」

「うむ、黒も良いが、問題があるぞ」

「なんだ箒、問題とは」

「単純なことだ、真琴サイズが無い」

「「はっ！」」

「なんで・・・皆・・・私の・・・胸を・・・見る・・・の？」

なんで私の胸を見るんですか？ラウラ、自分のと見比べるのはやめなさい。鈴みたいなことになりますよ。

「むう、一番大きいヤツでもダメだな。はみ出る」

「あうあ・・・」

「うーん、紺も藍色もダメだね。はみ出るよ」

「ううう・・・」

「赤もダメですわ、はみ出ます」

「へうう・・・」

「この白ならどうだ！」

ラウラが白のビキニを持ってきました。おお、布が多い。

さすがはラウラです。

「ふむ、真琴。早速試着してみろ」

「・・・うん・・・」

試着室に入り水着を試着してみますが、少し狭いです。

白猫？『どうかかな？入るかな？』

蒼雫？『それは、水着、試着室、どちらですの？』

上から、箒ちゃん、セシリア、シャル、ラウラの順です。破壊力つて、どういうことですか？箒ちゃん。

セシリアは疲れてますか？

シャルはどうしたんですか？

ラウラ、格好いいって何かが違う気がしますよ。

「真琴、それにするか？」

「・・・うん・・・」

これにしないと、後が怖いですからこれにします。

この後、レジでお金を払って買いました。人生初ビキニ。

恐らく、最初で最後のビキニです。

来週の臨海学校、中止にならないかな？なりませんよね、わかっています。クスン・・・

六冊目

「私が、専用機持ちになった理由？」

「うん、箒は僕達と違って、代表候補生じゃなかったよね？」

帰りのモノレールでシャルが箒ちゃんに質問をしました。確かに、箒ちゃんは私達と違って代表候補生じゃないですし、何処かの企業所属という訳でもなかった筈です。

「なに、簡単な話だ。姉さんが作った新型機のテストパイロットという名目になったんだ」

「篠ノ之博士の作った新型機！」

「うむ、後は、簡単な検証の為だな」

「検・・証・・？」

どういふことでしょうか？

「これは一夏も同じなのだが、私達二人の姉は I S 適性が S クラスだ」

「ええ、そうでしたわね」

「そこで、血縁のある私達に専用機を渡して、適性の伸びを検証するというものだ」

「そう・・なん・・だ」

分かるような分からないような話です。織斑先生と束さんがS クラスなのは知ってましたが、血縁が関係あるのでしょうか？あ、それを確かめる為の検証でしたね。

あれ？でも、確か束さんって

「箒・・ちゃん・・束・・さん・・って」

「ああ、姉さんは頭脳的には天災、身体的にはヘッポコだ」

そうでした。束さんは頭は良いけど、その他がヘッポコでした。これは私も同じです
が・・・

この前、学園に来たときにやってた『学食プリン争奪戦』で本音にワンパンでKOされてましたね。

「まあ、姉さんのヘッポコ具合も含めての検証なのだろう」

この後、箒ちゃんによる『束さんヘッポコ伝説』が開催されました。束さんエ・・・
そして、学園に帰ってきたら、一夏と鈴が織斑先生にヘル・アンド・ヘヴンされてました。どうやら、追試の結果が良くなかった様です。

次も悪かったら、ウィータかウィータアンリミテッドのどちらか、選ばせてもらえる
です。

生身でどうやって、ヘル・アンド・ヘヴンしてるのでしょうか？

あ、私はプライヤーズとデイメンジョンプライヤーが好きです。

はいとうとう、この日が来てしまいました。臨海学校初日のバスの中は大盛り上がりです。

『織斑先生による、「勇者王誕生」でしたー!』

織斑先生、貴女がそれを歌うとは思いませんでしたよ。しかも集大成バージョン。

生徒のレクリエーションの為に、自分を犠牲にするスタイル、じゃないですね。あれは、心底楽しんでる顔です。

『続きまして、山田先生による「マジンカイザーのテーマ」です。では、どうぞー!』

どうして、そんなチョイスなんですか? いや、嫌いじゃないですよマジンカイザー。

でも、貴女のキャラじゃないでしょう。しかも、凄じ上手いし。

ん? おかしいですね。なんで、司会のさゆかが私のことをチラチラ見てくるのでしょ

う？

歌いませんよ、意地でも。箒ちゃんが「Evil shine」歌いながら、チラチラ見えますが歌いませんよ。

ですが、仕方ありません。さあ、ラウラよ。行くのです、母の代わりに歌ってきなさい。

「母様、海だぞー！」

「そう・・・だね・・・ラウラ・・・」

歌い疲れて私の膝の上で眠っていたラウラが飛び起きて、報告してくれました。

けど、ラウラ。私の胸をペチペチ叩きながら報告するのは、やめましょう。理子が凄いい目で見てますからね。

『くっ！これが持てる者の余裕だと言うの?!』

『ラウラカワイイ』

『熊ママのおっぱい枕、体験したいのです！』

『一夏?』

『俺は何も言つてないよ! 割りとマジで!』

あ、一夏が死んだ。

今日からお世話になる『花月荘』に到着しました。

女将さんに皆で挨拶して、部屋に荷物を置いた途端にセシリア達に拉致されました。

「さあさあ、真琴さん。お着替えの時間ですわ!」

「・・・あの・・・セシリア・・・?」

「僕達に任せてよ!」

「シャル・・・迄・・・」

「真琴、先に行つてゐるぞ」

「あう・・・箒・・・ちゃん・・・」

このままでは、マズイですよ。二人の H E N T A I にナニカサレテシマイマス。

誰か! 誰か助けてください! さゆかに理子も、何でサムズアップしながら笑顔で退室するんですか。救いは! 救いは無いんですか!

「お前達! 母様に何をする気だ!」

「あ……ラウラ……」

救いはありました！ラウラが、私と二人の間に立ちはだかりました。ああ、ラウラ。助けに来てくれて、お母さんは嬉しいですよ。

「フフフ、ラウラさん。良いところに来ましたね」

「さあ、ラウラもお着替えの時間だよ」

「なっ！は、離せ！くう、母様タスケテー！」

あ、ダメですこれ。HENTAIが実に無駄の無い無駄にHENTAI 的な動きと手付きで、ラウラを拘束してあつという間に、脱がせてしまいました。

「真琴、次は真琴の番だよ」

「あ……ああ……あ……こ、来な……いで……」

「良いではないか、良いではないか」

「い、いや……やー……！」

あうあー！

シャルロットだよ。突然だけど皆、やり過ぎちゃった？

いやね、これもそれも真琴とラウラが可愛すぎるのが悪いんだよ！だから、僕とセシリアは悪くないんだよ！

「シャルロットさん、現実逃避は止めに行ませんか？」

「そうだね、セシリア。でも、どうしようか？」

「ヴー！」

「フー！」

うん、どうしよう。二人してヘヤノスミスから離れてくれないよ。真琴がラウラを抱き締めながら警戒してるのが凄いカワイイけどこのままじゃ、いけないよね

「物凄い警戒音が出てますわね」

「うん、ちよつと近付いてみるよ」

「ヴァー！」

「フカー！」

危な！危なくクマーされるところだった。完全に警戒しちやつてるよ。やつぱり、やり過ぎちゃったね。

「ちよつと、箒呼んでこよう」

「そうですわね、箒さんに頼みましょう」

「ヴー！」

「フー！」

この後、箒の説得により無事に二人をビーチに連れ出すことに成功したよ！箒にメツチャ怒られたし、二人にまだ警戒されてるけどね。

酷い目に会いました。シャルとセシリアは暫く許しませんよ！

それよりも、今は視線が痛いんです。私が何をしたって言うんですか？

『見て！ママが水着着てる！しかも、白ビキニ！』

『リアーデ、負けそうだからってそんなこと言って・・・嘘やん・・・』

『何なのよアレ！理不尽！理不尽よ！』

『ボン！キュツ！ボン！どころの話じゃ無いわ！』

『ドン！キュツ！バン！よ！』

『オノレー！これが胸囲の格差社会かー！』

『アオバアミチャイマシタア』

ううう、箒ちゃん。箒ちゃんは何処に！

「フハハハハハハハハハ、一夏よ！専用機のテストやら、なんやかんやで取れなかったコミュニケーションとスキンシップを今取ろうではないか！」

「ウオオオオオオ！燃えろお！俺の中のナニカー！今の箒に捕まったら鈴みたいに死ぬ！」

うわーい、箒ちゃんが一夏を追いかけ回してる。今まで一夏に会えなかった分、はっちやけてるなあ。

あ、鈴がまた跳ねられた。

「母様、あそこの影で休もう。私は疲れた……」

「だね……休もう……」

「母様、抱っこ」

「……うん……」

いい感じの木陰があつたので休むことにします。何もしてないだろって？ナニカサレタから休むんです。

ああ、ラウラが温い……癒される……

七冊目

疲れたので、ビーチにある木陰にシートを敷いて座りラウラを膝に乗せて休んでます。

それにしても、ラウラが、ラウラが温いです。ぬつくぬくですよ。

暑くないのかって？では、皆さんラウラに抱っこをせがまれて断れますか？断れないでしょう。つまりは、そういうことです。

ああ、温い。癒されます。

「うー……」

「……んー……?」

あれれ？ラウラー、おい。

「……ラウラ……寝てる……の……?」

「(ーわー)スヤア」

「……寝て……る……」

「(ーわー)スヤヤア」

寝てますね、これは。バスの中でも寝てたのに、まだ寝ますか。夜寝れなくなっても

知りませんよ。

アレですか？寝る子は育つという奴ですか。仕方ないので、鞆からバスタオルを取り出してラウラをクルクルと包んでおきます。風邪をひいたら大変ですからね。

「(ーωー) ススヤア」

「・・・あれ・・・ミノム・・・シ・・・みたく・・・なった・・・」

おかしいですね、何故ミノムシに？ああ、私サイズのバスタオルだからですね。

「本・・・を・・・読もう・・・」

「蒼い空に祈りを」の続きを読みましょう、そうしましょう。バスの中では、何だかんだいって読めませんでしたからね。

「・・・平・・・和・・・」

「(ーωー) ススヤヤア」

平和ですね。

「フッフハハハハ！どうした一夏よ！お前はそんなものか?!」

「ウオオオオオ！外野ア、援護してくれえ！こんな無理だあ！」

箒ちゃんが一夏とドッチボールをしている様ですが、箒ちゃんのテンションが凄まじいことになっていて、一夏側の生存者が一夏しか居ません。うん、平和ですね。

「ふむ、熊谷。混ざらんのか？」

「あ・織斑・先生・」

織斑先生が現れました。ドセクシーな黒ビキニを着て。山田先生も一緒です。

『織斑先生が来たわよー!』

『山田先生もいるよー!』

『三人共、なんて装甲なんだ!』

『オ・ノーレー!』

何故それほどまでに胸に執着するのか、私には分かりません。

母性の象徴ですか? だからラウラが抱き着いてくるときに、顔を埋めたり枕にしたりするんですね。なるほど、分かりません。

「ほれ、ラウラは私達が見ていてやるから、行つてこい」

「・・・え・・・でも・・・」

「そうですよ、熊谷さん。折角の海なんですから、遊ばないと損ですよ」

「・・・いや・・・あの・・・」

「そういうことだ。熊谷、そのミノムシラウラを渡せ。今日は、私が抱っこする」

織斑先生が変なことを言い始めました。まだ、おかしくなるような暑さでは無い筈なのですが・・・

「織斑先生、どうしたんですか?」

「なんだ山田君、何か文句でも？」

「いえ、そういう訳では・・・」

「私はな、ドイツで教官をしていた時からラウラを、ベタバタに甘やかしたかつたんだ！」

なんか今までに無いくらい真面目な顔で宣言されました。織斑先生のキャラが、完全に崩壊しています。

「えつと、織斑先生？」

「ギューツとしたり、頭撫でたり、お菓子あげたりしたかつたんだ！母と呼ばれたり、姉と呼ばれたりしたかつたんだ！」

「織斑先生？あつ、この人お酒入ってる！」

仕事中の飲酒はアウトですよ、織斑先生。

「だから熊谷、そのカワイイラウラを渡せ。大体、なんだそのミノムシ具合は？只でさえカワイイのに、可愛さに磨きを掛けよって！実にけしからん！」

「織斑先生！あつちで休みましょ？ね！」

「離せー！私はラウラを抱っこするんだー！」

ああ、織斑先生が山田先生に回収されていきます。天下のブリュンヒルデも、お酒が入るとあんな風になるんですね。

「真琴、こつち来ないの？」

「あ……鈴……生き……てた……」

「死んでないわよ！」

良かったですね、鈴は生きてましたよ。箒ちゃんに跳ねられて、きりもみ回転しながら飛んで砂浜に頭から突き刺さったりしてたのに生きてましたよ。丈夫ですね。

「(ーωー) スヤヤヤア」

「なるほど、ラウラがぐつすりという訳だからか」

「……うん……」

そうなんですよ。ラウラがぐつすりすやすやオネンネでミノムシな訳で、離れられませんが。放っておいたら、何処かに転がっていきますよ。

「ほら、ラウラ。そろそろ起きなさい」

「うー……や」

「や、じゃないのよ。や、じゃ」

「やー」

ちよ、鈴！ま、やめ、ラウラが膝の上でモゾモゾ動いて、くすぐりたいです。

あつ！鈴、待って！それを引っ張ったら……！

「あ、真琴。ゴメン」

「……………?!」

『ママがポロリしたわよー!』

『ポロリじゃないわ! あれは、ボロンよ!』

『水着がずれただけで揺れるとか……』

『消える、私が消えてしまう……これは、面倒なことになった……』

『あの……真琴?』

「……………」

「真琴? わざとじゃないのよ。事故! そう事故なのよ! ね、分かるでしょ? 同じ代表候補生じゃない」

「……………」

「ま……と?」

「……………(#)」

突然ですが、中国の代表候補生 鳳 鈴音。逝ってきます!

(ω) ヽ

『鈴が消えた?』

『ママのクマーパンチが炸裂したわ!』

『あそこよー!』

『鈴が、水切り石みたいに水面を跳ねてる!』

『あ、沈んだ』

うとう、だから!だから、嫌だったんです!こんな露出の多い格好!

もういいです!旅館に帰ります!

ほーき? 『真琴、暇か?』

本熊? 『あうう・・・箒ちゃん・・・』

ほーき? 『ふむ、真琴。みなまで言うな、分かっている』

本熊? 『うとう・・・』

ほーき? 『旅館に帰って来い。いつものメンバーで昼食でも摂ろうではないか』

本熊? 『え・・・でも・・・鈴・・・は・・・』

蒼雫? 『鈴さんなら、本音さんが回収済みですわ』

ほーき? 『そういうことだ、鈴の奢りで昼食、良い響きだな』

本熊? 『それ・・・なら・・・行く・・・』

ほーき? 『うむ、では旅館の中にある喫茶でまっているぞ』

本熊? 『うん・・・』

悪いことの後には良いことがある、と言いますが、正しくその通りの様ですね。

「む、母様？」

「ラウラ・・起きた？・・・お昼・・ご飯・・行こ・・・」

「もうそんな時間か、行こう母様」

「・・うん・・・」

鈴の奢りなら、容赦はしません。久々に思いつきり食べてやります！

覚悟しなさい！鈴の財布！

八冊目

ふんふんふん♪冷やし中華美味しいです！冷やし中華モグモグ冷やし中華モグモグ！

「あの、真琴。もうその辺で・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・(#。D。)カツ！」

「(。ω。。)スンマセン」

鈴が何か言ってますが、知りませんよ。ふむり、ゴマだれの次はどうしましょうか？
おお、ミートソース風なんてあるじゃないですか。いや、でもここは、あつさりレモン風味でいきましょう。

ミートソース風は、その次です。

「すい・・・ません・・・この・・・あつさり・・・レモン風味の・・・冷やし中華・・・ください」

「はい、少々お待ちください」

ミートソース風の次はサラダウドンも良いですが、冷たいものばかりなので、温かいものをいきましよう。

担々麵とか良いですね。いえ、ちゃんぼんでしょうか？

「すずね？ 『突然ですが、私の財布が早々に轟沈した件について』

ほーき？ 『お前が悪い』

白猫？ 『鈴が悪い』

蒼雫？ 『鈴さんが悪いですわ』

熊兎娘？ 『自業自得だ』

白夏？ 『シカタナイネ』

「すずね？ 『あんたら、反応早すぎでしょ。お願いします！ 援助してください！』

約全員？ 『ガンバ！』

「すずね？ 『クソー！』

本熊？ 『（#。D。）カッ！』

「すずね？ 『（∩・ω・∩）スンマセン』

「母様、それで午後はどうするのだ？」

「・・・えつと・・・」

「どうでしょうか？ 私としては、旅館に引つ込んで本を読みたいのですが、ラウラは

遊びたい様ですしどうしましょうか？

あ、冷やし中華が来ました。

「午後はゆつくりするのも、有りかもしれんな」

「え、ビーチバレーとかどう？」

「それも、良いかもしれませんわね」

「真琴はどうする？」

レモン風味はさっぱりしてて良いですね。次はどうしましょう、ミートソース風味も良いですが担々麺も捨てがたいですね。

鈴の奢りですから、気にせず両方いきましよう。

「…このミートソース…風味と…担々…麺…追加…お願い…します」

「真琴ー、おーい」

「…どう…したの…一夏…」

「真琴は午後、どうする？」

さあ、どうしましょうか？本を読みたいのですが、結構食べましたし、腹ごなしに運動というのも有りかもしれません。

あれ？これ、さつき同じ様なこと考えてましたね。

「…うー…ん…遊ほ…うか…な…」

「はい、ではビーチバレーに決定します」

「「おー」」

ビーチバレーですか、悪くないですね。ミートソース風味が来ました。ふむ、思ったよりあつさり目ですね。ミートソースというよりトマトソースといった感じですよ。

この分なら、担々麺も期待できそうです。

デザートは、かき氷、アイスどちらにしましょうか？

蜂蜜アイスが有ります！蜂蜜アイスLサイズに決定です！

「蜂蜜・・・アイス・・・の・・・Lサイズ・・・追加・・・お願い・・・します」

「母様、私も同じの」

「アイス・・・追加・・・Mサイズ・・・お願い・・・します」

「鈴？しつかりしろ！鈴！りん！」

一夏、うるさいです。

『IS 学園ビーチバレー大会はママの圧倒です！』

『ママが凄い！』

『ぼるんぼるんしよるん』

『シャツの上からでも動きが分かるなんて……』

ビーチバレーです。また、あんなことが起きないようにしっかりとシャツを着用しての参戦です。

「一夏ー！しつかりして！だから、言っただ。真琴のアタックをブロックするのは自殺行為だつて！」

「おおお、一夏の首が変な方向に曲がつて、ピクンピクンしとる」

やり過ぎましたかね？でも、ラウラ狙いなんてやろうとしたのです。許しませんよ。

因みに、次はシャルです。どうやら、一夏チームの司令塔はシャルの様なので徹底的にいきますよ！

あれ？バレーつて、こんなのでしたっけ？

「母様ー！がんばれー！」

「ラウラー！やめてー！今の真琴にその応援はダメー！」

「フフフフ、ラウラはカワイイなあ。ほら、たこ焼き食べるか？」

ウフフフ、ラウラ。お母さん頑張っちゃいますよ！後、織斑先生？ラウラの面倒見てくれるのは良いのですが、あまりお菓子とかあげすぎないでください。

晩御飯食べなくなっちゃうんです。

あああ、たこ焼きの次はフライドポテトなんて、後でほんほん痛くなっても知りませ

んよ。

あ、山田先生まで！

あれ、ラウラが織斑先生の膝の上にいるということは、今私一人ですか？

「今がチャンス！」

ところがどっこいクマー！

「ああん、ヒドウイ！」

クマクマクマツ！シャルよ、その程度の攻撃で私の防御を破ろう等、片腹痛いですクマー。

『織斑君チーム生存者0、ママの圧勝です！IS 学園ビーチバレー大会はママが圧勝しました！』

私の勝ちです！あれでも、バレーってこんなのでしたっけ？ま、いつか。

あ、ラウラ！フランクフルトまで！もう、晩御飯どうするんですか？！

ビーチバレー大会が終わって、旅館に帰ってきました。全員、水着から部屋着に着替えてグダグダしてます。

「おお、死ぬかと思った」

「一夏さん、生きてましたの!？」

「いや、死んでない死んでない。俺生きてる生きてる」

手を振りながら言ってますが、首がプラプラしてますよ一夏。

「む、なんだ？」

「どうしたの？ 箒」

「いやな、表が騒がしいなと」

「ホントね、何かしら？」

何でしょう？ 確かに騒がしいですね。

「ん、ちよつと見に行ってくる」

いえ、一夏。見に行くのは良いのですが、首がプラプラしっぱなしなんですそれがそれ

は……

「私も行こう、なんだか嫌な予感がある」

「箒ちゃん……私も……行く……」

「よし、では行くぞ」

そう言い、旅館のロビーに向かいます。ラウラ？あその後、やつぱりぼんぼん痛くなっ

て寝てます。まったくもう！

「いつたい、何の騒ぎ……」

「どうした？ 箒……」

「?……」

騒がしいロビー、その人だかりの真ん中に居たのは機械のウサミミ、不思議の国のアリスに似た格好の女性でした。

「……東……さん……?」

「そうだな、東さんだな」

「おい、何してるヘツポコ」

おお、箒ちゃん、男前ですよ。しかし、東さん顔色悪いですね。

「あ、箒ちゃん。いや、あの久々に外に出たら熱中症に……」

「何をしてるんですか？ 姉さんは」

箒ちゃんが、箒ちゃんが男前過ぎてどうしよう？ て言うか、まだ熱中症になるほど暑くはない筈ですが、そこはやはり、東さんということなのでしょう。

しかし、何をしに東さんはここに來たのでしょうか？

九冊目

結局、東さんはあのまま医務室へ運ばれました。どうやら熱中症の他に脱水症も酷かったらしく、今は点滴を受けているそうです。

本当に何をしに来たのでしょうか？治療を受けるなら病院へどうぞ、ここは旅館です。

何でしょう？プライベートチャンネルが盛り上がってますね。

ほーき？『突然だが、戦犯会議を開始しよう』

本熊？『いき・・なり・・どう・・した・・の・・？』

蒼雫？『暇潰しにH o Iのエイリアンmodをやっていたら、一夏さんが奇跡のガバプレイを』

白夏？『ちやうねん、ちよつと目離れた際にピレネー抜かれただけやねん』

白猫？『けど、その前に南仏がまるごと占領されたよね』

すずね？『正規軍が全滅して、民兵のみになってパルチザン湧きまくってたわよね』
白夏？『ぐうっ！』

蒼雫？『しかも、それを民兵スタイルとかパルチのプロとか言っていましたわね』
すずね？『後、あつという間にイベリアも取られてたわね』

白夏？『仕方ないやん、あんなとこ豚だらけやもん』

何をやってるんですか、一夏。後、イベリアは豚しか居ない訳ではないですよ。

ほーき？『そして、フランスを大量のエイリアン軍の侵入路とした』

白夏？『ちやうねん、カーチャンが何故か俺の行くところ行くところに居るのが悪いねん』

そうですね、一夏がエイリアンmod でプレイすると確実にマザーシップが一夏の
行くところ行くところに居ますよね。

一夏って、実はエイリアンなんじゃ？

ほーき？『では、人類敗北の戦犯は一夏に決定だな』

白猫？『異議無』

すずね？『異議無』

蒼雫？『異議無』

白夏？『やめろ！良いのか？俺が悪堕ちして、UFOとか乗り出しても』

一夏がおかしくなりました。いえ、元からおかしかったですね。

UFO並に不思議な物に乗っているのに、何を言っているのでしょうか？

「ん……あ、母様」

「ラウラ……起きた……の……お腹……大丈夫……夫……？」

「お菓飲んだから、大丈夫だ」

「でも……今日……の……晩……御飯……は……お粥……ね」

「何故だ?!母様」

この子、食べ過ぎでお腹壊したのを忘れているのでしょうか？ほらもう、お腹まんま
るくなってるじゃないですか。

「お腹……壊……してる……時に……食べ過……ぎ……ちやダメ……」

「だが、今日の晩御飯はプリンが出るんだ！」

まさか、プリンでここまで必死になるとは……

お母さん、貴女の将来が心配ですよ。しかし、旅館の晩御飯でプリンですか。何故ラ
ウラがそれを知っているのかは置きますが、旅館でプリンは新鮮ですね。

地元の素材を惜し気もなく使った特別なプリンなのでしょうか？

「母様、ダメか？」

ああ、ラウラ。そんな捨てられた子犬みたいな目で見ないでください。そんな目で見られたら、良いと言うしか無いじゃないですか。

「プリン．．．だけ．．．なら．．．良い．．．よ．．．」

「ホントか！やっただー！」

プリンでここまでテンションが上がるとは、驚きです。

ラウラ、落ち着きなさい。晩御飯はまだです。

先にお風呂に行きますよ。

「ラウラ．．．お．．．風呂．．．に行こ．．．う．．．」

「うむ、母様、抱っこ！」

両手を伸ばしラウラが、抱っこをせがんできます。可愛いですよう。

「先に．．．着替．．．え．．．とタオル．．．用意．．．」

「バッチリだ！だから、母様抱っこ！」

「．．．うん．．．おい．．．で．．．」

「ん！」

ああ、ラウラはやっぱり温いです。温いし柔こいし小さいし可愛いしで、良いことし
かありません。

あ、後はラウラは強いです。

「母様母様、これが温泉か！」

花月荘自慢の露天風呂に着きました。ラウラが大はしやぎですよ。

お風呂なら学園のお風呂も広いです、お風呂に居ながら外が見えるというのがラウラのテンションをはね上げているのでしょう。

「ラウラ・・・服を・・・脱い・・・でから・・・」

「うん！」

ラウラが万歳の体勢で、こちらを見上げてきます。これはアレですね、私に脱がせてほしいということなのでしょうね。

「ラウラ・・・ばん・・・ぎーい・・・」

「ばんぎーい！」

はい、シャツ脱いでズボン脱いでと・・・

すっぽんぽんラウラの完成です。

「さあ行くぞう！母様」

「待つ……て……ラウラ……」

いけません、お風呂で走ったら!

「うあー!」

ほら、言わんこつちやない。見事に転びました。

「母様」

「ラウラ……大……丈夫……?」

「おしり打った……」

ええ、綺麗にお尻から転びましたからね。しかし、このままいても仕方ないので、早速体を洗いましょう。

「ほら……ラウラ……体……洗ってか……らね……」

「うん」

はい、シャンプー手に取ってワシャワシャ。最近ラウラは、シャンプーハットを卒業したのです。凄いでしょ?

若干ふるふるしますが……

では、洗い終わったらお風呂に浸かりましょう。

「母様、学園のよりも広いぞ」

「ラウラ……泳い……じゃ……ダメ……」

手を伸ばしラウラ捕まえ抱き寄せると、素直に抱き着いてきました。

さゆか、理子、何ですかその目は？

『浮いてる……』

『正しく、ママ、sアイランド……』

『おおう、ラウラちゃんの形に歪んで……』

ヨッシーアイランドみたいに言わないでください。

ほら、ラウラ。肩までちゃんと浸かりなさい。そうです、はい100数えたら出ましょうね。

その後で、晩御飯ですよ。

食事の場である大宴会場です。ここに着くまでに色々ありました。

お風呂上がりのラウラを抱っこしようと、癒子や清香達が襲撃してきましたが、全員返り討ちですよ。

フフ、お風呂上がりのラウラは誰にも渡しません。お風呂上がりのホコホコムニムニ

ヤワラカラウラを抱っこするのは、母である私の特権です！

「母様、お刺身だぞ」

「・・・そう・・・だね・・・」

お刺身ですか、学園では食べる機会が中々ないので嬉しいですね。

おや？一夏がシャルとセシリアに『あーん』してますね。

おーつと、ここで箸ちやんがダイナミックエントリー！

一夏の口目掛けて、わさびてんこ盛りのマグロをシュート！超エキサイティン！

一夏の顔が梅干しと濡れ布巾を合わせた様な何かになりました。

どうやら、H o iでのガバブレイの罪は赦されていないようですね。

シャルとセシリアがほくそ笑んでいます。二人共、悪い顔しています。

「ふむ、次はもう一人のエイリアンだな」

エイリアンはもう一人いるようです。鈴、なんで私の後ろに隠れるんですか？

私も貴女を赦した覚えはありませんよ

この後、滅茶苦茶わさびてんこ盛りされた。

私はプリンを笑顔で食べてるラウラのお腹をもにしました。

お風呂上がりのラウラの柔こさは、至福の感触ですよ。織斑先生が、凄まじく羨ま
げな目で見てきますが、ここは譲れませぬ。

十冊目

モニモニモニモニ！ラウラのお腹モニモニ！ヤワラカラウラのヤワラカお腹モニモニ！

ハッ！私は何を？

「母様、どうしたのだ？」

私としたことが、ラウラのお腹の感触に惑わされてしまいました。いけませんね。

しかし、流石はラウラです。あの織斑先生が一目で堕ちたというだけのことはありません。す。

現に、私の膝の上で先程まで自分のお腹をモニモニしていた私の手を不思議そうにグニグニしています。

「・・・なん・・・でもな・・・いよ・・・」

「そうなのか？」

そうなんですよう、ラウラ。

あ、プライベートチャンネルがまた盛り上がってますね。

白夏? 『あかん、待って。なんでまた、オカン居るの?』

白猫? 『一夏が心配なんじゃないかな?』

すずね? 『いや、どういふことよ?』

蒼雫? 『一夏さんはやっぱりエイリアンだったのですね』

白夏? 『ピポ!』

ほーき? 『帰れよ! 帰れよ!』

一夏はエイリアン(確信) けど、一応は聞いておきましょう

本熊? 『一夏・・・エイリ・・・アン・・・だった・・・の・・・?』

熊兎娘? 『親孝行しろよ、一夏』

白夏? 『今、親孝行してるから待って!』

一夏は、何処の帝国式の親孝行をするつもりなのでしょうか?

ああ、フランス軍がみるみるうちに消えていく・・・

というか一夏、否定しないんですか?

白夏？ 『あ、あ、あ……』

すずね？ 『喘ぎ声やめーや』

ほーき？ 『一夏、お前……』

白猫？ 『ちよつと待つて！三軍の補充とか出たよ！』

蒼雫？ 『このタイミングで！嘘でしょう？』

白夏？ 『カーチャン……』

うわあ、これはいけません。誰がどうみてもいけません。アジア方面の業が深すぎます。

本熊？ 『皆……ちよつと……アジア方……面……見て』

全員？ 『うわあ……』

熊兎娘？ 『これは、滅びが近い……』

アジア方面は、日本以外が真っ黒ですよ。エイリアン一色です。バルト三国にエイリアン軍のタワー出来てます。

白猫？ 『箒、北海道と九州いつの間に取り戻したの？』

ほーき？ 『気付いたら、エイリアンが居なくなってた』

白夏？ 『多分、SHIMAZUとTONDENHEIだな』

蒼雫？ 『一夏さんは、早くマザーシップを何とかしなさいな』

白夏？ 『カーチャン！俺、地球でうまくやれてっから！』

すずね？ 『うわっ！アンマン抜かれた！』

もう、ボロボロですわ。

「真琴さん、織斑先生が呼んでましたよ」

「あ・・・神楽・・・」

「先生が？」

何でしょうね？ 私だけなんですかね。

「他の専用機組も呼ばれてるみたいですよ」

「・・・そう・・・なん・・・だ・・・」

「それは、今からか？」

「いえ、なんでもエイリアンと決着がついてからで良いとのことですよ」

エイリアンと決着ですか、神楽。皆、プライベートチャンネルで悲鳴をあげてますよ。

白夏? 『民兵style』

すずね? 『はいなんぐらし!』

白猫? 『ベルリンぐらし!』

蒼雫? 『イギリス軍最後の部隊ですわー!』

ほーき? 『お前達、これが終わったらエイリアンに集合な』

全員? 『はーい』

あ、負けたみたいですわね。あれは仕方ありませんね。まるで、愛と勇気のおとぎばなしの世界みたいでしたからね。

「それ・・・じゃあ・・・ラウラ・・・行く・・・」

「うむ、母様抱っこ」

ううん、ラウラはカワイイですよ。ほら、ラウラ。神楽にお礼言いましたよ。ううん、良かったです。

後で、お菓子あげますよ。

「ふむ、市民。何故貴方がそれを知っているのです?」

「え? あ、しまった!」

「ZAP ZAP ZAP ! 一夏!」

織斑先生の部屋に着きましたが、開幕で一夏がZAP されてました。しかし、何故パラノイア? さつきまでHoi やつてて次はパラノイアですか。

流石に、チョイスが濃すぎじゃないですかね。しかも、織斑先生がキーパーですか。というか、皆フットワーク軽いですね。

「さつきまでの俺はどうしようもない反逆者だったが、今度の俺はうまくやるでしょう」

「あ、真琴、ラウラ。いらつしやい」

「・・・お邪・・・魔しま・・・す・・・」

「お邪魔しまーす」

「おう、全員揃ったな」

全員揃いましたよ。あ、でも簪がいませんね。倉持技研と全面抗争してますから仕方ないと言えば仕方ありませんね。

「先生、更識さんが居ません」

「更識簪なら、抗争が最終段階に入ったそうさ。臨海学校が終わる頃には、倉持のトップの首を持って帰ってくるだろう」

「そうですよ」

何やってるんでしょうか、あの子は？一夏に初めて会った時も、一夏にハートブレイクショットからの顎に左フックを入れてましたね。その後、一夏お得意の超理解で和解しましたが。

「では、話だが。明日野外実習において、篠ノ之の専用機が到着する。というかしてる」
でしようね。箒ちゃん、プライベートトチャンネルで大活躍してますから。

「まあ、もっと詳しく言うとな機体のガワが到着する」

「そうなんですか」

「ああ、今有るのはコアとその回りのシステムとフレームだ」

「装甲やら装備やは、明日ヘツポコが調整する」

東さんえ・・・ヘツポコ扱いから逃れられないんですか？無理ですね。小学生の頃の私にかけっこ負けてましたからね。

「私からの話は、終わりだ。っと、忘れていた。お前ら、コイツの何処が良いんだ？」

織斑先生がZAP されてグツタリした一夏の襟を摘まんで、皆の前に差し出しました。

一夏、グツタリしてますが大丈夫ですか？大丈夫ですね、一夏だし五分くらいで復活しますよね。

「えっと、織斑先生？」

「なんだ？オルコット」

「本人の前で、言うのですか？」

確かに、一夏グツタリしてますがまだ生きてますから、聞かれるかも知れませんね。

まあ、私はどうでもいいですが。ラウラク、どうしたんですか？おねむなんですか？後でクトウルフやるんじゃないんですか？

「ふむ、そんなものか。どうだ、欲しいか？」

「「くれるんですか?!」」

おや、話が進んでますね。一夏のオークション会場になってますよ。いえ、譲渡会場ですかね？

おーっと、シャルが大きくりード！セシリアが巻き返しましたよ。鈴はお昼のダメージが効いているようです。あ、箒ちゃんが横から刺しました。ん？いやいやいやいや、織斑先生？それはいけません。大人げないです。

面白がってますね、面白がってますよね？あー！いけません！一夏が捻れてます。凶ってます！誰ですか？邪眼もってるの？

鈴？全財産溶かしたみたいな顔になってますよ。
ラウラ、ほくらギューしてあげますよ。ほくら、ギュー。

「ふむ、ではコイツの所有権は保留だな」

「「そ、そうですね」」

どうやら、一夏の所有権は保留になったようです。一夏、バツキバツキに捻れてます生きてます？白式が稼働してますから生きてますね。ラウラ、一夏の枕元にお塩置くのはあまり感心しませんよう。でも、あの有り様では仕方ありませんね。

「明日も早い。早めに寝ろよ」

「「はーい」」

どうやら、解散みたいです。皆が自室に戻りますが、織斑先生が何か思い出した様です。

「あ、そうだ。明日、ナターシャ・ファイルスとイーリス・コーリングが来るぞ」

最後の最後で爆弾落としやがりましたよ、この人。

十一冊目

「はい、じゃあ先生、授業始めちゃうぞー」

あ、どうも皆さんお久しぶりです、覚えてますか？熊谷真琴です。大丈夫ですよね、覚えてますよね？ね？

……まあ、いいでしょう。右の席の貴方は許します。ですが、左の貴方は滑腔砲の刑です。冗談ですよ。

只今、私達は花月荘の前にある砂浜、昨日遊んだ場所ですね。そこにいます。

予定では、アメリカから『ナターシャ・ファイルス』と『イーリス・コーリング』のアメリカトップパイロットの御二人が来て、自分達専用機組は朝から晩まで御二人と模擬戦という鬼畜の所業が行われる筈でしたが、到着が遅れるらしく午前は今までのおさらいをします。

なんでも、ナターシャさんが飛行機に乗ったら飛行機が謎のエンジントラブルに遇ったりして墜落しかかったり、なんとか日本に到着してタクシーに乗ったらタクシーが突如爆発炎上、今は六台目のタクシーに乗っているそうです。六台目は何時まで持つので

しようか？

ナターシャ・ファイルス到着遅延、これを聞いた一夏はこんなことを言っていましたね。「なんだろう？ 死亡イベント的な何かを回避できたような気がする」

何を言っているのでしょうかね？ 私には分かりません。やはり、あれですかね。年がら年中死にかかっていると、予知的なものが身に付くのでしょうか？ その割りには、回避出来てない事が多々ある様な？

「よし、各専用機持ちを班長に出席番号順に別れる。そこ、無理に二人組を作ろうとするな。私の弟のせいで奇数なんだ、一人溢れるぞ。溢れた奴は先生と組むことになるぞ」

やめたげてよお！ はーい、二人組作ってー！ は、特定の人達のトラウマを挟みますから、やめたげてよお！

後、一夏はorz しないで早く準備しましょう。

「熊谷班長、真琴班は整列完了であります！」

「．．．それ．．．じゃ順．．．番に機体．．．に乗っ．．．て歩いて．．．みて．．．」
「了解であります！」

メンバーに指示を出しながら、私も『打鉄・甲』を起動しておきます。何かあつてからでは遅いですからね、備えは大事ですよ。

因みに、私達の班の機体は打鉄です。

「ゆつく・・りゆつくり・・確認し・・なが・・らね・・」

「ハイパーセンサー異常無し、腕部動作異常無し、脚部動作異常無し、各部出力安定。行けるであります！」

その声と共に、打鉄がゆつくりと砂浜を歩き出しました。やっぱりグラウンドと砂浜は勝手が違う様ですね。

少し歩調に乱れが見えます。

「おつとと、これは中々に」

「落ち着・・いてPIC・・。があるか・・ら大丈夫・・。夫」

PICによるバランス補正が有るとはいえ、もしもという事がありますから並走しつつ、軽く支えたりしながら予定のコースを歩き終えました。

よく見ると他の班も順調にいらしてますね。

セシリア班

「そこで右膝の角度を維持しながら、左に3cmずらしつつ5cm前進ですわ」

「わかんねーよ！」

「何故ですの?!」

シャルロット班

「よーし、良いよー。その調子その調子」

「良いなー、私もあんな風に手を引かれて歩きたい」

「次、あんたよ」

ラウラ班

「こらー！ちゃんと声出し確認しないとダメでしょ！」

「ラウラちゃん、よく注意出来ましたねー。お菓子あげちゃう」

「やったー！母様、お菓子貰ったー！」

箒班（箒は打鉄搭乗）

「うむ！次はもう少し速く歩いてみる」

「え？でも・・・」

「安心しろ、私がいる限りお前達に怪我などさせんよ」

鈴班

「足場が悪いから、落ち着いて歩きなさい」

「班長ー、ここ一組です！」

「ごまかせことはいいのよ！」

一夏班

「そのままそのまま、一歩ずつ自分のペースで」

「織斑君、膝ガクガクだけ大丈夫なの？」

「なんか、朝起きたら踵が後頭部にあった。後、昨日の記憶が曖昧」

セシリアは理論で教えるの止めましょうよ、皆混乱してますよ。ラウラく？お昼前に菓子食べたならメツですよ、メツ。

シヤルと箒ちゃんは、なんで宝塚やつてるんですか？あ、紅組と橙組の共演が始まりました。

鈴は、二組に帰りましょう。ほら、言わんこつちやない。ティナに回収されてます。一夏は、死亡イベント回避しきれてないような？気のせいですね。

「よし！午前の授業は終わりだ、各自班長の指示に従い休憩に入れ」

織斑先生の号令で、午前の授業が終わりました。お昼休憩ですが、お昼は何にしましょうか、麺類は昨日食べましたし、今日はどうしましょう。

「母様——！」

「・・・ラウラ・・・」

お昼のメニューを考えていたらラウラが飛び付いて来ました。ん、どうしたんですかラウラ？寂しかったんですか？ほくら、抱っこしてあげますよ。

「・・・ラウラ・・・ほら・・・ギユ・・・」

「(*、ω、*) ムフー！」

見てください、このドヤ顔。可愛いでしょう、あげませんよ。ラウラが欲しければ、この私を倒してから、箒ちゃんと織斑先生を倒してください。それが出来たら抱っこさせてあげます。抱っこだけはさせてあげます。

「真琴よ、どうした」

「あ・・・箒・・・ちゃん・・・」

指示を出し終えた箒ちゃんが、いつの間にか隣にいました。

「・・・お昼・・・どう・・・しよう・・・かなっ・・・て・・・」

「ふむ、ならばハンバーガーはどうだ？」

「おお、箒ちゃんが何処からともなくハンバーガーを取り出しましたよ。なんですか、イリユージョン！」

「箒・・・ちゃ・・・んがハン・・・バーガー・・・珍し・・・いね」

「ふっ、たまにはこういったジャンクフードも悪くない」

「私の分は無いか？」

おっと、いけません。ラウラを除け者にするつもりでした。

「ラウラ、そんな訳あるわけなからう。ほくら、ラウラの方だぞ」

「ワ—イ—！」

また何処からともなくハンバーガーを取り出しましたよ。箒ちゃんはイリユージョニストだったのですか！

「では、調度よくベンチもあることだ。あそこで食べよう」

「そ．．．うだ．．．ね．．．」

「行こう、母様！」

この後、三人で仲良くハンバーガーを食べました。けど、こんなところにベンチありましたっけ？昨日は無かったような？気のせいですね。

ふむ、皆の衆。久しいな、篠ノ之箒だ。風邪などひいてはいないか？そちらは季節の変わり目、体を壊しやすい時期だ。体調管理に気を付け、健やかな生活を送ると良い。

今、私は真琴とラウラの三人で昼食を摂っている。摂っているのだが、重大な問題が発生している。

隣にいる生き物が可愛すぎる！なんだ、この可愛い生き物は！皆には作者の描写力不足のせいで分かりづらいたろうが、今二人はIS スーツ姿だ。ヤバイぞ、可愛さの中にエロさが爆発している。犯罪だ、今すぐ検挙せねば！

なんだ、貴様ら？この二人が欲しければ、私を越えて見せろ！さもなくば、膾に切り刻んでやる。この二人は私のものだ、誰にもやらん！

ほら、二人共口の周りにケチャップが付いてるぞ。よしよし、ほくらキレイになった。

どうした真琴？もう一つ欲しいのか、このいやしんぼめ！ほくら、おかわりだ。

最後になったが、皆の衆。これからは季節の変わり目であり、新生活の始まりの季節でもある。

最初に言ったが、体調を崩しやすい季節だからな。体調管理には十分に注意して、新生活に胸を踊らせるが良い。

では、また次回会おう！

十二冊目

「よーし、それじゃあ先生、午後の授業始めちゃうぞー！」

「どうやら、午後の授業が始まる様です。様ですが、織斑先生の隣にいる人が、そのです。すね。」

「ねえ、ちーちゃん。あつちの日陰に移動しない？」

「却下だ！東よ、お前もいい加減に日光に慣れろ」

稀代の天災にして『IS』の生みの親でありありとあらゆる分野で活躍している科学者『篠ノ之 東』さんが、初夏の日光により死にかけています。

顔面蒼白で膝をガクガクさせながら、なんとか自分の足で砂浜に立っていますが、あの様子では時間の問題でしょう。

「篠ノ之博士、点滴を換えましょう」

「あ、ごめーん。まややん」

山田先生が東さんの点滴を交換してますが、大丈夫なんですか？その点滴、なんかパッケージに蜘蛛とグラスサンと酒瓶のマークが描かれてるんですが……

「それで姉さん、機体の方は？」

「ばつちオツケーだよ、箒ちゃん！」

どうやら、箒ちゃんの機体は完成した様です。その代償は東さんの有つてないような健康でした。寡れ頬はこけ、目の焦点は定まらず箒ちゃんのいる方角をフラフラと見つめています。顔色も合わさってかなり怖いですよ。

「これが最新にして最強の機体！『紅椿』だよ！」

東さんが大きな身振りと共に空を見上げ宣言しました。ということは、箒ちゃんに機体は空から降ってくるのですか。ド派手ですね！

「で、姉さん。その紅椿は？」

「あれ？打ち合わせと違う」

紅椿、降ってきませんでした。がっかりですよ。ほら、ラウラ。空を見ても何もありませんよ。しかしそれでは、何処から降ってくるのでしょうか？

「姉さん？」

「いや、ちがくてね箒ちゃん」

「ね え さ ん ？」

ギリギリと箒ちゃんが、東さんとの間合いを詰めていきます。対する東さんはギリギリと詰められる間合いを、なんとかかして維持しようと思死に逃げようと思しますが、ヘツポコ東さんが箒ちゃんから逃げられる訳もなく、あわや、唐竹割りかと思われた次の瞬

間です。

「はいっ！今週の商品はこちらっ！」

「最新型 I S 『紅椿』になりま〜す」

ラウラによく似た女の子が運転する軽トラの荷台に乗って、黒丸レンズのグラサンをかけた男性と茶髪の背の高い女性が酒瓶片手に、商品紹介的なポーズをとりながら紅く格好いい I S を運んできました。

「オータムさん。なんとこちら、あの自宅警備兔が丹精込めて造った最新型なんですよ
！」

「本当ですか、フエイゲンさん！」

「いや、あのクーちゃんも二人も何やってんの？」

「どうやら束さんの知り合いみたいです。うわ！荷台の二人が凄い動きで束に振り向ききました。」

伝票ですか？束さんに渡してますね。

「え？何？何なの？受け取りのサイン？ここで良いの？」

宅配便ですか？最新型の機体がまさかの宅配便で届いたのですか？

「はい、これでいいっ！」

なんか束さんが伝票に受け取りサインを書いてフエイゲンさんとオータムさんの二

人に、それを渡したらいきなりビンタされました。しかも、二人で左右に一発ずつ良い音のする奴を。

「ケツ！オーイ、クロエ出発だ」

東さんにビンタして満足したのか、三人が帰って行きますが、また商品紹介的なポーズをとってます、その軽トラの荷台はそのポーズをしないと乗れないのですか？あ、お酒呑んでる。いつたい、なんだったのでしょうか？あの三人は。

「姉さん、これが『紅椿』ですか？」

「う、うん」

流石は箒ちゃんです。実の姉に振るわれた暴力を、無かったかのようにスルーしましたよ。

それにしても、『紅椿』ですか？私の『打鉄・甲』と違って全体的にスリムで格好いんですよ。しかも、手足には金の蒔絵があつて綺麗で豪華絢爛です！

「そ、それじゃあ、箒ちゃん。フィッティングとパーソナライズを始めようか」

「大急ぎの特急でお願いします」

「お、オツケイ！」

東さんにより、凄いスピードで各設定が終わっていきます。これを見ると東さんはやっぱり天災なんだなあ、と思えますが普段が普段なのでやっぱりあれですね。

あれ？そう言えばなんで、箒ちゃんは急ぎでなんて頼んだのでしょうか？こう言った事は、ある程度時間をかけてやるものなのに、不思議ですよ。

やっとだ！やっと、専用機が手に入った！この瞬間をどれ程まで待ち望んだことか、これで漸く真琴と共に空を飛べる！皆のいる場所に至るスタートラインに立てる！
待っていてくれ真琴！私はすぐにお前に追い付いてみせる。

「どうかな？箒ちゃん、違和感とか無い？」

「良好です」

「良かった〜」

姉さんには感謝しなくてはならない。姉さんがIS を造ったから真琴に会えた、皆に会えたのだ。最初は恨んだが、今となつてはグツジョブという気分だ。結果良ければ全てよし、世は事も無しだ。

「ふむ、問題無さそうだな。篠ノ之、飛んでみる」

「はい」

独特の浮遊感が身を包む、悪くない気分だ。むしろ、素晴らしい気分だ。

『あれが最新型か』

『妹っただけで貰えるのはズルいなくって思うけど』

『姉御だから良いよね!』

『一年では近接戦最強クラスだしね!』

ふむ、私も専用機持ちになったのだ。それ相応の態度と姿勢で過ごさねばなるまい。力には責任が伴う、これを体現し更なる高みを目指し、皆の手本とならねばな。

だが、今この時だけは、私の我が儘を許して欲しい。

「織斑先生」

「なんだ? 篠ノ之」

「ランデブーの相手が欲しいのですが、構いませんか?」

「フツ、許可しよう」

「ありがとうございます」

ありがとうございます、千冬さん。これは私の我が儘だ。私は、真琴、お前と飛びたい。

おく！箒ちゃんはやっぱり格好いいですよ。初めて会った時もそうでしたが、今もキリツとしてて憧れますよう。私もあんな風になりたいなー、無理ですかね？

あれ？箒ちゃんがこつちに来てますよ。

「真琴、私と飛んでくれないか？」

いきなりですよ！箒ちゃんと一緒に飛ぶのはいいのですが・・・

「私・・・遅・・・いよ・・・？」

私の機体『打鉄・甲』は元が打鉄なので、スピードははつきり言って遅いです。だから、箒ちゃんと飛ぶのは難しいですよ？

「構わん、私はお前と飛びたいのだ」

「・・・あう・・・」

『やだ、姉御ったらイケメン！』

『ママが顔真つ赤にしてモジモジしてるわ！』

『あれは女の顔ですわ』

ううう、言いたい放題言ってくれます。だったら、貴女達はこのIS 学園が誇る最終兵器イケメンの箒ちゃんに、こんなこと言われて真つ赤にならないんですか？無理でしょう？！

「・・・えつと・・・ね・・・箒・・・ちゃん・・・」

「さあ姫、お手を」

はい、無理です！ひひひ姫！姫なんて初めて言われましたよう！

なんか、いつの間にか機体が展開されてますし！これはもう、箒ちゃんの手をとって行くしかないですよ！

気分は、舞踏会に行くお姫様ですよ！

「では諸君、姫は貰って行くぞ」

「「どうぞどうぞー！」」

「・・・あう・・・う・・・」

「いってらっしゃい、母様！」

も、貰われました！私、貰われちゃいましたよう！ラウラ、お母さん箒ちゃんに貰われちゃいましたよう！

あれ？だとすると、箒ちゃんがお父さんになるのですか？

「行こうか、真琴」

「・・・う・・・うん・・・」

箒ちゃんに手を引かれながら、ゆっくりと空へと上がっていきます。

ある程度の高さまで上昇すると、箒ちゃんが手をほだいて此方に振り向き、再度手を差し出してきました。

これって、もしかして……

「姫、宜しければこの私と踊っては戴けませんか？」

「やっぱり、ダンスの御誘いですよう！ホアアアツ！私の答えは一つですよう！」

「私……で良かったら……いいよ……」

「そうか、では踊ろうか」

白猫？ 『うわー！ 箒ったら大胆！』

蒼雫？ 『それに応える真琴さんもなかなか』

熊兔娘？ 『おお！ 見たか今の』

白夏？ 『え、なに？』

「すずね？ 『一夏、あんた分かんなかったの？』」

白夏？ 『無茶言うなよ、俺 I S 乗り始めて半年経ってないよ』

白猫？ 『まあまあ鈴、一夏は置いといて』

蒼雫？ 『二人のダンスを観賞しましょう』

すずね? 『そうね』

白夏? 『一夏です、皆が冷たいとです』

熊兎娘? 『一夏、よく見ておけ。母様と箒の機動は高等技術の塊だぞ』

白夏? 『(TOT) ラウラが救い!』

白猫? 『箒が真琴の腰に手を回したよ!』

約全員? 『おおう』

「よし、二人共そろそろ降りてこい!」

織斑先生の号令により、箒ちゃんとのダンスは終了しました。一時間に満たない時間でしたが、とても楽しかったですよ!

「篠ノ之、熊谷ご苦労。もうじきナターシャとイーリスが到着する、それまでに給水等を済ませておけ」

「はっ」

「・・・はっ・・・」

間に合うのですか? その二人は。さつき、山田先生が電話でタクシーが二十台目とか

銃撃戦がどうか言っていましたけど、その二人は日本には居ないので？

この時、私は暢気にこんなことを考えていました。けど、もしこの時に何か行動していれば、あんなことにはならなかったのでしょうか。

十三冊目

アメリカからナターシャ・ファイルスさんとイーリス・コーリングさんが、私達が居る砂浜に到着しました。何故かカヌーで。

「じゃあな、運ちゃん！また頼むわ！」

「うっせえ！もう二度と来るな！」

イーリスさんが、ナターシャさんですかね？その人を担いでにこやかに運転手さんに手を振っています。肝心の運転手さんはご覧の通り、大変ご立腹のご様子。

「そう言うなつて、なあ」

「うるせえよ！なんだつて、娘の誕生日に香港マフィアとドンパチやんねえといけねえんだ！」

「良いじゃねえか、人生に刺激は必要だぜ」

「いらねえよ、こんな刺激は！」

香港マフィアとドンパチしてたんですか、しかも娘さんの誕生日に。

「あんたウチに來いよ、あんたならウチでもやっついていけるぜ」

「誰が行くか！」

その人、タクシーの運転手さんですよ、何処に勧誘してらんですか？

あ、運転手さんが帰って行きました、カヌーで。

それにしても、あの運転手さんそっくりでしたね。世界一不運な刑事の人に。

「よお、千冬！ 久し振りだな！」

「相変わらず喧しいな、イーリス」

「良いじゃねえか！ ほれ、ナタルそろそろ起きろ」

イーリスさんに担がれているナターシャさんが、彼女に揺すられて目を醒ました。

「うあく、イーリイ」

「なんだ？ ナタル」

「下ろして」

「はいよ」

イーリスさんがナターシャさんを肩から下ろしました。そのまま無造作に、そのせいか、顔面から砂浜に突っ込みました。あまりにいきなりだったのか、受け身をとることも出来てませんでした。

「ちよつとイーリイ！」

「なんだよナタル？」

「下ろすなら、下ろすって言いなさいよ!」

それもそうですね。あれ?なんで箒ちゃんは、私を見てるんですか。なんで手をワキワキしてるんですか?

「あく、お前ら並べ。こいつらが今日の特別講師のナターシャ・ファイルスとイーリス・コーリングだ」

「千冬、なんか雑じゃね?」

「五月蠅い!私はもう今日は仕事したくないの!」

「千冬!」

織斑先生!?貴女いったい何を言ってるんですか?!ほら、山田先生がフリーズしたじゃないですか。

「大体、お前らが予定通りに着いていれば今頃は、片付けし始めてるんだぞ!」

「ご、ごめん!」

「片付けして、風呂入って明日の座学とBBQの準備して、寝るだけだったの!」

「いや、ホントごめんなさい」

「クソー!」

織斑先生、若干ですが幼児退行してませんか?ほら、一夏も何か言ってくださいよ。え?千冬姉は昔から変わらない?家では大体あんな感じ?誰か嫁に貰ってくれ?千冬姉

が心配で、将来一人暮らしが出来そうにない？今なら、家事が得意な義弟と可愛い可愛い義妹がセツトで付いてくる？

一夏エ・・・ 必死過ぎますよ。

「もういいもん！先生、授業するもん！先生だからな！授業出来るんだもん！」

先生、一夏の目を見てください。目から光が無くなっています、その上なんかえらく遠くを見つめてますよ。

束さん？あの人なら、ビンタされた頬つぺたが漫画みたいに腫れ上がって医務室に行きました。あの人達はいつたい、何だったのでしょうか？紅椿届けて、束さんビンタして、お酒呑みながら帰って行きましたが、束さんの知り合いなんですか？なら、納得です。

「よし！専用機組は並べ！今から模擬戦やっちゃうぞ！」

「「ういーす」」

やつぱり、やるんですか模擬戦。やりたくないなあ、逃げちやダメですか？ダメですよね。

箒ちゃん、逃げませんから。私、逃げませんから、そんなジリジリ距離を詰めてこないでください。

なんで手をワキワキしてるんですか？しかも、さつきより激しくワキワキしてるじゃないですか。

「制限時間は一時間、それで二人のシールドエネルギーを半分に減らす、若しくは落とせ」

「先生！ちよつと適当過ぎませんか?!」

「いいのー!」

良くないです。織斑先生、良くないですよ。とても、良くないです。

ああ、日陰に入つて体育座りして拗ねています。

「よーし！お前ら、私達が相手になつてやる！かかつてこい！」

イーリスさんが専用機である『フアング・クエイク』を展開してタンバリンのポーズで挑発してきますが、だれもノつてきません。

「ノリが悪いなく。そうだ、こうしよう！」

あれ、なんでナターシャさんとイーリスさんは、私を見てるんです？

「私達に勝てたら、熊谷を揉みしだく権利をあげるわ！」

待ちましょう！少し落ち着いて、深呼吸をして落ち着いて、大人しくアメリカに帰りましょう！

え？何、私を揉みしだく権利？そんなもので皆が釣られる訳が・・・

「よし！その話乗つた！」

ありましたクマー！アワワワワワ！一夏以外の皆の目がヤバイですよ！箒ちゃん！

助けてください！

やあ、諸君私だ。篠ノ之箒だ。そちらは最近、インフルエンザや花粉症が流行っているそうだな。家に帰ったら、手洗いうがいを忘れずビタミン類をしっかりと摂り、乾燥に注意して過ごすんだぞ。

さて、本題に入ろう。あの二人に勝てたら真琴を揉みしだけ、揉みしなく、ふむ、なんと官能的な響きよ。だが、それは危険だ。

第一に、真琴を揉みしだくというのは素人にはオススメ出来ない。何故ならば、飛び掛かった瞬間にクマーされて魂か意識がこの世からしめやかに爆発四散してサヨナラするからだ。

仮に、クマーされなくてもダメだ。素人に真琴のカラダは危険過ぎる。あの極上のハリと柔らかさを持つ慈愛に満ちたたつぷりとした肉体を揉みしだく等、麻薬に手を出すのと同義だ。

揉みしだいたら最期、あの肉体に溺れ二度と元には戻れなくなる。そして、真琴を揉みしだくということはラウラもセツトで付いてくるといふことだ。成熟と未成熟、相反する二つの極上の肉体を前にすれば、どの様に堅固な理性であろうと、瞬く間に蕩けてしまう。

私とラウラ？平気に決まっているだろう！私は小学校からの付き合いだから、お前達の知らないあーんな真琴やこーんな真琴を知っているし、ラウラは邪な思いなど無く真琴が持つ豊かな母性を求めているだけだしな。

故に、真琴を揉みしだけるのは私とラウラだけだ。そして、真琴とラウラはこの私、篠ノ之箒のものだ！

だから、ここはルール変更を申し出ねばなるまい！

「少々、ルール変更を願います」

「あら、何かしら？篠ノ之さん」

「勝つのではなく、MVPを獲った者が真琴を揉みしだく権利を得るといふのはどうでしょう？」

「箒・・ちゃん・・！」

心配するな真琴よ。お前を他の者にやる訳がなからう。

このルールが適用されれば、私かラウラ若しくはお前がMVP を獲れば良いだけ

だ。

「ん、じゃそれで！」

「よし、通った！これで決まりだ！フフフフ、今宵は宴だ。真琴よラウラよ、待つているがいい。今宵は一晩中優しく二人仲良くモフモフしてやる！」

「オーマイガー！箒ちゃんに助けを求めたら、更なるピンチがやって来ました！このままでは、箒ちゃんがMVP を獲ってラウラと私は一晩中モフモフされてしまいます。アワワワワ、いけません。何としても阻止しなければ、箒ちゃんのモフモフテクニクは最早、麻薬です。箒ちゃんにモフモフされたが最期、二度と元のカラダには戻れなくなってしまうよう。」

「小学校の頃からかなりのテクニクでしたが、年をおう毎にそのテクニクは匠の域に達しています。あんなテクで一晩中モフモフされたら、明日は足腰立たなくなってしまう。いやでも、箒ちゃんになら・・・」

「落ち着きなさい私！お、女の子同士なんていけません！確かに、箒ちゃんは格好いい

し綺麗だし優しいですが、女の子です。女の子なんです！

いやでも、ラウラと一緒にモフモフされるといいうのも・・・ ホアーツ！

こ、こうなったら、私かラウラがMVP を獲るしかありません。それしか、ありません。自分の身は自分で守るのです！

フフフ、やってやります！やってやりますよう！勝つて今晚はラウラをモフモフムニムニして眠るんですよ！

付録

熊谷 真琴（くまがや まこと）

身長 195 cm ↓198 cm

体重 「ヴー！」

性別 女性

趣味 読書 ラウラをモニモニする等

機体 打鉄・甲

本作の主人公、恵まれた体格とあの織斑千冬に勝るとも劣らない身体能力を持つが、本人はそれを生かす気は全く無い。むしろ、本を読むことに全力を尽くしている。

本を読み出せば、梃子でも動かないことで評判の超インドア派で、誘われでもしない限り部屋若しくは図書館からは出ない。だが、代表候補生になってからは定期的に訓練を行っている。

代表候補生になった経緯は、中学校の授業での体験学習にて、ISに触れてみよう！というものがあり、そこで IS に触れたところ千冬に次ぐ適性を叩き出してしまった。

そのせいで、自分の嫌う争い事○の世界に叩き込まれることになり、代表候補生となる。でもまあ、なってしまったものは仕方ないと半ば諦め気味に、自分なりに出来ることをやっていたらいつの間にか『荒熊』の異名で呼ばれる様になってしまった。

その『自分なりに出来ること』が『荒熊』の異名の原因であるということは本人は気付いていない。

最近では、ラウラの母親役として『母熊』『ママ熊』『熊ママ』『ママ』と呼ばれ親しまれている。というか、親子揃って学園における保護対象として可愛がられている。

機体『打鉄・甲』

装甲 S

パワー A

スピード C

ワンオフアビリティー 有

日本製の量産機『打鉄』を真琴専用に変更した機体。元々、防御力と安定性に特化した機体の防御力と耐久性を更に特化させている。

守りに関しては、現行の機体で最高の性能を誇る。しかし、元が打鉄であり機動力と火力に難があつた。

そのため、技術班が自衛隊の正式採用戦車の主砲を無理矢理縮小した滑腔砲を登載す

るといふ暴挙に出る。

装甲に関して、最新式の特種装甲を採用している。その強度は、理論上は『盾殺し』すら弾くとされているが、あくまでも理論上であり正面装甲に限るといったものである。結果、空飛ぶ不思議な人型戦車が完成した。

ちなみにその技術班に重装甲と爆発物とガチタンを愛するダンディーなオジサマがいたとかいないとか。

ワンオフアビリティーは、発動しているが本人が使いたがらない。決して作者が考えてないとか、名前が思い付かないとかそんなんじゃない。違うったら違うんだからね！真琴のずば抜けた規格外の肺活量を使用したアビリティーであることが『VT事件』にて確認されている。

ラウラ・ボーデヴィツヒ

身長 ちっちゃい

体重 軽い

性別 女性

趣味 読書 真琴にくつつく等

機体 シュヴァルツエア・レーゲン

皆の娘。今日も今日とて、真琴にくつついたり抱っこしてもらったり皆にお菓子を貰ったりして日々を過ごしている。

学園全体があまりにもラウラを甘やかすので、一度職員会議で問題になったが、母娘熊の一日を纏めた愛に溢れたDVD（箒編集）と『とあるブリュンヒルデ』により問題が無かったことになった。実に職権乱用である。

生い立ちから、精神年齢が幼い。

学園で母娘熊グッズの販売が検討されている。

機体『シユヴァルツエア・レーゲン』

装甲 A

パワー B

スピード B

機体の仕様は原作とほぼ一緒。黒いよ。作者的には新装版の方が良い。

箒ノ之箒（しのののほうき）

身長 170cm

体重 「ほお?」

性別 女性? うん、彼は女性です

趣味 剣道 真琴とラウラを愛でる

機体 紅椿

本作で一番ぶつ壊れた人。学園における最終兵器イケメン、姉御とは彼女のことを指す。どうしてこうなった？

真琴とは小学校からの付き合いであり、学園で真琴を一番よく知る人物である。容姿仕草言動生き様があまりにも男前過ぎて、ファンクラブが瞬間的に出来た。

真琴とラウラに対する愛が凄まじく、事あるごとに愛を囁いている。

本人曰く、同性愛者ではなくバイセクシャルとのこと。

専用機組で、一番強い人。

文化祭編で、楯無さんが泣かされる予定。

亡国機業？もう出てるよ。

紅椿

装甲 B

パワー B

スピード S

チート S

機体の仕様は原作とほぼ一緒。

織斑一夏（おりむらいちか）

身長 175くらいかな？

体重 知らねーよ！

性別 男

趣味 家事 姉の結婚相手捜し（使命）

機体 白式

来たぞ我らがワンサマー！今日も今日とて、皆の期待に込めて安心と信頼の奇跡のガブレイをかましてくれるぞ！作者のブレイキー号

悩みは、姉が結婚出来るかどうかだぞ！

ヒロインズの好意に気付いているが、自分の立場上一人に決めたらその相手に危険が及ばね？とか考えちゃって安易に答えが出せなくなっちゃった！

原作だと、皆を守るとか言ってるけど、その前に自分の身を守れないと意味無くね？とか気付いて先ずは自分の実力を上げるのに必死！

ヒロインズの好意に込めるのは、自分の立場が確立してからのらしいよ！

機体『白式』

装甲 B

パワー B

スピード A

燃費 最悪

ブレオンの変態！セカンドシフト？知らない子ですね。

鳳鈴音（ふあんりいん）

身長 155cmくらいかな？

体重 軽いよね？

性別 酔豚、じゃなくて女性

趣味 スポーツ

機体 甲龍

酔豚！作者のブレーキ二号！何だかんだで原作で不遇な目に会ってるので、ここでは活躍させたかった。活躍させたかったんだ！けど、無理だったよ・・・

機体『甲龍』

装甲 B

パワー A

スピード B

燃費 めっちゃ良い

仕様は原作とほぼ一緒。七つ集めても願いが叶ったりはしない。しないったらしな
い

セシリア・オルコット

身長 165cmくらい

体重 普通

性別 女性

趣味 紅茶収集 射撃 料理（テケリ・リ）

機体 ブルー・ティアーズ

一人前のレディー！その料理は一撃必殺！時たま、学園内を徘徊しているぞ！見かけたら落ち着いてその場から退避して、近くの教員かセシリアに助けを求めよう。ダクトの傍は危険。テケリ・リ！

機体『ブルー・ティアーズ』

装甲 C

パワー C

スピード B

射撃精度 S

狙撃、狙い撃つ！時たま、テケリ・リが放たれる。

シヤルロット・デュノア

身長 160cmくらい

体重 普通

性別 女性

趣味 ゲーム（種類問わず） アンティーク収集等

機体 ラファール・リヴァイヴ・カスタムII

マジキチ、フランス絶対殺すウーマン。ゲームでも現実でもフランスを赦さない！パ
リは焼くもの。

自分とデュノア社の人達、知り合い以外はもれなく消えてしまえと思っている。

男装入学はフランス政府の指事。その時、デュノア社とフランス名物パルチザンがキ
レた。フランス政府に対し、攘夷を実行！パルチの嵐である。現政権は国家代表からも
見放された。無血開城である。

機体 『ラファール・リヴァイヴ・カスタムII』（長い）

装甲 B

パワー C

スピード B

格納数 S

仕様は原作とほぼ一緒。空飛ぶ不思議な火薬庫。とつつき！

味付け濃いめの人達

織斑千冬（おりむらちふゆ）

ブリュンヒルデ！独神！弟と妹にマジで心配されている。最近、ブリュンヒルデになんかなるんじゃないかと思ってる。お酒は友達、怖くない。

学生時代に、短期間の間だがグレてた。だが、篠ノ之、パパスの友人にヤキ入れられて更正した。

篠ノ之束（しのののたばね）

天災！ヘツポコ！頭脳はチート！体はボロボロ！その名は、天災ヘツポコ兔！
身体能力に関するものを、全て妹に持っていかれた人。

耐久性はスペランカー先生並、この間風邪をひいて意識不明の重体になった。

こつから、サブキャラ！

五百蔵冬悟（いおろいとうぎ）

作者の初作品『バケツ頭のオッサン提督の日常』から出演。こっちでは、喫茶店のマスター。二メートルのオッサン。

友人の娘の友人がグレたので、ヤキ入れた。

五百蔵榛名（いおろいはるな）

同作品より出演。オッサンの妻、十歳以上年下、喫茶店ではバリスタ。猛アタックの末オッサンを仕留めた。

五百蔵吹雪（いおろいふぶき）

同作品より出演。オッサンと榛名の娘、ここでもとても『食欲旺盛』五百蔵家のエンゲル係数のおよそ九割は彼女によるもの。見た目に似合わず腕力は父親譲りの剛腕。

因みに、あの人も居る。

フエイゲン

作者の他作品『亡国機業は今日も平和です。』より出演。キチガイ筆頭一号。東と仕事をしている。

オータム

同作品より出演。キチガイ筆頭二号。束と仕事をしている。他のキチガイも、もちろん居る。

ISについて

この世界のISは、基本的に軍用ではない。

もし、軍用に使おうとするとキチガイが敵陣徒競走歌いながらやってきて尻にウオツカやピロシキ突っ込まれる。ハラシヨ〜ハラシヨ〜ハラシヨ〜ハラシヨ〜!

逃げてても逃げてても永遠に追い掛けてくるぞ♪

女尊男卑主義は無いに等しい。これについては、ISが女性にしか乗れない理由がはつきりしているためである。

それは、単純にISコアが製作者であるヘツポコ兎しか知らなかったためである。仮にヘツポコ兎が男なら、男にしか乗れなかった。

しかし、コアが学習を繰り返し女性以外の男を認識した。それがワンサマーである。

コアは束が量産中、コアの分配はキチガイが行う。この時点でバカやるつもりなら、即座にウオツカとピロシキでハラシヨ〜ハラシヨ〜ハラシヨ〜ハラシヨ〜!される。

事実、とある国家元首はウオツカでハラシヨ〜!された。

十四冊目

セシリア・オルコットの場合

MVPを獲れば、真琴さんを揉みしだける、ですか。ふむ、あまり興味がありませんわね。確かに、真琴さんの身体は同性の私から見ても魅惑的なプロポーションですが、私にはそちらの気はありません。

ですから、徹底的にマナーを叩き込んでやりますわ！

真琴さんは、食事の時に口許を汚す癖がありますから、その癖を直さないといけません。

普段の食事ではその様なことは無いのですが、クレープやシュークリーム等のクリームをたっぷり使ったものを食べると必ずと言っていいほど、口の周りを汚してしまいます。

ラウラさんもセットで口許をベタベタにしながらクレープを食べる姿は非常にホッコリしますが、それではいけません。

学園ならば、私か箒さんがいますからフォロー出来ます。ですが、学園外ではそうはいきません。

いえでも、箒さんなら・・・何食わぬ顔で現れて当たり前の様にフォローしそうですわね。むしろ、しますわね。

何はともあれ、MVPを獲つて真琴さんとラウラさんにマナーを叩き込んでやりませわ！

配点：一人前のレディー！

ラウラ・ボーデヴィツヒの場合

MVP獲つたら母様を揉みしだけ、か。それよりも、母様に抱っこしてもらいたい。それもスペシャルな抱っこだ！スペシャルな抱っこ、自分で言つて何だがどんなのなんだらう？

まさか、お腹ムニムニしてもらいながらギューツとしてもらえるのか！なんだそれは、天国じゃないか！ムニムニしてもらいながら、フワフワフカフカの母様にいつも以上にギューツつてされるとか、天国いやそれ以外の何かだ！

これは勝たねば！

配点：甘えん坊

鳳鈴音の場合

関削除検関削除検関削除検関削除検関削除

だね！

配点：マジキチ

織斑一夏の場合

あ、どうも、織斑一夏です。こうして皆様とお話するのは初めてですね。

ところで皆様、知ってますか？知ってる？そうですか。

MVP獲ったら真琴を揉みただけらしいのですが、俺としてはこの戦い、やる気出したら殺されると思うんですよ。いやね、鈴とかセシリアとかシャルとかがものつそい目で睨み付けてくる訳でして、もしMVPなんて獲ろうものなら俺は明日の朝日を拝めないことが確定していることは確定的に明らかかな訳なんですよ。

それに、何故か分からないのですがシルベリオ・ゴスペルとだけは戦いたくないんですよ。何故かは分からないんですけどね！

でも個人的には、ここで普段の訓練の成果を発揮して活躍したいのですが、活躍すれば死刑台送り、活躍しなくても何だかんだで死刑台送り……

あ、これ詰みましたね。誰か助けて！

配点：ワンサマー

「それでは諸君、作戦タイムだ」

箒ちゃんの号令と共に、全員で円陣を組んで作戦を話し合います。相手は世界でもトップクラスのパイロットが二人、数では此方が有利ですがはつきり言って数だけが有利なだけで、実力ではまったく歯が立たないことは明確です。

ですから、綿密な作戦を立てて挑むのが重要なんですよう。

「で、どうしますの?」

「ん、確かフアング・クエイクは近接型だろ?なら、俺と鈴若しくは、箒がセシリアかシャルと組んで当たるか?」

「どうしたの一夏?!頭打ったの!」

「え?どゆことシャル、最近俺の扱い雑じゃね?」

「フアング・クエイク対策はそれで良いとして、シルバリオ・ゴスペルはどうするのよ?」

フアング・クエイクは最悪、放置でも構わないのですが、いえ、パイロットがイーリスさんなのでダメですが。

私達にとっては、シルバリオ・ゴスペル。これが問題なんですよう。

広域制圧用武装『銀の鐘』あの機体名の由来ともなった武装ですが、私達全員と相性が最悪なんですよね。

「シルバリオ・ゴスペルは、母様とセシリアと箒が当たって、フアング・クエイクには一夏と鈴と私がシャルは遊撃でどうだ？」

「それが良いかもしれないな」

シルバリオ・ゴスペルは箒ちゃんを抑えつつ、私とセシリアが射撃で削りフアング・クエイクは一夏と鈴が正面から当たり、ラウラがA I Cで邪魔しつつレールカノンで火力支援 を行いシャルが私達の穴を埋める。

「こんなところですかね、後はシャルや私がスイッチしながら全員の支援、あれ？これってシャルの負担が大きくないですか？」

「真琴、他には何かあるか？」

「・・・えつと・・・」

何かありましたっけ？あ！いけません、重要なことを忘れてました！

「シルバ・・・リオ・ゴスペ・・・ルの下に・・・行かない・・・様に気を付・・・けて」

「え？なんで？」

やはり、安定の一夏ですね。

「いい？一夏、シルバリオ・ゴスペルは範囲攻撃型の高速機動機。これは分かるよね？」

「お、おう。それは分かるぞ、シャル」

「その範囲攻撃型、それも『広域制圧』を目的とした機体の下方にいるということとは？」

さあ、I S 学園が誇る世界初の男性 I S 操縦者織斑一夏君の答えは？

「……………?」

一夏？え、まさか嘘ですよ？いくら何でもそこまでじゃないですよ？分からないとかじゃなくて、シンキングタイムですよ？

「はっ！そうか、わきやっただぞ！」

おお！分かりましたか！でも、ホントに分かっていますか？

なんか嘸んでますし、不安しかないのですが。

「あれだな！下に居ると、物凄い弾幕で一気に押し潰されるからだな！」

「ん、ファイナルアンサー？」

「フ、ファイナルアンサー！」

正解です。シャルもイジワルしないで教えてあげましょうよ。

「正解です」

「やったー！」

「補足すると、上方から覆うような面の攻撃を回避するのは至極困難なのですわ」

「そうね、人間の視界は造りの的に上下に弱いから。それはハイパーセンサーで強化され

でも変わらないわね」

「上空からの攻撃の有効性は、空挺強襲や空爆が物語っているからな」

纏めると、人間はその目の位置的に前方に強いのですが、上下の二方向は眼球が首を動かさないと認識仕切れません。後方に至ってはまるでノーガードです。

ハイパーセンサーで視界が強化されても、やはり咄嗟の反応は遅れます。ですから、その苦手な上方しかも面の攻撃ともなれば、回避が困難なのは自明の理という訳です。

「・・・だか・・・ら同じ・・・高さか上・・・に居る・・・ように・・・して・・・ね」

「分かったか一夏？」

「分かった！分かったよ俺！」

一夏、ちよつとアホの子になってませんか？

「おう、ガキ共。作戦タイムは終わったか？」

「終わったなら、何時でも掛かって来なさい」

イーリスさんとナターシャさんが待ち兼ねてますね。

こちらの準備は完了しましたし、行きましようか。でも、行きたくないなー、逃げちゃダメですか？ダメですね、はい。

「では、制限時間一時間、勝利条件は一定以上のダメージ若しくは制限時間まで生存だ！各員配置に着け！」

織斑先生の号令で、全員が持ち場に着きます。え？それだと狙いがバレないか？大丈夫ですよ、一夏。

相手は世界でもトップクラスのパイロットですよ、此方の狙いなんて分かっているに決まっています。ハア、逃げたい。でも、揉みしだかれないので頑張りますよう！

「それでは」

カウントが始まりました。

「始め！」

さあ、行きますよって！嘘でしょう！どうして、そんな事になるんですか！

十五冊目

アババババババ！なんで？どうして、イーリスさんがこつちに来るんですか！
滑腔砲を食らいなさい！ああああ！意図も容易く避けて来ますよう！

「こんなかで、一番厄介なのはテメーだ、荒熊！」

「来な・・・いで・・・！」

「しゃらくせえっ！」

ヒエエエエエエ！直撃コースの砲弾を殴って弾き飛ばしましたよ！なんなんですか？野菜人なんでするか貴女！

「背中に鋭い痛みがー！」

「い、一夏ー！」

弾かれた砲弾が一夏に直撃しましたー！ああああ！一夏が落ちていきます。

顔面から、砂浜に突っ込みましたよ！うわあ、痛そう。

「プハッ！下が砂浜で助かった！」

『織斑君！上！上！』

「あ、上？Oh・・・」

「一夏、避けなさい！」

「ウエアアアアアアアアア！」

一夏に『銀の鐘』が降り注ぎますが、これを一夏は走って回避。いや、何故に走って回避？ 飛ばないのですか？

「アハハハハ！ 一夏、何で走ってんの？」

「スラストー壊れた！ また壊れた！ 復旧するまで飛べねえ！」

なるほど、そう言うことでしたか。まあ、スラストーが壊れた原因は私なんです。

しかし、PICが有るとはいえIS纏った状態でよく砂浜を走れますね。しかも、確りと回避しながら。

流石は、学園体力バカの一人の一夏ですね。

「あーっ！ クソツ！ メンドクセエ、肩アーマーだな！」

「・・・どっ・・・か行つて・・・！」

イーリスさんはやはり近接型、一夏よりも鈴に近い手数で押し潰すタイプの様ですね。違いは鈴はスピード、イーリスさんはパワーといったところですか。

今はなんとか、肩アーマーとカーボンブレイドで凌いでますが、ファング・クエイクは甲龍と同じ低燃費のバランス型の機体、燃費ではあちらが上です。

このままでは、いずれ押し切られます。なんとかしないと、一夏みたいな事になって

MVP獲れずに誰かに揉みしだかれています。それだけは何としても避けなければ！

しかし、どうしましょうか。『アレ』を使うしか無いですね。後が辛いので、あまり使いたくないのですが。でも、今は使えません。イーリスさんの攻撃の密度が高過ぎて、『溜め』を行えません。

「おらおら、荒熊！これなら『アレ』も使えねえだろ！」

「……うー……」

くう！キツイですね。カーボンブレイドも限界が近いですし、シールドも大分削れてきました。

ナターシャさんに当たっている箒ちゃん達は、どうなっているのでしょうか？

「ほらほら、どうしたの？随分大人しいじゃない」

「セシリア！高度が下がっているぞ！上がれ！」

「ラウラ、ワイヤーブレイドはまだ保ちそう？」

「あと、三本といたところだ！正直な話、次で終わりかもしれない！」

「鈴さん、下がってください！箒さんとスイッチですわ！」

「了解！箒、頼んだわよ！」

「任せろ！鈴は一夏を回収してくれ！」

ギリギリの状況の様ですね、こうなったら無茶を承知でやるしか無いですね。今日はのど飴生活が確定しますが、仕方ありません！

本熊？ 『皆・・・お願い・・・いが・・・あるの』

ほーき？ 『む、どうした真琴？』

本熊？ 『ナターシャ・・・さんと・・・イーリス・・・さんを一・・・方向に纏・・・めて欲し・・・いの』

熊兎娘？ 『母様！まさか『アレ』をやるのか!?!』

すずね？ 『撃つ時は言いなさい!』

蒼雫？ 『確かに、真琴さんの『アレ』なら』

白猫？ 『一瞬で決まるね!』

白夏？ 『それじゃあ俺、囧になるか?』

約全員？ 『どうぞどうぞ!』

白夏？ 『囧なら任せろー!』

作戦も決まりました。後は、イーリスさんをあつちに連れて行くだけです！

その為には・・・

『砂柱が立ってる!』

『くつまママ!くつまママ!』

『ママの荒熊モードキター!』

そろそろ大人しくなりましたか?

「くっ、この!」

まだみたいです。しょうがないですね、作戦変更です。イーリスさんを潰しましよ
う。

「イイカゲンニオチロ!」

「おい!おいおいおい! 『それ』は!」

イーリスさんのスラストをシールドのブレイドで串刺しに、二の腕を掴み押さえ付
けて固定。

「クソッ! 離しやがれ!」

「ニガサナイ」

逃げようとしても無駄です。これでトドメです!

『あつ、ママが息を吸い込んで!』

『総員退避！退避ー！』

『口を空けて耳を塞いで伏せろー！』

避難は完了したみたいですね。では、イーリスさん、サヨナラデスヨウ。

「あっ！！」

真琴が声を出したその瞬間、イーリス・コーリングと乗機ファング・クエイクは巨大

で重厚な不可視の『壁』に押し潰された。

その威力は、イーリス・コーリングだけでなく周囲の砂浜をも押し潰した。

真琴のワンオフアビリティ『豪砲大声』、真琴の飛び抜けた身体能力の中でも特にずば抜けた筋力と肺活量をフルに活用した能力だ。

性能は、真琴の発した声を攻勢エネルギーに変換し『壁』として相手に叩き付けるといふものだ。威力と範囲は真琴の発声量に比例する。すなわち、真琴の声が大きければ大きい程威力と範囲がはね上がるのだ。

私達全員、一度食らったがアレはいけない。不可視という点は、鈴の衝撃砲と同じだが、本質はまるで違う。

鈴のは名の通り衝撃だが、真琴のは『音』だ。衝撃は防ぎようがあるが、音は言わば『振動』、例えば『壁』による打撃を防いでも『音』の『振動』は防げない。

確実にダメージが通る上に、真琴はこれを使う前に相手を確りと弱らせてから確実に仕留める為に使う。

諸君、私の言っている意味が分かるな？一撃で終わらなければ、何度でもあの『壁』が叩き付けられ続けるのだ。

現に二発目が放たれた。それも一発目よりも高出力の『壁』だ。これは、勝負あったな。

『イーリス・コーリング、エネルギー0！試合終了ー！』

ほらな。

ううう、喉が痛い。喉が痛いですよ。でも、この痛みもMVPの為なんですよ。

試合が終わった後、山田先生にのど飴を貰ってコロコロ舐めながら、ラウラをモニモニしてたらMVPの発表がありました、私が獲りました！

これで、私の安息は保たれました。ふうー、疲れました。あ、イーリスさんとナターシャさんは帰りました。二、三日ほど日本観光をしてからアメリカに帰るそうです。

後、一夏が囿で砂浜を走り回って結局ヤムチャして、復活したと思ったら、セカンドソフトしてました。

一夏曰く

「なんか、白式の精がウィリスウィリス言いながら飛び回るネタを見せられたら、セカン

ドシフトした」

とのことです。

あ、後、イーリスさんが帰る前に箸ちやんとケンカしてましたよう。

こんな感じで

「ああん！なんだメリケン女？ピザ食いながらコーラ飲んで、ハンバーガーでも焼いてろ！」

「んだと、サムライ女！テメエこそ、スキヤキ食いながらテンプラ揚げて、盆踊り踊つてろ！」

「ああん！」

「おおん！」

凄まじいメンチの切り合いでした。最終的に何故か、カレーは蕎麦屋のカレーが一番美味しいという共通見解で仲直りしました。何故？

取り合えず、山場は乗りきりました。後は旅館でグッスリとスヤアするだけですよ。

ああ、喉が痛い。

十六冊目

諸君！待ちに待った瞬間が遂に来た！

それは諸君らが待ち望み、私が手繰り寄せた一抹の奇跡！

この瞬間を迎える為に、数多くの勇敢な戦士達が散っていった！

彼らは勇敢だった！勝ち目の無い戦いだと分かっていたながら、彼らは笑って逝った！

自分達が！己達の死が！無駄ではないと分かっていたからだ！

ならば！ならば、我々はそれに応えねばならない！

諸君！私は真琴が好きだ！真琴が大好きだ！

諸君！私はラウラが好きだ！ラウラが大好きだ！

この世のありとあらゆる真琴が好きだ！

この世のありとあらゆるラウラが好きだ！

教室で！廊下で！部屋で！図書館で！この世のありとあらゆる場所で行われるま

×ラウラが好きだ！

ポヤポヤとした真琴が、好きな作家の最新作を読む為にキリツとするのが好きだ！

キリツとしたラウラが、真琴に抱き抱えられてホニヤツとなるのが好きだ！

本を読みながらラウラを抱き抱える真琴が好きだ！

本を読みながらじやれつくラウラをあやす姿など、心が踊る！

寝起きでキョロキョロする真琴が好きだ！寝起きのはだけた寝間着でタレラウラを抱き抱えて二度寝をする姿など、胸が熱くなる！

好き作家の最新作が買えなかった時の真琴が好きだ！シユンとしながら肩を落として歩く姿は、とてもとても悲しいものだ・・・

あのムツチリたつぷりとしていながら確りと引き締まった身体が好きだ！緩めに仕立てられた制服からピツチリとしたISスーツに着替えた時に現れるあの扇情的なシルエツト、そこに未成熟で愛らしいラウラが加わった時など、あまりの背徳感で絶頂すら覚える！

諸君！私は真琴とラウラが好きだ！大好きだ！

そこに性別の壁など存在しない！

この胸から溢れる愛は誰にも止められぬ！

この溢れる愛を抑えるなど、愚の骨頂！

ならば我々はどうする！我々は何を望む！

まこ×ラウ！まこ×ラウ！まこ×ラウ！まこ×ラウ！まこ×ラウ！まこ×ラウ！ま

こ×ラウ！まこ×ラウ！まこ×ラウ！

よろしい！ならば、まこ×ラウだ！

我らは総勢千にも満たぬ！だが！

だが！私と諸君らの溢れる愛があれば、その総勢は千をも越える！

まこ×ラウを！一心不乱のまこ×ラウを！

「という訳で、スタンバイはオーケーだ！」

布団は確りと三つ、ぴったりと寄せて敷いて枕元にはティッシュ箱を完備、完璧だ。ティッシュ箱はやり過ぎかもしれんが、何が起こるか分からんからな。準備はしておいて損は無いだらう。

いや、だがしかし、その様な関係を持つにはまだ早いか？もし、関係を持つなら責任をとらねばならない。私達はまだ学生だ、責任をとると言っても社会的にも経済的にも脆くひ弱な立場でしかない。

そんな立場でどうやって責任をとるといふのだ。私の愚か者め！

一時の欲に目が眩み、愛する者を傷付けようなどと、乙女のすることではない！

「去れ煩惱！来たれ悟りの境地！我、これより死地に入る！」

危ないところであった。もう少して、愛する二人を傷付けるところであったわ。

ティッシュはあつちにポイだ。

いや、だが、涙を流す二人も背徳的でそそのめるものが・・・

「マイドゥ、トクベツサービスデス」

「ツウカアレタアガクセイノウミナサマニオカシトジュースウサシイレネ」

「あ、これはどうも」

丸いレンズのグラサンをかけた男性と茶髪の女性の仲居さんがお菓子とジュースを差し入れてくれた。

それはいいのだが、この二人。何処かで見たような？

「あの、二人共何処かでお会いしましたか？」

「キノセイデスネー」

「ソデスネー、キノセイデスネー」

ソーナノカーキノセイナノカー ज्याアシカタナイネー

んなわけあるか！紅椿持ってきた人達じゃないか！

て言うか、何故にカタコト？

「貴方達、いったい何を・・・」

「ア、コレツイカノサービスデスヨ」

グラサンの男性が差し出してきたもの、それは。

「真琴とラウラの入浴写真だと！」

「ワガハンノユシユウナスタフガサツエイシマスタ」

「ベネー・ディツモールトベネー！」

素晴らしい！素晴らしい写真だ！湯船に浸かりラウラを抱き抱える真琴の写真とはな。しかも、湯煙の演出効果による『見えそうで見えない』が情欲を更に駆り立てる！

スタッフよ、分かっているではないか！

「お勤め御苦勞様です！」

「デハワタシタチツギノヘヤイクネ」

「デハデハ」

仲居さん達が用件を終え、次の部屋に向かうが、何故か千冬さんの怒声と先程の二人の奇声が響き渡っている。と思つたら、千冬さんが部屋に飛び込んできた。

「おい！篠ノ之、奴等を見なかったか！」

「い、いえ、次の部屋に向かつてからは見てません」

あの千冬さんがここまで怒るとは、何をしたんだあの二人は。

「奴等め、私の秘蔵の酒を盗みやがった！生かして帰さん！」

おうふ、千冬さんから酒を盗むとは命知らずな。しかし、千冬さんから酒を盗める程の実力者とも言える。あの二人は本当に何者なんだ？

「ちつ！まあ良い。見掛けたら知らせろ、良いな！」

「は、はい！」

千冬さんが怒髪天を突かんがばかりの勢いで二人の探索に戻っていった。と思つたら、また怒声と奇声が鳴り響いている。それはいいのだが、先程より奇声の数が多いような？ 気のせいかな。

まあ、それは良いとして、そろそろ真琴とラウラが風呂から帰ってくる頃だ。

ホツコリと暖まつて帰つて来るがよい、篠ノ之家秘伝のマッサージで全身解き解してやろう。

「ただ．．いま．．．」

「戻つたぞ」

「おかえり、二人とも。そこにお菓子とジュースがあるぞ」

「．．．いた．．．だきま．．．す．．．」

「いただきます！」

むう、何の疑いも無く食べ始めよつたわ。真琴も普段よりフニャフニャしているし、ラウラも真琴の膝で何時も以上にタレている。

やはり、日中の訓練が効いているようだな。

「む．．．」

「母様、どうしたのだ？」

む？ 真琴の様子がおかしい。顔も赤いし、体も左右にフラフラとしている。

「むゝ．．．」

「は、母様！ いったい、どうしたの．．．ワツプ！」

「ま、真琴！」

真琴が突然ラウラを押し潰す様に押し倒した。

「母様！ 母様——！」

「むゝむゝ．．．」

押し倒したラウラに真琴は、ご機嫌な様子で体を擦り付けている。

その体勢が何と言うか、その、とてもエロイ！

ラウラと真琴では体格がまるで違う、そのため、真琴はこう、此方に尻を突き出した体勢になる訳だ。

その結果、何が見えるかと言うと、浴衣に包まれた真琴のムチタプキュツとしたま口尻がラウラにじやれつく度に上下左右にフリフリと振れているのだ！

誘っているのか？ 後ろからグツとイケと誘っているのか！

落ち着け私、そんな訳がある訳無かろう。

「むゝ．．．」

「はは、しまゝ．．．」

ぬう！ ラウラがあれ程までに蕩けるとは、予想外だ。今の真琴はそれほどまでに気持

ちいいのか。

「?・・・ラウラ・・・?」

蕩けに蕩けてグッスリスヤアしてしまったラウラ、それを見て首を傾げる真琴。これも、アリだな!

「?・・・!・・・ほーきちちゃ・・・」

ラウラがスヤアしたことを理解したのかは分からないが、キヨロキヨロと部屋を見回し私を見付けると、トロンとした笑顔を浮かべて私に近寄つて来る。

「ま、待て真琴! そんなポーズで迫られたら、私は、私は!」

「ほーきちちゃ・・・ほーきちちゃ」

くう! 真琴よ、そんな女豹のポーズでゆっくりと体をくねらせながら迫るだなんて、私の理性は崩壊寸前だぞ!

それに加えて、今の真琴はヤバイ! 瞳は潤みトロンと蕩け、頬は上気し薄く紅が挿ししている。それに浴衣がはだけ、たつぷりの双丘と溪谷がモロ見えだ!

何と言うか色気が半端ではない、部屋に充満する噎せ返るような濃密で甘い香りが私の脳を痺れさせ正常な判断力を骨抜きにしていく。

「ほーきちちゃ、ほーきちちゃ」

「真琴、真琴!」

いかん！ブーツと見とれていたら、真琴に押し倒されてしまった！このままでは、い
ただかれてしまう！

「ほーきちや、むう？」

「ど、どどうしたのだ？真琴」

私を押し倒した真琴が私に体を擦り付けようとしますが、何故か途中で止めて怪訝な顔
で首を傾げている。

「ふん、ふんふん．．む〜」

突然、私の匂いを嗅ぎ始め眉をひそめると全身を私に擦り付け始めた。それも先程の
ラウラにやったものよりも、深く激しく『甘える』ように擦り付け始めたのだ。

ふおおおお！真琴の！真琴の体が！ムチタップでフワフワの体が！私の全身に擦り付
けられている！

ここがヴァルハラか！ハラショー！

しかし、何故にこのような桃源郷が訪れたのだ？確か、真琴がこうなったのは差し入
れのお菓子を食べてからだな。

というか、なんだ？真琴から酒の匂いが？まさか！

（やはり、そう言うことか！）

差し入れが乗っている盆に目を向けると、『ウイスキー☆ボンツボンツ！超アルコール

ルウ』と書かれた包み紙が一枚あった。それと『少女よ、You が can 出来るなら Do しちやいなよ』と書かれたメモ書きがつて、余計なお世話だ！

「ふんふん．．．むゝ？」

ある程度体を擦り付けると、また私の匂いを嗅ぎ始め首を傾げる。ま、まさか、臭うのか？風呂に入り身嗜みを整え、もしもの為にセシリアから香水を借りたのだが、臭うのか？だとすれば、なんたる失態か！

「ま、真琴？」

「むゝ．．．セシリアの匂い．．．んゝ」

どうやら、セシリアは香水の匂いで認識されている様だ。

だが何故、そこまで不満そうなのだ？セシリアが嫌いなのか？

いや、それは無いな。真琴は昔から嫌いな相手には近付かないからな、セシリアとは読書仲間だし、自国の作家の作品を取り寄せたりする仲だ。羨ましくなんか無いぞ！

「ほーきこちゃ」

「真琴？」

真琴が急に大人しくなり、私にしがみつく様にして体を預けてきた。

ああ、そうか。そうだったな、お前は昔から甘えん坊だったな。今はラウラや皆が居て、逆になっているが、本来は甘えられるより甘える方が好きな奴だったな。

私としたことが、忘れていたよ。荒熊と呼ばれ次期国家代表とまで謳われる様になり、お前は甘える事が出来なくなっていたんだな。

その『箒ちや』と言う呼び名もお前が私に甘えていた時のものだったな。何もかもが懐かしい、いつの間にか背も追い越されたが、お前は変わらん。

ならば、私のやることは一つだ！

「よしよし、真琴。もう少し強く抱きついても良いぞ」

「んゝ、んゝ」

すると、真琴は私の腹の辺りで丸くなった。だが、手は私の浴衣を掴んでいるから、これは抱っこのおねだりだな、私には分かる。

「ほら、真琴。これで良いか？」

「んゝゝ」

満足気に息を漏らし、更に体を押し付けてくるが、私には先程までの邪念が消え去っていた。

寧ろ、懐かしさと愛らしさで胸が一杯だ。

さて、夜も更けてきた。もう一人の甘えん坊を私達の間挟み、川の字で寝るとしよう。

諸君、これで臨海学校編は終わりだ。明日も座学であったり、昼にはBBQがあったりするのだが、作者のネタが一時的に尽きたのでな。これで終わりとなる。

ああ、作者の心配は要らない。アレの事だ、煙草吸って酒でも呑めばネタを思い付くだらうさ。

それでは諸君、また次回会おう！私は二人の甘えん坊から一晩中甘えられなければならん。

特別付録

臨海学校帰りのバス内

白夏? 『どうも、内閣総理大臣の織木一太郎です。本日はお日柄も良く、各自しつかりと自己紹介をしてもらって、これからの日本を運営していきたい!では、陸軍大ジツ!やべ、噛んだ』

蒼雫? 『辞任ですわね』

白猫 ? 『辞任だね』

ほーき? 『辞任だな』

すずね? 『辞任だよ、おう、あくしろよ』

本熊? 『辞・・任・・』

熊兔娘? 『辞任だー!』

白夏? 『ちよつと待って!早くない?』

ほーき? 『就任初日で就任とは・・・』

すずね? 『情けないわね』

蒼雫? 『相変わらず』

白猫? 『ガバガバだね』

本熊? 『一夏・・・』

熊兔娘? 『ダメな奴だ』

白夏? 『俺もう、総理大臣嫌やあ・・・』

その後、何故か一夏のホールはガバガバという話が広まり、その年の夏と冬は盛況だったりじゃなかったり・・・

藍越学園

「んく、どうすつかなあ」

「どうしたんです? 弾」

「おう、吹雪。いやな、夏休みにバイトしようかなって思ってたさ」

「バイトかあ」

「なんか、良いとこないかなあ?」

「家はどうです? お父さんが夏は人手が欲しいって言ってたし」

「吹雪の家、喫茶だっけ?」

「レゾナンスの中でも、売上は上位の喫茶ですよ」

「そりや、凄い！話通して貰えるか？」

「学食のパン一週間で」

「三日」

「六日」

「四日」

五日で手を打った弾君、五日で吹雪換算一週間分のパンを要求され、財布が轟沈した模様。

巻き添えで、御手洗数馬も犠牲に・・・

IS学園アリーナ

「ほいで？こらあ、どういうことな？」

「いや、そのう・・・」

「こないだ直したばかりのアリーナに、なんでこんな穴が開いちゆうがなや？おお？」

「あの、姐さん」

「なんなや？」

「全部一夏がやりました！」

「テメエ！鈴！」

「ほうかほうか、一夏？」

「へい！」

「覚悟はええかや？アシはかまんぞ」

「スンマツセンシター！」

用務員の北上様に、ボコボコにされた一夏。アリーナや学園の備品を壊し過ぎると、北上様により肅清されます。

鈴はついでにボコボコにされました。

喫茶五百蔵

「まさか、あの千冬君が教師とはねえ。人は変わるもんだ」

「あの、五百蔵さん。私の過去は秘密で・・・」

「ハハハ、すまないね」

「はあ、五百蔵さん、珈琲のお代わりを」

「はいはい」

「あれ？奥様は？」

「榛名さんは、義姉さんと買い物に出てるよ。娘の夏服を買い揃えるって、目の色変えてたよ」

「そうですか」

「はい、珈琲。榛名さんよりかは、味は落ちるかもだけど」

「まさか」

喫茶五百蔵にて、静かな時間を過ごす千冬。備品の壊し過ぎでキレた北上様に呼び出されるまで、後十分。

病院

「篠ノ之博士、お加減はどうかしら？」

「あくスコールく、なんとか大丈夫く」

「まさか、熱中症で入院するとはな」

「ジंकク、それは言わないで・・・」

「博士、その瓶はなんなのかしら？」

「バカチームが置いてった、お酒」

「あのバカ共」

「後で、叱っておきますわ」

「よろしく」

熱中症で入院した篠ノ之博士、見舞いに来た同僚二人。三人が居る病室にバカチームから『異常に膨張した魚の缶詰』が届くまで、後五分

I S 学園寮

今日は母様と買い物にいきました。母様お気に入りの喫茶店にいったら、織斑先生が電話で用務員さんに怒られてました。怖かったです。

その後、本屋にいったら、『母様より背の高い女の人』がいました。男の人といたからデートです。

女の人は『ポポポ』ってしゃべってたから、多分外国人です。キレイな人でした。

学園に帰ったら、一夏と鈴が織斑先生にヘル・アンド・ヘヴンウィータさされてました。また、備品を壊したみたいです。懲りないなっと思いました。

もうすぐで夏休みです。日本の夏は初めてだから楽しみです。
ラウラの日記

RE：十七冊目

諸君、久しいな。篠ノ之箒だ。半年以上諸君らと会う事が無かった訳だが、息災だろうか？

息災であるなら良しとしようではないか。

さて突然ではあるが、一つお知らせせねばならない事がある。

突如として始まり止まっていたセシリアクッキング編であるが、作者のミスにより消えた。

正確には、奴が続きを書こうとしたが、プロットを消失し手元に残ったのはラストシーンの一部のみ。それも千冬さんとある人が何故か全てを持っていくという、セシリアクッキング編とは一体何だったのかと言いたくなるようなラストシーンだったらしい。

流石のナマモノもあれはアウトだと思ったのだろう。

セシリアクッキング編のリメイクが決定した。

予定は未定ではあるが、プロットが組直り次第作成していくそうだ。

諸君らには多大なる迷惑を掛けて申し訳なく思う。

本当に申し訳無い。

良ければ、これからも『とある代表候補生の奮闘記』を宜しく願います。
では、話に入ろう。

諸君、愛する者の寝顔は愛しいものだ。

そうだろう？

寝顔というものは、本来であれば他人では誰も見る事の無いものだ。

しかし、今私はその他人では見る事叶わぬ寝顔を見ている。

それが何を意味するのか。解らぬ皆ではあるまい。

「．．ん．．」

ふう、エクセレント！

真琴とラウラ、この二人の寝姿のなんと愛らしい事か。

ふむ、見たいかね？

嗚呼、そうだと。素晴らしきものは共有されて然るべきだとも。しかし、そう、だ
かしかしだ。

諸君、私は独占欲の強い女なのだよ。よって、二人の寝姿と寝顔は私だけのものだ。

羨ましいかね？ んん？

羨ましければ、液晶と次元を越えて来るが良い。

・・・話を戻そう。何故、二人がこの休日の昼前まで寝ているのだ。

夏休み前の休日、なにもする事が無くテストも無事終わり、後は答案が返ってくる休日明けを待つのみとなった。

そんな日だ。

シャルロットからゲームの誘いがあった。

白猫? 『ねえ皆、戦車乗ろうよ』

すずね? 『またいきなりね』

白夏? 『え? なに? ゴジラ出た?』

蒼雫? 『それだと、私達全滅不可避ですわよ?』

本熊? 『・・・じゃあ・・・ガメラ・・・?』

熊兔娘? 『ギヤオスだー!』

ほーき? 『イリスはダメか?』

熊兔娘? 『ダメ!』

ほーき? 『そっかー』

白猫? 『それは後でDVD観ようか。ほら、あの戦車ゲーがアップデートしてたから

さ』

すずね? 『それで、久々にね?』

蒼雫? 『英国の優雅な戦車を見せてあげましょう』

白夏? 『戦車で優雅・・・?』

ほーき? 『一夏、雫も鳴かずば撃たれまいという諺を知っているか? 知っているな。

つまり、そういう事だ』

白夏? 『完結! 勝手に完結した!』

すずね? 『いいから、撃たれてなさい』

本熊? 『・・・一夏・・・さよなら・・・』

熊兎娘? 『良い奴だったのに・・・』

ほーき? 『惜しい奴を亡くしたな・・・』

白猫? 『それじゃ、二十時にジークフリートライン集合ね』

約全員? 『ういうい』

まあ、そんな話があつて夜通し戦車に乗っていた訳なのだ。

因みにだが

私がBT—7

真琴がKV—2

ラウラがポルシエテীগー

セシリアがチャーチル

鈴がパンター

一夏がルノーB1

シャルロットがマウス

このやる気あるのかという編成で挑み、簪に皆殺しにされた。

あのT—28おかしいよ。

髪飾？『マウマウだー！』

とか無邪気に言いながら、シャルロットと一夏が虐殺され、鈴が何とか後ろを取ろうとしたが瓦礫に引つ掛かり見事な無駄死にを遂げた。

髪飾？『ソ連許さない』

私もその時についてとばかりに殺られた。

残るはセシリアと真琴にラウラだが、セシリアが見事な寝落ちをかまし、ラウラも眠気で操作がおぼつかず真琴も二人のサポートに忙殺、敢えなく皆殺しにされた。

その惨劇の後、起きてる面子で試合を試合してみたが、一夏が何故かヘルキャットに乗り突っ込んだら、真琴のKV—2により吹き飛んだ。

野良でヘルキャットに酷い目にあつたらしいからな。

徹底していたよ。

流石の私も怖かった。

小さな声で

本熊？『・・・糞猫・・・ユルサナイ・・・』

と眩く真琴は。

ラウラが聞いていたら、どうなっていたか。

まあ、次の試合でフレンドリーファイア食らいまくった一夏が泣きながらルノーに戻ったら、飛び入りのLee先生が無双してきて全滅したりもしたが、久々の戦車ゲーは中々に楽しかったと言えるな。うん。

「ん・・・」

「起きたか、真琴」

「・・・あ・・・ほーきちちゃ・・・」

「ああ、私だ。ほーきちちゃんだとも」

「・・・うゝ」

なんと言うか、鈴も言っていたが、真琴とラウラの寝姿はこう、*ムギユツ*と密度が濃いな。

*ギューツ*でも*ギューツ*でもなく*ムギユツ*としている。これは互いに互いを抱き合って生まれる密度、ほら、あれだ。子猫が集まって寝ているあの感じだ。

そう、あの感じで真琴がラウラを*ムギユツ*とした感じで抱き締めている。

寝起きで頭が働いていないのだろう。寝惚け眼で周囲を見渡しては、首を傾げて私を見ている。

しかし、一夏の友人の奴も中々にやるではないか。

茨城に旅行に行った土産に、この「えらく傷だらけの熊の着ぐるみパジャマ」を買つてくるとはな。

なんでも、ノリと勢いで買つたらサイズを間違えて、真琴とラウラサイズのセットを買つてしまったとか言っていたらしいな。

ナイス判断としか言い様が無いな！

「あ、箒だ」

「ああ、ラウラ。おはよう」

やってやるやってやると言い出しそうな熊親子が、もそもそベッドから這い出し、寝惚け眼を擦りながら洗面台へと向かう間に、私は朝食、いや、昼食だな。その準備を進めるとしよう。

「母様、寝ちやダメー」

「・・・むう・・・」

「真琴、今日はお掛けののだろうか？」

「・・・うう・・・」

「母様——！」

ああ、真琴が二度寝の体勢に入って、ラウラを抱き締めて丸くなってしまった。

これは今日は無理かもしれんな。

ほーきき？ 『と言う訳だ。皆は先に行ってくれ』

すずね？ 『あんたも大変ねえ』

ほーきき？ 『愛する者の為なら苦労ではないさ』

蒼雫？ 『時々、箒さんの性別が解らなくなりますわ』

白夏？ 『箒は昔からこうだよ』

白猫？ 『そうなんだ』

熊兔娘？ 『そうなの？』

そうだと、私は変わらん。

変わりようが無いからな。

では、中途半端な所だが、真琴が本格的に二度寝へと向かい始めたので、今回はここで失礼する。

色々と急な事柄があったりもしたが、これからも私達の日々をふらりと見に来て貰えると嬉しい。

それでは、今回は近いうちに。

RE : 十八冊目

皆さん、お久しぶりですよ。熊谷真琴ですよ。

夏休み前の休日明け、とうとうテストが返つて来ました。

それで、夏休みの予定を皆と食堂で話をしようとしているんですが、その食堂のテラスで一夏と鈴が何をしているんですよ。

まあ、何となく「ああ、何時ものアレ」な視線の先で、一夏と鈴が向かい合つて紙をテーブルにドン！

「ドロー！」

いや、本当に何をしているんです？

「現国学年十位を攻撃表示！ I S 基礎理論を学年八位で守備表示！ 他一枚を伏せてターンエンド！」

え？ いや、ホント、何が始まったんです？

一夏、まさか夏の暑さで頭が・・・

鈴、大変ですよ！

「甘いわね、一夏！ 私は数学を学年九位で攻撃表示！ そして同種傾向の物理を学年

四位で特殊召喚！ アタックよ．．．！」

鈴もでしたよう！」

「え．．．ちよつ．．．と．．．？」

「まあ、待て真琴」

あ、箒ちゃんだ。

珍しく今日は洋食ですよ。

「今、二人が自分のプライドと私達の分を含めた支払いを賭けて戦っているのだ！」

鈴は箒が持つトレイに載った山程のハンバーガーにサンドイッチや生ハムにサラダ類を見た。

ーヤられた、ハメられた．．．！ー

なんか、この流れに慣れ始めた自分が居るが、一種のパワハラではないか。

横の真琴も、ざるうどんや手羽元のフライに、蒸し野菜を箒の二倍以上の量を載せている。

そして、その後ろをチョコチョコ付いてくるラウラも、中々の量を載せている。

そのまた向こうのセシリアとシャルロットも、箒の言葉を聞いて注文を追加し始めた。

「．．．そう．．．なんだ．．．」

「ーなにがなの・・・?!ー
こつちが支払うという事か？」

それだと、こんなバカやってまで奢りたいという事になるのだが、それは・・・

「ー脳みそお花畑じゃない・・・!ー」

勝負を本気にする為のベツトだと信じたいが、箸が食堂で一番高いハンバーガーを頼むのを見て、ガチだと思ふ。

意地でも勝たねば、財布が死ぬ。

「やる気だな鈴!!」

正面でアホが拳を握っているが、今の状況を理解しているのか。

しかし、気になる事がある。

箸と真琴とラウラが持つトレイの内容だ。大量のハンバーガーや麺類にサラダ類等々に加えて、これからの予定相談で摘まむ菓子類も積まれている。

積まれているが

「ー飲み物頼まないの?ー」

「そう思った瞬間、箸が

「む?・いかな。真琴、いいか?ー」では、こうしよう。負けた方が全員文の飲み物

も追加で持つてくる」

話の前後が繋がっていない。

鈴も長く日本に住んでいたが、たまに出てくるこの日本独特の何とも言えない何か。誰か止める者は居ないのか。

辺りを見渡せば、真琴が

「・・・そう・・・しよっ・・・か」

鬼だ・・・！

鬼ママよ・・・！

周りの声に助けは来ない事が確定した。

ラウラは少し状況が分かってないのか、キョロキョロしている。

「だったら、インターセプトオ！」

アホが特攻してきた。

「伏せカードをオープン！ IS 武装基礎理論が学年三位でアタック！」

「甘いわね、同種傾向の機構基礎理論を手札から特殊召還、学年四位でガード！ 武装基礎理論より機構基礎理論が重視されるから相殺よ！」

「くそー！ だが、まだまだだ！」

二人が唸った時、いつの間にかやって来た箒と真琴がトレイをテーブルに置き、こちらの答案の上から紙を置いた。

「はっはっは、真琴よ。飲み物を頼んだら愚痴もついてきたぞ」

うわあい、箒ちゃんも爽やかに笑ってますが、一夏と鈴の顔が面白い事になってますよう。

「母様母様、このクレープ美味しいよ」

「・・・ほら・・・ラウラ・・・口・・・拭いて」

「うむむ」

ほらもう、口の周りをクリームだらけにして。

「この子だったら、もう。」

「皆は夏休みはどうするの?」

「基本は寮で過ごすか?」

「私は一度イギリスに帰りますわ」

「僕もフランスに帰るよ」

「海外組は全員、一度帰るわね」

「母様母様、私とドイツ帰ろう!」

「・・・うくん・・・?」

IS学園はかなり特殊な学園ですから、夏休み等の長期休暇では国に帰る人達で寮はがらがることになるらしいです。

でも、大体の人は帰るのが面倒なのか、寮が閉鎖される期間に帰るのが主流なんだとか。

私も実家は学園から割りと近いですから、閉鎖期間に帰る予定です。それ以外？

部屋で本を読むに決まってるじゃないですか。

「俺は家に帰って、色々整理するかな？」

「私は真琴の家に行くぞ。『お義母様』に呼ばれているしな」

あれ？　なんか字がおかしかったような・・・？

気のせいですよね？　ね？

なんで皆は目を逸らすんです？

あれ？　ラウラ、こっちを見上げてどうしましたか？

「母様、ドイツ帰らないの？」

「いや、ラウラ。真琴は日本人だから」

「ふえ？」

なんかキョトンとしてますけど、私は日本人です。

しかし、困った事になりました。

「やだー！　母様もドイツ帰るのー！」

ほら、案の定ぐずり出しましたよう。

この子だったら、普段は良い子なのに、どうしてこう、妙な時にワガママになるのです？

「ほら、ラウラ。あまりワガママを言っではいけないよ」

「やーなの！ 母様も一緒に帰るのー！」

「・・・ラウラ・・・」

もう、そんなにしがみついても結果は変わりませんよう。

ほら、ラウラ。離してくださいよ。ああ、涙と鼻水が制服にい・・・！

「ふむ、そうだな。ラウラ、こうしよう」

「なに、箒」

「なに、簡単な話だ。夏休みに私もドイツへ行こう。そして、お前も真琴の家に行こうではないか」

へ？

RE : 十九冊目

白猫? 『さて、積雪1cmで都市機能が麻痺する下等民族共を支配しちゃおう』
すずね? 『ああん? 雪なんか降るわけ無いだろ? 盆地なめんなよお!』

白夏? 『雪降るんすか、そこwwww』

夏休みになり、チャットも賑わいを見せてますよう。

シャルの不規則発言もキレを増しています。

白猫? 『もつきゆもつきゆ、もつきゆもつきゆ。ああ、林檎美味しいんじやあ』

蒼雫? 『なんか、順当に青森食べる方が居ますわ』

白夏? 『夕張メロンと掛け合わせて、夕張ンゴ作るんじや』

すずね? 『やめーや!』

そう言えば、このプライベートチャネルを利用したチャットを誰にでも使える様にするって、東さんが言っていましたね。

まあ、何時になるかは分かりませんが、そうなったら今以上に賑やかになりそうですね。

白夏? 『誰か! 誰か、俺を殺せ!』

すずね? 『なんか一人、違うゲームしてる奴が居るわね』

白夏? 『AIに殺されるとか嫌や!』

なんで一夏だけ、いつも展開が早いんですかね?

どのゲームでも、一夏だけ急激な展開をみせます。

さてさて、AIに殺される運命の哀れな一夏は放つて置いて、私は私のやる事をしますよう。

では今日は、料理をしましょう。

目的は、ラウラのゴーヤとピーマン嫌いを直す事です。

あの子、基本好き嫌いしないのに、この二つはどうしてもダメなんです。

あ、でも、最近はピーマンを食べる様にはなってます。

その時は何故か本音が「誰か」と囁し立てていたような気がします、気のせいですね。

だって、その席には本音以外誰も居ませんでしたし。

「・・・えと・・・かぼちゃと・・・」

まあ、それはさておき。

今日の料理の材料です。

今回は「かぼちゃとゴーヤのカレー炒め煮」です。

カレー炒め？ カレー煮？・・・炒め煮です。

イメージ的には、スープの多い炒め物みたいな感じですかね？

それをラウラと箒ちゃんが帰って来るまでに、作りますよう！

このカレー炒め煮なら、ラウラもゴーヤが食べられる様になる筈です。

かぼちやもカレーも好きですからね。

「・・・ゴーヤ・・・挽き肉・・・カレー粉・・・」

二人が帰って来るまで後、二時間ちよつと。それまでに目指せ完成です。

ではでは、行きます。

「・・・まず・・・」

かぼちやを一口大にして軽く塩を入れて下茹でしてる間に、ゴーヤのわたを抜いて薄切りに、底の深いフライパンにオリーブオイルをしいて、クミンシードで香り出しと本には書いてますけど、そんなものは無いので挽き肉を入れて火が通ったら、ゴーヤを入れてカレー粉ドーン。

焦がさない様に炒めて、カレー粉と挽き肉の脂でゴーヤの苦味を軽くしていきます。なるかどうかわかりませんがね。

白夏？『箒、ラウラ、真琴、助けてくれ！俺を殺せ、殺してくれ！』

すずね？『これだけ見たら、凄い事件が起きてそうよね』

白猫? 『他人に自分を殺せなんて言うの、初めて聞いたよ』

蒼雫? 『と言うか、今日は真琴さんしか居ませんわよ?』

本熊? 『・・うん・・』

白夏? 『え、そうなん?』

本熊? 『・・ラウラは・・本音と・・箒ちゃんは・・横須賀・・』

白夏? 『あ、嘘。ちよつ、たすけ・・!』

白猫? 『さらば、一夏』

一夏が散りました。良い奴でしたよ。なんだかんだ言つて、嫌な役割とか雑用とか進んで引き受けてくれる一夏。

チーム戦では「任せろ囃! 轟け俺の零落白夜!」とか言つて、零落白夜ブンブン振り回しながら視界端で鬱陶しい動きを見せて、同じチームの筈の鈴に「鬱陶しい!」の一言と共にドロップキックを食らった一夏。

そして、まぐれ当たりした零落白夜で二人揃つてアウトになり、今年の学園珍プレー好プレー大賞候補の一つとなった一夏と鈴。

自分達で決めた作戦を自分で破綻させるなんて、どれだけ鬱陶しい動きをしていたのか?

それはご想像にお任せしますよう。

それで、ラウラと箒ちゃんが無処に出掛けているのかと言うと、ラウラは本音達と買物に、箒ちゃんは東さんの雇い主でもあり学園のスポンサーでもある。ハードラックダイアモンド社”に紅椿のメンテナンスへ行きました。

「あ・・焦げる・・・！」

おっと、いけません。危うく焦がすところでした。

うんうん、挽き肉も火が通ってゴーヤもしんなりしてきました。

ちよつと焦げたかもしれませんが、大丈夫。

母さんが言っていました。

料理は愛情＋結果オーライと。

そうです。熊谷家は結果オーライ、最終的に”かぼちやとゴーヤのカレー炒め煮”になれば良いのです。

さて、ではかぼちやも茹で上がったようすし、鍋から上げてフライパンへポーン。

ここでも焦がさない様に、味付けしたゴーヤと挽き肉と茹で上がったかぼちやを混ぜていきます。

これ以上焦がしたら流石にアウトです。

火を弛めて、全体に馴染んだら、少し鶏ガラスープを足して弱火で煮込みます。

レシピでは、ターメリックやコリアンダーにチリペツパーやらガラムマサラを加えな

いといけないみたいです、そんなスパイスはありません。

なので、熊谷家の料理モットー「料理は愛情＋結果オーライ」で突き進みますよう。水気が減ったら味をみて、塩コショウ少し加えて味を調べて、それでも足りなければカレー粉を足して少し煮たら出来上がり！

「・・・出来・・・た・・・」

出来ました。〃かぼちやとゴーヤのカレー炒め煮〃です。けど

「・・・淋し・・・い・・・?」

これだけだと、なんか淋しい感じですよ。

ふむ、どうしますか。

かぼちや、余ってますね。

野菜、あります。

レタス、トマト・・・

サラダ。

かぼちやサラダ、いきましよう。

レタスをざく切りに、トマトを輪切り、かぼちやはスライサーで細切りにして軽く湯通しして、レタストマトかぼちやの順で盛りつけて完成。

「・・・フランス・・・！」

今度こそ完成です。

“かぼちゃとゴーヤのカレー炒め煮”

“細切りかぼちゃとぎつくりレタスとトマトのサラダ”

“炊きたてご飯”

これならラウラのゴーヤ嫌いも直る筈です。

後は二人の帰りを待つだけですよう。

「・・・あ・・・」

ほら、足音と声が聞こえてきましたよう。

「・・・おか・・・えり・・・」

「ああ、ただいま。真琴」

「母様、今日のご飯なに？」

「・・・今日・・・は・・・」

それじゃあ、手を洗って、いただきます。

RE : 二十冊目

ズーヤん? 『うつす』

元ヤン? 『うつすうつす』

ズーヤん? 『いやあ、これ便利だね』

船長? 『マジそれな』

邪気目? 『総長様様ってな』

天才兎? 『わ、私は? ねえ皆、私は?』

約全員? 『……』

天才兎? 『何か言つてよ!』

ズーヤん? 『いや、ほら、博士』

船長? 『何て言うか、さ』

元ヤン? 『尊敬はしてる、してるんだが』

邪気目? 『普段のヘツポコぶりがアレでビミョー』

天才兎? 『ぐへあ……』

潰れる天才、体が弱ければ心も弱い。親友が世界最強なら本人は世界最弱である。

発光する画面の向こう側でプルプル震えている。

船長? 『まあ、言うなら、叔父貴と睦月の事で感謝もしてる』

元ヤン? 『アタシもオヤジと睦月の事は本当に感謝してる』

ズーヤン? 『博士居なかつたらと思うと、ゾツとするよ』

邪気目? 『下手したら、オツサンと睦月が死んでたかもだからな・・・』

悪ガキ隊? 『本当に有難う御座います。篠ノ之東博士』

天才兎? 『いや、うん、私は出来る事しただけだし、叔父さんに死なれたら嫌だし、うん』

突然の謝辞に照れる天才、このままいけば良い話だが、そうは問屋が卸さない。

クロ子? 『はつきり言ったらどうです? この天才のおかげで良識バケツオツサンは死なずに済んだのだ。感謝し崇め奉れ凡人共!! と』

天才兎? 『クーちゃーん?!』

天才の助手クロエ・クロニクルのダイナミックエントリー。

驚きのあまり、束の喉と心臓に痛みが走る。

痛みの原因は、突然のダイナミックエントリーによるストレスと負荷である。

クロ子? 『ささ、束様。不肖、クロエ・クロニクルのナイスアシストです。存分に天才ぶりを発揮してください。では、スタート』

天才兎? 『待とう、クーちゃん! 待つんだ! まだこの新型プライベートチャンネル“表示枠”の説明してないの!』
ゆうせきや

ズーヤン? 『あ、それなら夕石屋の二人に聞いたよ』

ハードラックダイアモンド社専属技術者の夕石屋、双子という訳ではないが、何をす
 るにも何時も二人一緒で行う変な奴等。

この新型プライベートチャンネル“表示枠”の開発にも携わっているが、専門はE。s
 タイプ“イエーガー”の整備開発である。

天才兎? 『え、嘘?』

元ヤン? 『マジマジ』

ズーヤン? 『いやあ、あの二人って仕事早いよね』

邪気目? 『あれだったか? 博士が足の小指ぶつけてショック死しかけている間だったか?』

船長? 『いや違うな。風邪引いて入院してた時じゃなかったか?』

天才兎? 『うう・・・』

クロ子? 『皆様、情報は正確にお願ひします』

追い詰められる天才に救いの手が差し伸べられる。

クロ子? 『正確には、博士が表示枠完成直後にフェイゲン様やオータム様の悪戯によ

り足の小指をテーブルの足にぶつけたシヨックで軽く心停止かまして、そして緊急搬送された病院にて何故かどうやってかは不明ですが、器用に風邪を引いて意識不明となっている間に、です』

天才兎？『うぐあ・・・！』

筈だったが、そんな事は無い。

天才の助手は天災である。

紅茶姉？『あまり、束を苛めるものではありませんヨ？』

ズーヤん？『総長だ』

元ヤン？『総長、休み？』

紅茶姉？『えエ、比叡達が頑張ってくれマシテネ。束の妹と話をする時間も得られマシタヨ』

笑うハードラックダイアモンド社総長“金剛”、最近は新型イエーガーの開発プロジェクトや、スポンサーを務めるIS学園でのイベントの為にドイツへ行ったりして、て中々に多忙な毎日を送っていたが、どうやら休みが出来た様だ。

紅茶姉？『学園祭が今から楽しみデスネ』

船長？『総長、何すんだ？』

紅茶姉？『義弟と“ドイツの彼”へのサプライズプレゼントデスカネ』

元ヤン？『まさか、ドイツのACリーグのチャンピオンか』

邪氣目？『マジかよ！』

知らぬ内に未来が決まっていくなイエーガーリーグチャンピオンで現喫茶店のマス
ター五百蔵冬悟のオツサン、本人は店のピーク時間が過ぎゆったりとした時間を、嫁さ
んの榛名と過ごしている。

クロ子？『ふと、気になったのですが』

ズーヤン？『ん？どったの？』

クロ子？『穂波様、今日は大人しいですね』

空気が固まった。

横須賀一のバカ、藍越学園最強のアホと言うか下手したら恥部、神様がノリで性別間
違えた奴、今年の夏もシャッター前、の磯谷穂波が大人しい。

思い返せば、今日奴を見た者が居ない。即ち、今あのア穂波は野放しで闊歩している
という事になる。

船長？『比叡に連絡は？』

先ずは木曾が立ち上がり

邪氣目？『済んでる』

天龍が木刀を手に取り

元ヤン? 『鈴谷、準備』

ズーヤン? 『はいはい』

摩耶がナツクルガード付きのグローブを嵌め、鈴谷が関係各所へ連絡を入れる。

幾度となく繰り返してきた“対ア穂波用オペレーション”、今週入って三回目の発動である。

紅茶姉? 『皆、夕飯までには帰って来ナサイ。今日は洋の店に行きマスヨ』

約全員? 『はい』

良い返事に笑みを溢す金剛、帰りに義弟の店に寄ろうかと考えていると、クロエが

クロ子? 『おや? 博士、顔色が随分面白い事になってますね』

天才兎? 『クーちゃん、これなに?』

クロ子? 『気にする事はありません。ただのスポーツコーンスープです』

天才兎? 『えと、コーンスープの甘味と温かさ、スポーツドリンクの酸味と塩味が纏めて迫って・・・』

クロ子? 『束様、端的に申しましてそれ、ゲロの様な臭いですね』

天才兎? 『作った本人が?!』

とか、束と漫才をしているが、作ったのは警備部門の自由人共だろう。

スコールに報せておくか。覚えていたら後で。

そう思い、金剛は表示枠を閉じた。

「ふふ、良い子達デスネ」

金剛は葉巻に火を着け、ゆっくりと紫煙を口内で転がし、左手の薬指に嵌まった輪を撫でる。

「本当に良い子達デス」

「誰がだ？ 金剛」

「ああ、帰ったのデスネ」

「ただいま、金剛」

「おかえりナサイ、アナタ」

今日あった事を帰ってきた伴侶にどう話そうか。

洋の店で話そうか。

帰りに二人で寄る義弟の店にしようか。

ああ、洋の店なら北上が居るかもしれない。なら、二人で義弟の店にしよう。

「楽しそうだな、金剛」

「ええ、良い子達と良い日々を過ごしてイマスカラ」

楽しみと言うのは、幾つになっても胸を踊らせる。

そう思い、金剛は葉巻を灰皿に押し付け、伴侶に微笑んだ。

RE：二十一冊目

夏休みが始まりました、私の読書タイムもヘヤノスミスと共に充実の一途を辿っていますよう。

目が覚めて伸びをして、クーラー効かせた部屋でお布団被って本を読み、読み終わっては続きを読む。

そして、好きな時間に眠る。

正に天国、天国ですよ。

「・・・次は・・・」

何を読みましょう？

ふうむ、悩みます。

ほーき？ 『ふうむ、真琴。いいか？』

本熊？ 『箒ちゃん・・・どう・・・したの・・・』

ほーき？ 『なに、あれだ。夜間外出をしないか？』

本熊？ 『へ・・・？』

夜間外出ですか？

でもあれ、割りと手続き面倒だった筈じゃ？

すずね？ 『ラウラとセシリア捕まえたわよー』

熊兔娘？ 『何をするんだ、鈴』

蒼雫？ 『そうですね。折角、十センチ越えのカブトムシを見つけたのに・・・！』

すずね？ 『・・・一応、言っておくわよ？ 花の女子高生の台詞じゃないからね、そ

れ』

白夏？ 『クワガタ採ったぞー！』

約全員？ 『お前もかよ！』

ほーき？ 『手続きなら心配するな。既に全員分済ませてある』

白猫？ 『簪がね』

簪がですか？

あれ？ でも、簪って私と同じインドア派の筈なのに、夜間外出の申請を出したですよ？

白猫？ 『簪なら、今頃は太平洋沖かな？』

本熊？ 『・・・太平洋・・・沖なん・・・で・・・？』

ほーき？ 『ほら、この間思い付きで言っていただろう。ISを使ったスイングバイ式

移動』

熊兔娘？『あれだ、星をグルンて回るの』

ほーき？『そうだ。星を中心に星をグルンと星の速度で回る奴？だ』

すずね？『大体、そんな感じね』

蒼雫？『それで、その思い付きをネットに投稿したら、箒さんのバックアップ企業であるハードラックダイアモンド社から』

ほーき？『二度、我が社で実験をしてみませんか？』と総長直々に誘いを受けてな』

白夏？『それでまあ、長期外泊許可を申請している間に俺達が簀の荷物を準備』

すずね？『その代わりに、簀が面倒な手続きを全員分終わらせてくれたって訳』

ほーき？『姉さんも張り切っていたよ。ISを用いた大気圏内でのスイングバイ実験、これが成功すれば輸送関連に革命を起こせるとな』

束さん、張り切るのは良いですけど、大丈夫ですか？

倒れてませんか？

太平洋沖という事は船の上ですよ？ 船酔いしてませんか？

ほーき？『姉さんなら心配するな。既に吐くもの吐いて、動かなくなったらしい。出港から一分でな』

白夏？『安定の束さんだな』

予測可能回避不可能、避けられなかった必然の犠牲、車椅子で酔った事がある束さん

が船に、長時間航行に耐えられる訳がなかったのです。

ほーき？ 『あと今日、食堂は一時閉鎖だ』

本熊？ 『・・え・・なん・・で？』

ほーき？ 『機材の故障でな。明日の夕方には間に合うそうだが、今日と明日の昼間は食堂は閉鎖だ』

食堂が一時閉鎖ですか。ふうむ、それなら仕方ないですよ。

本熊？ 『・・じゃあ・・行く・・』

ほーき？ 『では、一時間後にロビーに集合だ』

約全員？ 『はい』

一時間後に集合ですか。服はどうしましょう？

何時も通りで良いですね。

さて、準備しましょう。

髪飾？ 『箒、篠ノ之博士が痙攣してから動かなくなつた』

ほーき？ 『あれだ。水を与えて放置、少ししたら動き出す筈だ』

髪飾？ 『動かなかつたら？』

ほーき？ 『諦めて、実験を開始するといひ』

セメント、箒ちゃん、束さんに対して本当にセメントですよ。

もう少しくらい、優しくしても良いんじゃないですか？

髪飾？『箒、セメント』

そうです。簪、言うのですよう。主にこれから改善される事の無い束さんの体力面の為。

ほーき？『はっはっは、当然だろう。姉さんには感謝もしているが、面倒を掛けられた記憶が目立つのでな』

あ、ラウラおかえりなさい。

つて、ラウラダメでしょう。えー、じゃありません。

ほら、蟬は窓から逃がして早く着替え・・・

ああもう、シャツ泥だらけにして・・・！

「母様母様、今日はフアミレスだ！」

「・・・そう・・・なの・・・ほらバン・・・ザイ・・・して」

もう、シャツだけじゃなくて髪も。まだ時間はありますから、ラウラを早めにシャワーで泥を落として着替えさせて、ああギリギリですよう。

髪飾？『私も似たようなものだね』

ほーき？『偉大な姉を持つと、妹は苦勞するものだ』

夕石屋？『そろそろ、実験始めますよー』

軽々振り回して、楯無さんのあの槍をへし折って、有給取って帰ったら幸いです。

なんでも、その日は小学生の娘さんの参観日だったとか。

「で、どこ行く?」

「〃サイゼンヤ〃?」

「え? 僕は〃ココツシユ!〃がいいな」

「ファミレスか。あれだよな、たまに晩飯がファーストフードとかだと、なんかワクワクするよな」

一夏の言う通り、なんかこうワクワクするですよ。

「ファーストフードかあ。〃マック&ナルト〃?」

「〃健太とリツキー〃はどうですか?」

「〃サブ道〃は?」

個人的には「健太とリツキー」ですが、あの店高いんですよ。

値段的には「マック&ナルト」ですね。あ、「サブ道」はここからだ少し遠いですよ。

「ふむ、確かに皆それぞれに行きたい店があるだろう。しかしだ、我等には門限がある」

「あ、そっか」

「なので、本日は目の前の「びっしよりボーイ」にしよう」

何故か全身びしょ濡れになって、言い様の無い異様なまでに狂気を孕んだ目でこちらを凝視するキャラクターがマスコットのファミレス「びっしよりボーイ」。

値段が安くて量が多いメニューが豊富で、私達みたいな学生や家族客に大人気のお店です。

ですが、マスコットキャラクターが・・・

「いつ見ても、スゴいキャラクターだよな・・・」

「店に入るのを躊躇うわね・・・」

一夏と鈴が言う事も解りません。

だって、さっきからラウラが私の背中に貼り付いて離れないんですよ。

ほーら、ラウラ？

大丈夫ですよーう。あれは動かないですからね。

・・・多分、きつと。

「はっはっは、どうしたラウラ？ なに、気にするな。あれはただの人形だ」

「・・・やだ！ あれずつとこつち見てるもん！」

「それは気のせいだ。ほら、見てみるといい。今から、一夏と鈴がそれを証明してくれる」

「「え？」」

箒ちゃんお得意の脈絡の無い無茶ぶりが始まりました。

メニユー表見ながら、ジャンバラヤ食べたいとか、私ドリアとか言っていた二人が人形並みにスゴい目で助けを求めています。セシリアもシャルロットも良い笑顔でこちらサイドに居ます。

無理です。諦めて、ボーイが大丈夫だとラウラに証明してください。

「……斬るか？」

「……吹っ飛ばす？」

「何故、暴力で解決しますの？」

「次から夜間外出が出来なくなるからやめよう」

「あ……箒ちゃん……」

「七人で、ええ、ボックス席をお願いします」

四人がボーイを囲んであーだこーだ言っている間に、箒ちゃんは店に入り席を確保してました。

「さ、今の内に入るといい」

「いや、待とうか」

「どうした？ シャル」

「箒、僕達を盾にしたね？」

「ラウラの為だ。気にするな。まあしかし、黙って盾にしたのは申し訳無い。なので、今日は私の奢りだ」

箒ちゃんの奢りですよ？

大丈夫なんです？

「いいの？」

「懐の事なら心配いらぬ。先日、姉さんと総長から臨時収入があつてな」

「まあ、そういう事なら？」

「母様、ポテトがある！」

「・・・ラウラ・・・ポテト・・・以外・・・も」

頼まないで、寮に帰つてからお腹空いたつてなりますよ。

ほーら、オムライスありますよ。

あ、私ラザニアがいいです。

RE：二十二冊目

「ふむ、ウエイトレス君」

「待ちなさい、箒」

「なんだ？ 鈴」

「メニユー表を渡しなさい」

ほらほら、ラウラ？ そんなに急がなくてもポテトは急に無くなりませんよう？

ケチャップ付け放題なのは分かってますから落ち着いて、ほら、もう〃ケチャップ付けたポテト〃なのか〃ポテト付けたケチャップ〃なのか解らなくなってるじゃないですか。

「む？ なにかどうしても頼みたいものがあつたのか？」

「箒、何を頼もうとしているのか言ってみなさい？」

「はっはっは、鈴。〃ここからここまで〃だ」

「見開き一ページ頼むバカが何処に居るのよ！」

「ここに居るぞ？ それにだ。こういうものは一期一会、出会いと冒険心が大切だぞ？」

ああもう、口の周りもケチャップまみれにして。

こちら、じつとしなさい。

あ、チキンナゲットなんていつの間に頼んだんですか?!

オムライス食べれなくなっても知りませんよ?

「そんなに食べたら太るわよ!」

「太るか? 私達が?」

「太・・・らないわね」

「専用機持ちなら、尚更太りませんわ」

「と言うか、食べないと痩せるよね?」

「・・・うん・・・」

世の減量、スタイル維持に悩む皆様。IS学園に入学すればそんなお悩み、一発解決ですよ。

IS乗って空飛んで、楽そうに見えても、あれですよ?

あれ、めっちゃ必死に動かしてますからね?

全身運動ですよ。

織斑先生も、モンド・グロツソ決勝の後は体重が3kg落ちてたそうです。

ISのパイロット保護機能があっても、3kg落ちるのです。

ちよつと保護機能弱めに切ってガッツリ飛んだら、5kg位なら直ぐに落ちますよう。

あ、このパスタ美味しいですよ。

夏野菜の醤油。パスタ、当たりでした。

「そう言えば箒、今年の夏祭りはどうするんだ？」

「神楽なら私が踊るぞ。・・・間違っても、姉さんに踊らせたなら、な？」

「アキレス腱断裂とかやりそうだな・・・」

東さんの場合、それで済めばいいですよ。

因みに初めて会った時は、花粉症で脱水起こしかけてました。

「あ、一夏。ソース取って」

「あいよ」

「一夏、塩取って」

「ほい」

「一夏さん、お茶をお願いしますわ」

「うい」

なんか、自然と一夏が動いてますけど、ある意味諦めの境地ですよ？

「唐揚げにはマヨネーズですわ！」

「いや、塩コショウだね！」

「オーロラソースだ！」

「ゆず胡椒は異端か？」

なんでもいい派です。あ、でも、レモンはかける前に言ってください。

それを黙ってしたら戦争です。

熊谷家絶対のルールです。

「夏休み、どうする？」

「僕達海外組は帰るまでまだ日はあるよ」

「帰っても、そんなに長くは居ませんし」

「プールでも行くか？」

「キャンプはどう？」

「千冬姉に頼んでみるか？」

私は部屋に閉じ籠って本を読みます。ヘヤノスミスでラウラを抱っこしながら本を

読みます。

誰が来ても部屋から出ない構えですよ。

あ、でも、蔵持技研に呼ばれてました。

ふう、面倒です。

「皆皆、あれ、あれ！」

「どうした？ シャルロット・・・ やりおったわ」

ああ〜、ラウラが柔らかい〜

お腹もほつぺもムニムニ柔らか〜

ああ〜

白猫? 『まあまあ、ほら、まだニュースがあるみたいだよ?』

『また、ハードラックダイアモンド社は新型E o s イーガーの開発を発表しており、第五世代イーガーを開発中・・・』

蒼雫? 『第五世代ですか』

すずね? 『ISも筈の第四世代が最新式なのに、早いわね』

ほーき? 『E o s はISよりも造りが単純だからな』

白猫? 『蔵持技研を買収したのって』

髪飾? 『ハードラックダイアモンド社、IS造るってさ』

白夏? 『なんか、聞き覚えがあるような気がする語感』

ほーき? 『む? 真琴、どうした?』

本熊? 『・・・なんか・・・こうキャ・・・パオー・・・バー』

熊兔娘? 『母様母様、このケーキ美味しいよ!』

なんとと言うか、所属企業がいきなり買収されて混乱しない人は居ないと思います
よう。

用務員? 『おう、ガキ共』

白夏? 『あ、北上の姐さんだ。どうしたツスカ?』

用務員? 『一夏か、この表示枠ゆうがは中々能がいいのう』

すずね? 『ISのプライベートチャンネルを流用してますからね』

北上さん、H・Nがそのままです。

あれ? 箒ちゃん、どうしたですよ?

いきなり席を立ったりして?

用務員? 『まあ、それはかまんがの。のう、おんしら?』

え? 支払いも済ませて偉く急いでます。

あ、ラウラ、お腹一杯でおねむですよ。

ほら、ギューしてあげますよう。

用務員? 『今、何時か解っちゅうかや?』

あ、門限!

リニアの移動時間入れたらギリギリですよ!

約全員? 『しまった・・・!』

い、急ぐです!

北上さんは割りと容赦しない人ですから、遅刻したら閉め出しとか普通にやられます

よう！

「急いで！」

「姐さんの番の日に遅刻とか死ぬ！」

「真琴と箒、早！」

「待つてほしいですわ！」

この後、なんとかギリギリで門限には間に合いましたが、リニアの発着駅からあんなに走ったのは初めてでしたよう。

RE : 二十三冊目

白夏? 『んじやあ、俺が教室に飛び込んで「皆! 今すぐここから逃げろ!」って言うから』

すずね? 『即座に私が「そいつを連れて行け。生きて部屋から出さな」って言うのね』

白猫? 『それで僕とセシリアが』

蒼雫? 『一夏さんを連れて行って』

白夏? 『俺が「死にたくない!」って叫びながら、教室から引き摺り出されて』

ほーき? 『私が「君達には期待しているよ」と言つてフィニッシュか』

髪飾? 『いや、何の話?』

白夏? 『え? 来年度の新入生歓迎会の出し物』

髪飾? 『やめーやwww』

ほーき? 『なら、いきなり一夏にピンタでいくか』

白猫? 『一夏が何か言う度にピンタしていくの?』

ほーき? 『いや、ガツダム言いながらグラサンかけて、不定期にいきなりだ』

髪飾? 『あ、じやあ、それ私がやる』

白夏? 『決定・・・?』

本熊? 『・・・一夏・・・ガン・・・バ』

熊兔娘? 『一夏、がんばれ』

夏休みの夜、寝る前に皆と表示枠でバカ話ですよ。

来年度の新入生歓迎会の出し物の話をしてますけど、一夏が被害者役多いです。

白夏? 『気にすんなって、俺やで!』

すずね? 『まあ、一夏は置いといて』

白夏? 『あ、置いちやう?』

すずね? 『また後で拾ってあげるから、大人しくしてなさい』

蒼雫? 『それで、明日はどうしますの?』

白猫? 『昼過ぎまでは各自自由行動かな?』

本熊? 『・・・待ち合・・・わせは・・・?』

ほーき? 『喫茶“五百蔵”だな』

喫茶“五百蔵”なら静かに過ごせそうです。

あの店のマスターを知っていたら、騒ぐ人は居ませんよう。

まさか、E o s i e e r g a r i e g の元初代世界チャンピオンの人がやってる店とは思いませんでした。

白夏? 『サイン貰えるかな?』

ほーき? 『分からんぞ? 叩き出されて、店のオブジェにされるかもしれん。一夏は』

白夏? 『なんで最後付け足した? ねえ?』

ほーき? 『気にするな』

白夏? 『わかった!』

蒼雫? 『いや、一夏さんはそれでいいんですの?』

すずね? 『セシリア、本人の意思を尊重すべきよ』

白猫? 『そうだよ』

髪飾? 『本人のwww意思www』

本熊? 『簪・笑い・すぎ・』

熊兎娘? 『母様母様、このパイ食べたい!』

ヤルダーパイですか。色々なフルーツをこれでもかと好き勝手に乗せたオーダーメイドのパイでしたね。

不屈のヤルダーが、死神シエラのお祝いにあげたものでしたね。

割りと、お金任せに作ってるみたいなんで、作るのは面倒そうですね。

ほーき? 『そうかそうか、ラウラはそのパイが食べたいか』

熊兎娘? 『そうだぞ』

ほーき? 『そうかそうか、ふむ』

すずね? 『え、なにこの流れ?』

白猫? 『しつ、ダメだよ鈴。巻き込まれるよ。浄化されて灰になるよ』

蒼雫? 『それは、あなただけでは?』

白夏? 『シャル、また灰になるん?』

白猫? 『大丈夫、臨海学校で耐性が付いたから』

髪飾? 『フラグ乙』

ほーき? 『でもどうする? そのパイはかなり大きいだろう?』

熊兎娘? 『それは、皆で一緒に食べるんだ』

あら、家の子つたらなんていい子なんでしょう。

ほら、ラウラ。ギューしてあげますよう。

すずね? 『・・・やだもう、この子本当にいい子』

白夏? 『いや、あれ? シャルロさん? シャルロさん?!』

蒼雫? 『反応がありませんわ!』

“管理”? 『白猫 様が浄化され退室されました。了承しますか? はい／いいえ』

髪飾? 『衛生兵ー!』

シャルにまた何かあったみたいですよ?

浄化って、シヤルに何が？ 三正面作戦でもしましたか？
 って、あら？

白猫？ 『ダイジョウブダヨ』

白夏？ 『ボス！』

白猫？ 『ボクハビーストダカラネ』

蒼雫？ 『ダメっぽい上に、"ラッキー" が抜けてただのけものになってますわ』

すずね？ 『やばんちゃん！』

髪飾？ 『やばんちゃんwww』

ほーき？ 『やばんちゃんは卑怯だろう・・・！』

邪パリパーク、これ言った方がいいですかね？

いや、音は変わらないし、言わなくてもいいですね。

しかし、やばんちゃんは卑怯ですよ。

白夏？ 『そう言えばさ、簪』

髪飾？ 『馴れ馴れしい、何？』

白夏？ 『ひどくね？ まあいいや。ほら、スイングバイ実験』

髪飾？ 『ああ、あれかあ。成功成功』

すずね？ 『あ、やっぱり』

髪飾？ 『まあ、コスト面から採用はまだ先みたい？』

すずね？ 『星の速度でISが飛んできて、荷物をお届け。コストも凄い事になるわね』
蒼雫？ 『まあ、そうですわね』

ほーき？ 『流石の総長も、今はまだ待つしかないと言っていたいなあ』

本熊？ 『・・・そう・・・なんだ・・・』

と言う事は近い将来、空を荷物積んだISがギョングン飛び回るなんて事がある訳ですよ。

通販で、頼んだその日の一時間以内にお届けですよ？

白猫？ 『イチカ、チョットケモノガリニイコウヨ』

白夏？ 『あれ？ ボスから戻らねえ』

すずね？ 『どちらかと言えば、狩られる側よね？』

白猫？ 『ハ、ハ、ハ、ナニライツテイルンダイ？ ホラ、ミミヲスマセテゴラン。キコエルダロウ、クラクシメッタオトガ』

蒼雫？ 『アウトー！』

髪飾？ 『火薬庫武器用意しないと・・・！』

ほーき？ 『パイルハンマーだな！ 分かるとも！』

あのゲームは、斧と散弾銃の何処かの神父さんスタイルが私のジャスティスです。

初見であの人との戦いとイベントは辛かった・・・

熊兎娘? 『火炎放射機、火炎放射機で燃やさないと・・・!』

白夏? 『ラウラがバグった!』

蒼雫? 『oh majestic!』

髪飾? 『あああああ! なんか、増えたー!』

本熊? 『・・・匂い・・・立つな・・・あ・・・』

すずね? 『嘘でしょ、真琴・・・!』

ほーき? 『ああ、分かるよ。秘密とは甘いものだ』

白夏? 『最悪の人選が最悪な方向にいきなり駆け抜けた件に関して一言』

白猫? 『マア、シカタナイネ。ソレヨリ、クラクシメツタノウエキヲチヨウダイ』

すずね? 『アウトー!』

ちよつとネタに乗ってみましたけど、まさか箒ちゃんまで乗ってくるのは予想外でしたよう。

しかし、シャルは何時になったらボスから戻るんですよう?

RE : 二十四冊目

事実は小説よりも奇なり。箒の心境は正にそれであつた。

確かに、事実は小説よりも奇なりだ。

今現在の自分の立場がそうなのだから。

ISという、空飛ぶ不可思議な機械に乗り、リアルブンドドしている身だ。正直な話、これ以上の奇はそうそう無いと思つていたが、それはどうやら自分の未熟であつた様だ。

「ふむ」

しかし、今はその未熟を悔やむ時ではない。

そう、歓迎する時だ。

己の未熟と見識の浅さが招いたこの事態、歓迎せずしてなんとするか。

そうだ。あの首領総長も言つていた。

『楽しい事は正義なのデスヨ』

そうだ。楽しい事は正義だ。ならば、この事態を楽しまなければならぬ。

「ちよつとなに、止まって．．．あ？」

「鈴さんも、どうしたのですか　．．．い？」

「セシリアもどうしたのさ　．．．う？」

「ちよつと、皆どうしたの　．．．え？」

鈴、セシリア、シャルロット、簪の順に箒達の三人部屋に入り、順に固まつた。

「箒、皆来たぞ」

「ふむ、皆、よく来たな」

「よく来たなつて　．．．」

「一体、何が　．．．？」

「えつと、それ『誰』？」

「有り得ないけど、まさか　．．．？」

四人の視線の先には、この部屋の主である三人の内の二人、箒とラウラが居る。しかし、もう一人、この部屋には主が居る筈だ。しかし、四人の前にインドア長身の姿は無い。念の為、定位置という名のもう一つの住み処であるヘヤノスマスを見るが、そこにも居ない。

しかし、箒の膝の上に小さく丸まっている見慣れない者が居た。

「いや、まさか、そんな訳」

「漫画やアニメじゃないんですのよ？」

「だよねー」

「真琴だぞ」

「母様だぞ」

「はっはっはっ、ナイスジョークって、え・・・？」

「ああ、そうだ。見給え、諸君。私の女神が天使になった・・・！」

満面の笑みで、箒が自らの膝の上で丸くなっていた者を、全員に顔が見える様に抱き上げた。

黒い髪、少しタレ気味の目、どこか気の抜けた雰囲気、自分達の間接と箒とラウラが間違っていないければ、その小学校低学年程の少女は間違いなく熊谷真琴であった。

「は？ え、うそお？」

「現実だ」

「そうだぞ、母様だぞ」

呆気にとられるいつものメンバーの一人、鈴が疑念を口にしているが、箒とラウラの二人が即座に疑念を否定する。

見覚えがある程度にしか共通点の無い少女を、何故にそこまで真琴と断言出来るのか。

「実はな、ハードラックダイアモンド社で、アンチエイジング飲料を試作していいだな」
「あ、大体の流れが分かった」

箒と真琴、簪が所属するハードラックダイアモンド社では、新たにアンチエイジング効果が期待できる食品類を売りに出そうと、ハードラックダイアモンド社開発部門が正気をドブに放り捨てて開発していた。

その商品の一つ、グングン飲む飲む肌若返るTM、これが全ての元凶であった。

「まあ、なんだ？ ナノマシン医療技術を、ふんだんに盛り込んでいるらしくてな。予算も何もをかつ飛ばした仕上がりになったそうだな……」

「いや、それで試作品貰って、真琴だけが飲んだら、こうなつた訳？」

「うむ、予算の関係で貰ったのは一本だけで、入れ物が某飲むヨーグルトに似ているだろう？ 実は味もそうらしい。あ、後な、鈴」

「なによ？」

「この頃の真琴の顔の前に、不用心に手を出さない方がいいぞ」

「はあ？ なによ、そ……」

れ、と鈴の言葉は続かず、ガリンという音が鈴の手の辺りから聞こえた。

「はあ、遅かったか…… 鈴、先ずは落ち着け」

「いや、落ち着けて、どうしたのさ、これ？」

「シャルロット、皆も、鈴を少し押さえ付けておいてくれ」

「あ、うん」

「構いませんわ」

「鈴、指繋がってる?」

予想外の事態に固まる鈴を押さえ付ける簪が言う通りに、鈴の右手指はチビ真琴の口の中に収まっていた。

しかし、ただ収まっている訳ではない。先程、聞こえてきた音の通りに、口内に収めたのではなく、がっぷりと噛み付いていた。

「いいな? 鈴、この頃の真琴はかなり凶暴だ。ご覧の通りに、噛み付いてくるぞ」

「言うのが遅いわあああああつ!」

箏の言葉に漸く、事態を飲み込み痛みを認識した鈴が、暴れ出そうとするが、他のメンバーに押さえ付けられ、びくともしない。

だが、噛み付かれている右手は体の動きに合わせて揺れる。それと同時に、鈴の右手にがっぷりと噛み付いている真琴も揺れる。

即ち、物凄く痛い。

「ああああああ! 離して! このガチチビグリズリー離してえ! 指取れるあああああ!」

「よーしよしよし、鈴落ち着け。暴れたら暴れた分、深く食い込むぞ?」

「ガチ野性動物の対処法じゃないのよおおお!」

「母様母様、大丈夫だ! 鈴は友達、怖くないぞ!」

右手を動かせば動かすだけ食い込んでいく歯、それを引き剥がそうとラウラが語りかける。

すると、不承不承といった感じで真琴が鈴の右手を離した。

「ヴー」

「ほーら、母様。こつちだぞー」

「指、指ある? 私指ある?!」

「大丈夫、繋がってる」

「大丈夫ですわ、繋がってますわよ」

「ヴー・・ほーきちちゃ・・」

ラウラに導かれるまま、箒に抱き着きまた動かなくなつた。

「えーと、箒?」

「うむ、どうやら、肉体と共に記憶も幼児退行しているらしくてな。ご覧の通りに、記憶にある私と自分と同じ匂いのするラウラにしか懐かないのだ・・!」

「ガチの野性動物化してる・・!?!」

「はっはっはっ、参った。未来の真琴はムツチリ感が凄いが、過去の真琴はモツチリ感が凄いで……！」

「まったく、参った様に聞こえないんだけど」

自分の腹辺りにしがみついて離れない真琴を、撫でたりポンポンしたりしながら、箒は満面の笑みを浮かべる。

鈴はセシリアにより治療中だ。

「あれ？　そう言えば一夏は？」

「あれ？」

「……」

いつものメンバーの一人である一夏が居ない。呼んでいないという訳ではないが、居ない。

それは何故なのか？

無言で目を逸らした簪を、真琴以外の全員が見た。

「はっはっはっ、皆、どうかしたのかね？」

「簪、お前、あのドリンクどうした？」

「君達の様な、勘の良い連中は嫌いだよ」

「こいつ、やりやがった……！」

「だって、怪しかったし・・・」

のほほん? 『お嬢様、おりむー発見しました〜』

髪飾? 『ご苦労』

すずね? 『ご苦労、じゃねーわよ』

蒼雫? 『本音さん、一夏さんの容態はどうなってますの?』

のほほん? 『おりむーはね〜、屋上で寝てたよ〜』

白猫? 『なんで屋上?』

ほーき? 『なんか、高いところに行きたがるカタツムリの話が・・・』

髪飾? 『やめよう! その寄生虫は洒落にならない!』

のほほん? 『おりむーは無事確保〜、またね〜』

取り敢えず、一夏の無事は分かった。体も真琴の様に幼児退校はしていない様だ。

本音が何故か、〃画面外〃に手を振っていたのが不思議だが、相手は本音なので、他に〃誰か〃居たのだろう。

「夕石屋の二人からも、明日になれば戻っているらしいから、今日一日はな」

「真琴もこんなだしね」

「喫茶五百蔵の夏のケーキフェアはまだやってるし、明日にしようか」

「すまん」

「指取れそうになったのは予想外だけど、明日にしましょうか」

「鈴は本当にすまん。明日は『五百蔵』で一番高いケーキを奢ろう」

「それ『吹雪スペシャル』になるからいいわ・・・ あんなの、吹雪以外が食べたら一発糖尿よ」

喫茶『五百蔵』で一番高価なメニューは、長女専用メニューと言っても過言ではない。

因みに、次点が次女メニューであるが、こちらは普通に少し大きめのパフェだ。「では、また明日」

言って解散すると、真琴が箒の腹辺りに頭を擦り付けてきた。時計を見れば、昼寝に丁度良い時間だ。

箒はあまり昼寝をする質ではないが、たまにはいいだろうと、部屋の空調を少し調整してベッドへと横たわる。

「ほら、ラウラも」

「うん」

自分にしがみついてくる小さな想い人を抱き寄せ、箒はゆつくりと目を閉じた。

あの鳳洋が幼女化している。

それは何故か？

瑞鶴には知るよしはないが、とある首領が自社試作品で「夫婦の時間」を楽しみ、その惚気話に嫉妬した何処かの居酒屋店主がこっそり試作品を譲り受けて、現在に至るといふ話があつたりするが、瑞鶴には知るよしは無い。

「取り敢えず、食堂行こうか」

「はい」

瑞鶴190 cm、鳳洋120 cm。少し、身を屈めて手を繋いで歩く姿は、年の離れた姉妹のようにも見えたという。

RE : 二十五冊目

時はほんの少し遡る。

真琴の幼女化がメンバーに発覚する前、織斑一夏の部屋での事だ。

「……………」

一夏は困惑していた。

今、自分に何が起きているのか。心当たりが無い訳ではないが、それでもこれは無い。いや、確かに、「無い」のだが、そんな事を言っている場合ではない。

今はこの状況をどうするかが問題だ。

「……………ふう、まさか、な」

「無い」と思ったら「有った」。何を言っているのか、自分でも解らないが、もうこれでもいいんじゃないかと思いは始めている自分が居る。

「いや、でもなあ……………」

あまりに予想外の事態、まさか自分が

「なんで、性転換しちゃってるかなあ……………」

男から女になっていた。

一応言っておくが、一夏はタイランドに行った記憶は無い。カレンダーで日付も確認した。

体に変な違和感も無い。有るが無い。手術は受けてない。

残る心当たりだが、これが一番有り得なくて有り得る。

昨日、簪から貰った飲むヨーグルト。

普段してない事と言えば、これしか思い付かない。

ISは関係無い筈、だって今更影響出る意味が解らないし、昨日は乗ってない。

だから、原因はあの飲むヨーグルトしか考えられない。

ヨーグルトで性転換するとか、自分の体がおかしいのか、ヨーグルトがおかしいのか判断に困るが、現実に性転換しているのだ。

呆けている場合ではない。早く、対策を取らねば。

しかし、何をどうすればいいか。まったくもって検討が付かない。

「簪と呼ばれてるけど、これじゃあなあ」

一夏は自分の体を見下ろし、鏡で顔を見る。

男であった面影は無く、姉と妹とよく似ていた顔立ちは、性転換した事により更に似た顔立ちとなっている。

この状態で合流すれば、余計な混乱を招く事は確実だ。

「何処か、行くか?」

このまま部屋に居るよりは、事態が治まるまで何処かに隠れていた方がいいかもしれない。

時間経過でどうにかなるか解らないが、何もせずにじっとしているよりマシだろう。

「あ、*「師匠」*の祠、掃除してない」

学園の屋上には、篠ノ之神社所縁の小さな祠が分社として奉られている。少し珍しい子供を守るお稲荷様の祠だ。

一夏は日課として、その祠にお詣りをして、週に一度は祠を掃除している。

これには、一夏が幼少の頃に出会った*「師匠」*と呼ぶ人物が関わっているのだが、それはまた別のお話。

しかし、掃除をしていないとはいえ、今の状態では少々厳しいものがある。

一夏は考えた。考えた末に、本格的な掃除は後日に、体が元に戻り次第で行う事にし、今日はお詣りと簡単な掃除だけにする事にした。

「お供えもよし。行くか」

一夏はお供えの米菓子と油揚げを準備し、屋上へと向かう事にした。

学園寮は夏休みとあって、何時もより静かだった。

いや、何時もが賑やかすぎるだけか。一夏は誰にも見付からぬ様に、屋上へと急いだ。「誰も居ない、と」

屋上に続く扉から覗き込み、誰も居ない事を確認する。

目的の祠は屋上の端、今の時間は日陰になる位置にある。

夏の陽射しは厳しい。日陰になっている内に、簡単ではあるが掃除を終わらせてしまおう。

そう思つて、一夏が祠の方角へ目を向けると、

「え?」

一夏は驚愕に目を見開いた。

そんな筈が無い。だつて、あの祠は目印で、あの人はもう居ない。その筈なのに

「おやあ? 見慣れぬ女子おなごだが、狼の奴にちと似ておるか?」

一夏にとつて、師であると同時にそれ以上の人物が、日陰の祠の側に佇んでいた。

「し、しよう?」

「うむ? 主、私が見えておるのかえ?」

「あ、はい。見えます。じゃなくて、一夏です。師匠、俺です!」

「おかしな事を言う女子ぞえ。私の知る教え子は男子おのこぞ?」

少しどころではない位に混乱しながら、一夏は目の前の祠の側に佇む女に自分だと告

げるも、そんな事がある訳が無いと、取り合ってもらえない。

確かに、今は男ではなくなっている。

どうしたものかと、一夏は頭を捻り、一つの手に出た。

「師匠」

「だから、私は主の師ではないと」

「俺と師匠が初めて会ったのは、小学校の夏休みの肝試しで行った篠ノ之神社の裏山」

一夏の言葉に紅い着物の女は、狐を彷彿とさせる細目を僅かに見開き、一夏を訝しげに見る。

一夏はその反応に手応えを感じ、更に自分達しか知らない思い出を話していく。

「それで次に会ったのは、虫取りで裏山に入った時で、その時に」

「・・・独楽を教えたのだったかえ？ 教え子よ」

「そうです。それで、師匠って呼ぶようになったんです」

やっと通じたかと、一夏は喜び、女はしてやられたと言わんばかりに額を叩いた。

その顔には笑みが浮かんでいた。

「コココ、狐が教え子に謀られるとは、成長したもので」

「いや、騙す気は無かつたんですけど」

「良い良い。して、教え子よ。如何にして、女子になったのさえ？」

「えっと、それは・・・」

嬉し気に女は一夏に近付き、細目を弓にして何故そうなったのかと問うてきたので、一夏は恐らくそうであろうと思われる原因を話した。

「多分ですけど、それが原因かなと」

「・・・」

「師匠？」

女は顔を伏せて震え、一夏は何かあったのかと、その顔を覗き込むと

「ケツ、ハッ！ まさか、酪らくを飲んで女子になりおるとは、私の教え子は愉快よのう……！」

喉奥の笑いを堪えきれずに、色白の顔に紅が差し、細目に涙を浮かべていた。

「師匠、笑いすぎですって」

「おや、師に意見するかえ？ ちと、罰が必要かえ」

「あ、ちよつ」

女が細目を少し見開き、離れようとする一夏の袖を掴まんだ。

すると、一夏の体からストンと力が抜けて、膝から崩れ落ちた。訳も分からぬままに落ちていく視界が急に反転し、柔らかいものの上に頭が乗った。

「え？ 力が入らない？」

「お嬢様に報告だ〜」

普段お嬢様呼びをしていないのに、こんな時だけお嬢様呼びをしている。

「報告、終わり〜」

最近、学園生徒全員にテスターを兼ねて配布された表示枠を閉じて、本音は一夏を背負った。

小柄な本音だが、学園生徒は見た目の割には鍛えられている。持ち上げるのは厳しいが、背負って運ぶくらいならなんとかなる。

本音は一夏を背負うと、祠へ振り向き手を振って笑った。

「またね〜、お狐様〜」

「コココ、バレてしまうたか」

「かくれんぼは私の勝ちだね〜」

本音が手を振った祠から、九本の狐尾を伸ばした女が袖で口許を隠しながら、本音の周りに浮かび漂う。

「じゃあ、このお菓子は私の〜」

「仕方ないのう」

「にひひ」

笑う本音の背中で眠る一夏が、少しだけ身を揺すった。

その一夏の頭を、狐はゆつくりと撫でた。

「眠れ眠れ、良き子よ。目が覚めたら、笑っておくれ」

「おりむー良い子だ、ねんねしな」

二人は子守唄を唄い、学園寮の中へと入っていった。

RE：二十六冊目

「なんだってこれ、こうなった？」

いつの間にか眠っていた一夏が目覚めたお昼過ぎ、所謂おやつ時。昼食時以外に食堂が人で賑わう時間帯、その食堂の一角で、いつもメンバーが集まっていた。

「説明したじゃん」

「いや、聞いたけどさ。何がどうして、真琴が縮んだ訳よ？」

一夏が指差す先には、朝と変わらず箒にしがみついて離れないチビ真琴の姿があった。

箒の服をがっしり掴み、梃子でも動きそうにない。

「どうにもなりませんわね。って……！」

「一夏！ それ以上指近付いたらダメ！」

「へ？ なん……」

で、とは続かず、チビ真琴のキルゾーンに不用心に侵入した一夏の人差し指は、先程の鈴の時よりもスゴい音と共に口内へと消えた。

「……」

「い、一夏?」

シャルロットがひきつった顔で呼び掛けるも、一夏は鈍い汗を一筋流すだけで反応が無い。

テーブル越しにそのままの体勢で固まり動かない。

暫く、その状態が続き

「……痛い、物凄く痛い……!」

「ダメよ、一夏。下手に動くと余計に食い込むわよ!」

経験者は語ると、鈴の忠告も虚しく一夏は何とかして離れようと、腕を引いた。

しかし、それは間違いだった。がちりと食い込んだ歯は、腕を引く動きに合わせて更に食い込む。

「あああああ! ボーン!」

歯が食い込んだ痛みで叫ぶ。

その叫びに、食堂に居た生徒達が振り向くが、いつもの事かと頼んだ物を消費に戻った。

何人かは人差し指に包帯や絆創膏を巻いていたが、料理か裁縫にでも失敗したのだろう。

一夏の叫びを聞いて、人差し指を撫でていた。

「そう言えばさ、真琴と箒って何時出会ったんですの？」

「む？ 私と真琴の出会いか」

「確かに、母様と箒の出会いは気になる」

セシリアが箒に真琴との出会いを聞くと、メンバー全員が気になると首を縦に振った。

「ふむ、そうか」

真琴との出会い、箒は自分にしがみついて離れないチビ真琴をあやししながら、思い出す。

出来る事なら、自分だけの思い出として仕舞っておきたい。だが、こうやって語るのも悪くはない気もする。

「ふむ、簡単でいいなら、語ろう」

「おお・・・！」

「あれは、そうだな。姉さんがISを開発してなんやかんやあつて、転校した先か」
箒は目を閉じ、当時の事に想いを馳せる。

今も未熟だが、今よりも更に未熟だったあの時に、自分は出会ったのだ。
運命と。

「オヤジ、何も言えねえよ、アタシは・・・」

シヨッピングモール「レゾナンス」内にある喫茶「五百蔵」。いつもは客足が途絶えぬ人気店なのだが、今日は違った。

「冬悟さん」

喫茶「五百蔵」店主、五百蔵冬悟が何故か女性化していた。約2mちよつとの巨軀が少し縮んで約190cmちよつとになり、嘗ては世界の頂点に迫り着き、防衛を続けた肉体は女性らしい凹凸と柔らかさを得て、顔立ちも普通に美人の部類に入る。どうしてこうなった？

「なにが、どうやったらこんな事に・・・？」

訳が分からない。しかし、原因は判っている。

己の義姉が経営する会社「ハードラックダイアモンド社」所属の技術屋「夕石屋」が開発したアンチエイジング商品の試作品、それが原因だ。

本人達も、これは予想外だったらしく、原因究明を急ぎ、同所属の篠ノ之東の協力により、明日には戻っているという事が判明した。

約一名、この作用が解つてから自分から服用し、弟子との時間を楽しんでいるらしいが、五百蔵にそんな余裕は無い。

「ま、まあ、明日には戻っているらしいしき。今日は臨時休業だね、これは」

「うん、そうだね」

「冬悟さん。取敢えず、今日は家で休みましょう」

どうにも、理解が追い付いていない五百蔵に妻の榛名が付き添う。

バイトの鈴谷、摩耶、木曾、天龍は勝手が分かる部分の片付けを済まし、出入り口に
「店主急病の為、本日臨時休業」と書いた貼り紙を貼っておく。

「そっさいえば」

テーブルを拭き終わり、食洗機やガスの元栓の確認をしようとした時、五百蔵さん家の似てない双子の吹雪と睦月の睦月が思い出した。

「吹雪ちゃんも、アレ飲んでたけど、何も無いの?」

「え、ふぶつち、アレ飲んだの?!」

「おい、大丈夫なのか?!」

五百蔵であれなのだ。血縁者の吹雪が飲んだら何が起きるのか?

「なんともないですよーう」

気の抜けた返事が返ってきた。どうやら、吹雪には効果が無かったようだ。

「本当になんともないのか?」

「なんともないですよーう。普通に美味しい飲むヨーグルトでしたよーう」

天龍が再度確認する。

本当になんともないようだ。

「それならいいけどよ」

「今日はこのまま、オヤジの家に泊まるか？」

「だな、睦月もリハビリあるし、オッサンもあれだし」

「という訳で、今日はムツキーとふぶつちの家でお泊まり女子会だ！」

鈴谷が睦月の座る車椅子を押して店の裏口から出て、摩耶達が再度火の元を確認して着いていく。

その背後、誰にも気付かれずに、彼女は呟いた。

「なんともないですよーう。キヒヒ」

お腹が空いた、お腹が空いた。

皆が居るから、ご飯が美味しい。

吹雪は小さく歌った。

RE：二十七冊目

小さな、小さな二つがじゃれあっていた。

それはまるで、仔猫や仔犬が転がる様に、大きめのベッドの上をコロコロと転がり、抱き合つて止まったかと思えば、またじゃれ始めていた。

「ふう……」

「箒が賢者モード入ったよー」

「箒、帰つてーこーい」

篠ノ之箒は、実に幸せそうな顔でその光景を眺めていた。

彼女の視線の先にあり、彼女を恍惚とさせている光景、それは

「ほら、母様。こつちだぞー」

「ラウラ……まつて……」

小学校低学年まで肉体も精神も退行した真琴と、普段と変わらぬ真琴にじゃれつくウラが、自室のベッドでじゃれあっていた。

「もう、これでいいんじゃないかな？」

「箒、落ち着きなさい」

「ふう・・・」

モコフワ熊。パジャマに包まれて、ラウラと真琴がじゃれあっていた。

「諸君、パライソはここだ・・・」

「落ちていてください、箒さん。というか、帰って来てくださいまし！」

実に幸せそうに、箒が穏やかな顔で目を閉じ、ゆっくりと眠る様に体勢を崩していくのを、セシリアが必死に止める。なんというか、真つ白に萌え尽きてそのまま生死不明になりそうだった。

「まあ、あれだ。箒と真琴は転校先で、出会ったんだな」

「そうだ。もうあれだ。運命だ。そうとしか言いようが無い」

復活した箒が語る馴れ初め。

それは、箒はやっぱり箒だったと、全員に納得させるに値する内容だった。

「一目見た瞬間、雷に打たれ、距離が近付く度に、胸が早鐘の如く鳴り響く。それは正に、恋に違いなかった」

「いきなり、たまげたなあ・・・」

シャルロットが呆気にとられた顔を、箒に向ける。

手元には表示枠が浮いており、何か操作をしている。

「しかし、皆も知っているだろう。真琴は人見知りする」

「開幕で口説きにいったらどうなるか、目に浮かぶわ」

「ははは、流石だな鈴。ジリジリ逃げられたよ。……まあ、私もジリジリ追ったのだから……！」

「おう、やめたれや」

一夏が口を横にした表情で箒に突っ込んだ。しかし、箒は笑って意に介する様子はない。

そんな中、鈴がふと彼を見ると、シャルロットと同じく表情棒を操作していた。何をしているのか、不思議に思った鈴が、二人の操作する表情棒を覗き込んだ。

「いやなに、ゲームしてんのよ？」

「違うんだ鈴。聞いてくれ」

「そうだよ鈴。聞いてよ」

「まあ、聞くわ」

「ほら、この間新型パッチ配付されたじゃん？　　“いせまじよ”」

「なに？　デバッグのバイト？」

「まあ、似た感じかな」

箒が二人を気にせず語る横で、一夏とシャルロットの親指が表示棒を乱打する。

残像でも見えそうな動きだったが、ややあつて一夏が悲鳴を挙げた。

「つった！ 指つった！」

「こつちもダメだー！」

表示枠を放り出し、両手をどう押さえるべきか分からず悶え苦しむ二人。

「それでな、真琴を家に招待して、花粉症で脱水症状になった姉さんに遭遇した訳だ」

その二人を知ったことかと、箒は膝にラウラに抱き着いた真琴を乗せて、二人を寝かし付けながらセシリアに、初めての家デートを語っていた。

「んで？ なにやってるの」

「ああああ・・・、ほら、パッチ当たって同志軍曹に超必追加されたって聞いて、コマンド調べてたら」

「もんのすごい複雑でタイミングくそシビアな上に、発動条件まである事までは解ったんだ」

「そのコマンドと発動条件調べるバイト？」

つった親指の付け根を揉みほぐしながら、頷く二人に鈴は溜め息を吐く。

最近是不可思議なバイトが多い。確かティナも、妙なバイトをしていた筈。学園島内でのバイトだから、違法ではないと言っていたが、夜の学園島を懐中電灯一つで彷徨いて、その報告をするのは、警備員の仕事ではないのか。

「シルヴィア、操作簡単だから油断してた」

「うん、コマンド簡単だから、超必も簡単だと思つたら、人間には無理ゲーコマンドとか」
「コマンド表は？」

「見る？ 引くよ？」

鈴は見た。見た瞬間、引いた。普通、超必のコマンドは五、六個の筈なのだが、鈴が見るコマンド表には、横一列に三行みつしりとコマンドが並んでいた。

しかも、これはよく見ると、三段階で発動して、その段階にも条件がある。開発者は何を考えていたのか。

「ははは、真琴。やってみるか？」

「う……」

目を覚ました真琴が、目を輝かせながら箒の表示枠を弄ると、画面では軍服に銀髪のキアラが、鎌と槌が一体になった杖を振るい、飛び回っていた。

「うわあい真琴、將軍か」

「トリツキーキアラ選ぶなあ」

「しかも、割りとやりますわ」

セシリアが操作する豪華なドレスを着た童女が、ガラスの兵隊を呼び出し、真琴の魔女に応戦するが、不可思議で不規則な動きでいまいち捉えきれていない。

「ははは、真琴は強いな」

「……んふー!」

「箒、箒、私もやるぞー!」

箒に誉められ、得意満面の顔で鼻を鳴らす真琴と、翼の生えた杖で空を駆け、爆撃してくるラウラが操作する魔女が、ガラスの兵隊を蹴散らしていく。

「ははは、ラウラもやるじゃないか」

「テレビアで、二対一はツライですわー!」

「テレビア、技発動までラグあるからねー」

「セシリア、置き技、置き技で牽制しろ」

「ああああ……、ラウラさんの爆撃がいいところに……」

熊ウサコンビのコンボで、セシリアの敗北が決まった。

項垂れるセシリアだったが、更なる絶望が画面内に現れた。

「嘘、巫女カーチャン出た……!」

「ランダムセレクトのみで確率0.5%以下でしょ!」

「ああ、虐殺の始まりだ……!」

髪飾? 『さあ、死ぬがよい』

約全員? 『お前かー!』

簪の乱入により、長大な薙刀を構えた巫女が、画面に出現する。

『ナジェーリア、今日という今日は赦しませんわ!』

『ま、待ち給え満代。話せば解る!』

將軍が画面内をところ狭しと逃げ回るが、巫女カーチャンが薙刀降つたら、蚊取り線香にやられた蚊みたいに落ちた。

ついでに、ラウラもやられた。

本熊? 『・・・ズル・・・い・・・』

髪飾? 『勝てば良いとは言わない。だけど、ランダムで巫女カーチャン引いたらやるしかない』

熊兔娘? 『ひ、否定出来ない』

髪飾? 『恨むなら、君達のガチャ運の無さを恨むといい』

表示枠で高らかに笑う簪、奴の暴挙を止める者は居ないのか?

諦めが蔓延し始めたその時、一つのネームが飛び込んできた。

紅茶姉? 『ふむん? ランダムセレクトデスカ?』

ほーき? 『あ・・・』

約全員? 『あ・・・』

髪飾? 『うっそだろ、お前・・・』

紅茶姉? 『簪、恨むなら己の運の無さを恨みなさい』

髪飾？『うわあああああ！』
それは豪運の象徴による一方的な蹂躪だった。

RE：二十八冊目

鉄桶嫁? 『さあ、どうしましょうか?』

元ヤン? 『なにをだ?』

鉄桶嫁? 『今日の夕飯です。皆、泊まりでしよう?』

邪気目? 『オッサンは……、動けないか』

「叔父貴、大丈夫か」

表示枠を横目に、榛名、摩耶、天龍の三人が見る先には、
“五百蔵冬悟”が“五百蔵冬子”になつて寝込んでいた。

木曾が心配そうに覗き込むが、当人は呻くばかりである。

「オヤジ、飯食えるか?」

「うぐ……」

「ダメだ。ダウンしてる」

ハードラックダイアモンド社新製品の試作品“グングン飲む飲む肌若返る”を間違えて飲んだ結果、五百蔵冬悟はどういった原理か、見事性転換を果たした。

「流石のオジサンも、年には勝てないか……」

「それ以外もあるがな」

そして、店を臨時休業とし自宅に帰ったまではよかつたのだが、玄関に続く段差にて突如バランスを崩し転び、腰を強打。

性転換しても190オーバーの長身と、それを支える骨格と筋肉の重量は常人の倍以上の五百蔵。その自重が全て、彼の腰部親戚女に打撃の威力として集中した結果、五百蔵は寝込んだ。

医者に掛かるにも、今の状態で行けばどうなるか解つたものではない。なので、元に戻っているという、明日まで自宅にて、腰の痛みと戦う事になった。

「一気に20cm近く身長が変わつたんだ。寧ろ、さつきまで普通に動けてたオッサンがおかしいんだよ」

「身長だけじゃなく、バランスも変わつてるだろうしな」

「あれ？ そう言えば、吹雪ちゃんは？」

五百蔵家の似てない双子の睦月が、似てない双子の片割れの吹雪の不在に気付く。

「あ、ふぶつちなら、新しい湿布買いに行つたよ」

「古いのしか残つてなくてな」

「古いのは効きがいまいちだからな」

杖を突き歩く睦月の車椅子を片付けながら、鈴谷と天龍が答える。

榛名が氷嚢に氷を詰め、五百蔵の腰の打ち付けた部分に、折り畳んだ厚手のタオルを敷き、その上に置く。

「冬悟さん。骨は折れてないみたいですけど、明日も休みにしましょうか」

「ぐ、ぬう……。仕方ないか……」

苦し気に唸る五百蔵。榛名が彼の負担を減らすよう、甲斐甲斐しく世話をする。

年の離れた夫婦、二人の子宝に恵まれ、今では何やらと賑やかで穏やかな日々を過ごしている。

二人が出会い、ここに至るまでには、様々な事があつた。

ズーヤん？ 『榛にやんとオジサン、話に聞くとかなり危うかつたらしいね？』

邪気目？ 『総長から聞いたのか？』

船長？ 『若い頃の叔父貴は、あの総長が態々警告に行く位に危うかつたらしいぞ』

にやしい？ 『そんなに凄かつたんだ……』

元ヤン？ 『それが今じゃ、吹雪と睦月の親か』

摩耶が表示枠を避けて、テレビを点ける。すると、乾いた拍子木の音が、五百蔵家に木霊した。

「お、ちようど始まった辺りか」

「今日の取り組み、空流の鮫島と柴木山の鬼丸だったろ？」

白夏? 『マジか。あ、マジだ』

髪飾? 『え、じゃあどうする?』

蒼雫? 『遊びに行くのは変更無しですの』

白猫? 『ガンヘッド買いにいこう!』

シャルロットが表示枠で叫んだ瞬間、箒が開いていた表示枠が叩き割られた。

「お? どうした? おねむか、真琴」

「ヴー……」

「母様、私も眠いぞ……」

瞬発で表示枠を叩き割った真琴は、箒の膝に乗ったままで彼女の腹に顔を擦り付ける。

「そうか。なら、寝るか」

己にしがみつく真琴とラウラを、しっかりと両腕に抱き込み、ベッドへ向かう。

「ヴー、ほーきちや……」

「ああ、私は……」

しがみつき、己を擦り付け甘えてくる真琴に、柔らかな笑みを浮かべ、箒はその丸い背を優しく手のひらを置く様に叩く。

「ラウラ、ほら、布団をちゃんと着なさい。風邪をひくぞ」

「むう……」

ラウラを抱き寄せ、布団を被せる。

ほんの少しの間を置いて、静かな寝息が箒の耳に届く。

「ほーきちや…ほーきちや…」

「ははは、どうした真琴……」

そこまで言った時、箒の頬に柔らかな感触があつた。

咄嗟の事に、流石の箒も反応が遅れる。

「ほーきちや…すき……」

寝惚け眼で見上げる真琴が、頬を赤く染め、幸せそうに弛めた顔を、己を抱く箒に押し付ける。

「そうか、私も好きだぞ」

熱を持つ頬を撫で、柔らかな髪を櫛梳る。

その感触に身を任せ、真琴は眠気に誘われるままに目を閉じる。

「真琴、もしかしたら、この瞬間は夢幻に終わるのだろう。だがそれでも、この瞬間は嘘ではなく、この瞬間に嘘は無い。愛しているよ、私だけの愛し人」

灯りを消し、ゆつくりと小さな温もりを抱き寄せる。今にも壊れてしまいそうな、小さく弱々しい二つの温もり。

「おやすみ、そしてまた明日。目が覚めたら、また花の咲く笑顔を見せてくれ」
箒は二人に並び、ゆっくりと瞼を落としていった。

RE : 二十九冊目

「そう言えばさ、真琴のパワーの限界ってどこなの？」

鈴がそう言った。手にはレンジに杏仁豆腐を掬っていた。

「ふむ、そうだな」

向かいに座る箒が、番茶を啜りながら頷いた。

そして、静かにメニュー表にある本練水羊羹を指し示す。

「無料じゃないって訳ね」

「土産も欲しいな。部屋で二人が待っている」

「呼べば？ 私、今は懐にかなり余裕があるわ」

鈴は言った後、後悔の色を顔に浮かべた。箒が微笑んだからではない。彼女はよくとんでも理論で、こちらを押し込んでくるが、それ程こちらに被害を出したりはしない。

そう、彼女一人ならだ。

「なら、僕はあんみつね」

「私は宇治あんみつを戴きますわ。最近、日本茶に嵌まっていますの」

「私は、葛餅。あ、黒蜜ときな粉で」

「俺、俺も、冷やし白玉で」

「あんた達、どっから湧いてくるのよ?!」

この手の話をする、大体九割の確率で、何時ものメンバーが何処からともなく湧いてくる。

そして、断りなく大量の注文と、会計を押し付けてくるのだ。

と言つても、鈴も同じ事をやっている、お互い様と言えばお互い様であつたりする。

「まあ、いいじゃない。私も真琴のパワーは気になる」

「確かにな」

簪が言うと、一夏が同意を示す。鈴もそれには同意だ。

適度によく冷えた水羊羹を、箸は切り分けながら、彼女は表示枠を開いた。

ほーき? 『真琴、今大丈夫か?』

本熊? 『どう：した：の：?』

ほーき? 『食堂に来れるか?』

本熊? 『…大丈夫…夫…、ラウラ…』

熊兔娘? 『行く!』

ほーき? 『ああ、待っている。後、今日は鈴の奢りだぞ』

の絵が描かれたコインだった。

「コイン？ この間の？」

「ああ、久々のゲームセンターで、久々にコインゲームを見てな。懐かしく思ってた」
「んで、そのコインを？」

「真琴、いけるか？」

「…へ？ …うん…」

真琴がテーブルのコインを、人差し指と親指で摘まみ、いとも簡単に折り曲げた。

「え、マジで？」

「うむ、硬貨を変形させるのは犯罪だからな」

「あく、真琴。まさかだが、そのコイン、もう一度曲げられる？」

「…あ、…うん…」

シャルロットが言うのと、真琴はみつ豆を口に含んだまま頷き、二つ折りになったコインを再び手に取った。

「ああ！ ゲーセンのコインが四つ折りに……！」

「フォーチュンクッキーみたいになった……」

「？」

驚愕に引く面々を、真琴はみつ豆を口に運びながら、キョトンとした顔で見ていた。

「ほら、ラウラ。口の周りに黒蜜が着いてるぞ」

「おむむ……」

「いや、なに普通にしてるのよ？」

「なにがだ？」

「真琴さんのこれですわ……！」

フォーチュンクッキーになったコインを、セシリアが摘まみ上げ、箒に突き出した。

鈍色のそれを箒は受け取り、懐かしいものを見る目で見ていた。

「うむ、やはり真琴は素晴らしいな……！」

「はい、ダメ。箒が始まった」

箒が葛餅に追加の黒蜜を回し掛けながら、表示枠を開いた。

髪飾？ 『箒劇場が始まる』

白夏？ 『なにそれ？』

白猫？ 『ははは、一夏は馬鹿だなあ』

白夏？ 『ひどくね？』

蒼雫？ 『まあ、一夏さんですから』

すずね？ 『安定の扱いね』

白玉につぶ餡を乗せ、口に放り込む。

慣れた安定の扱い、特に気にする事は無い。

一夏は表示枠に打ち込んでいく。

白夏? 『吹雪、居るか?』

空腹娘? 『あ、一夏だ』

すずね? 『久し振りね、睦月は?』

にやしい? 『久し振りー』

白夏? 『いきなりだけどさ、吹雪。コイン曲げれる?』

ズーヤン? 『いやいや、ふぶつちを何だと思ってるの?』

邪気目? 『めるか』

船長? 『めるぞ』

元ヤン? 『潰すぞ』

二人? 『誠に申し訳ありませんでした……!』

ちよつとの提案のつもりが、予想外な返しというか、予想出来た人物達から強烈な返しが来た。

空腹娘? 『コイン? 曲げれますよーう』

白夏? 『マジで?』

空腹娘? 『ほい』

にやしい? 『うわ、ホントに曲げた!』

空腹娘? 『お腹が空きましたよう』

すずね? 『あれ、吹雪? おーい』

にやしい? 『吹雪ちゃん、冷蔵庫のタッパーは今日の晩御飯だよ』

白夏? 『あ、いつものだ』

これを最後に、表示枠内から二つの名前が消えた。

「え、因みに、この中でコインをフォーチュンクッキーに出来る人」

「居ると思うの?」

「はい、すみません」

綺麗な謝罪をする一夏達を他所に、簪はテーブルの一面に目をやる。

「む……む……」

「母様母様、これはおいしいぞ!」

「はっはっはっ、白玉あんみつはどうだ?」

箒が真琴に次々と皿を渡し、真琴も箒から渡されるままに、甘味をラウラと共に次々と片付けていく。

食堂のテーブルに、夏用の硝子の器が塔を作っていく。

「あ、私も磯辺餅追加、焙じ茶も」

それを見た簪は、どきどきに紛れてメニューを追加、フォーチュンクッキーコインを、どうにかして戻そうと躍起になっているメンバー達を見る。

「真琴、因みにあれ、戻せる？」

「…あ…うん…」

フォーチュンクッキーコインが、真琴の握力によって、ただの折れ目がついたコインに戻った。

それを見た簪とラウラ以外が、少し距離を取った。

「うむ、流石だ、真琴。あ、そうだな。いきなり話を変えるが、明日実家に行こう」

「へ？」

「はっはっはっ、御義母様にお呼ばれをしたのだ」

「ええ……」

湯気の立つ番茶を一口啜り、簪は当たり前のように言った。

RE : 三十冊目

蟬の声と汽車の機関音、そう多くない人々の雑踏、改札を抜けて、あまり物の無い小さな売店を横目に、駅の屋内から出ると、夏の日射しが突き刺す様に照り付ける。

つまりは夏、要するに暑い。空調の効いた屋内から、一步外に出れば、灼熱の田舎町が待っていた。

「……………」

「ここから、戻るな戻るな」

「ダメだぞ、母様」

出た瞬間、鏝の広い帽子を両手で押さえ、真琴はそのまま駅の構内へ戻ろうとする。だが、それを後ろから押し返す二人が居る。

箒とラウラは、己よりも長身な真琴の丸まった背を押して、駅の構内から再び出る。

「少し早い帰省だが、戻っても、寮は開いてないぞ」

「…うう……」

学園寮はメンテナンスの為、予定よりも早い盆休みとなっていた。

千人単位の人間を抱える学園島の居住区、その区画の定期メンテナンスと同時に、学

園寮のメンテナンスを済ませてしまおう。そうすれば、工賃安く済むし。

いまだ拡張中の人工島である学園島は、開発費に維持費にと、兎に角金が必要。各国からの多額の寄付金や、学園島内で開発された新型パーツ等の、特許使用料で運営を賄っている。

しかし、金はいくらあっても足りない。なので、少しでも節約出来る部分で、学園は異様に汚る。渋りに渋り、とある企業から、多額の寄付金が舞い込んできた事もあった。今回のメンテナンスも、そのとある企業からの寄付金と、プランで行っている。

「箒、母様の母様は、どんな人？」

「正しく、真琴の母であると、一目見て判る人だ」

三人で並んで歩く田舎道は、長閑な雰囲気醸し出し、先に見える道には郵便配達のパイクが走っている。

熊谷真琴の生まれ故郷は、本当に田舎町だ。日本の田舎町、そのイメージ通りに道の横には畑と田んぼがあり、店舗の少ない商店街のアーケードに繋がっている。

そこから少し離れた場所にある駄菓子屋で、ラムネを買い喉を潤す。

「まだ一年も経ってないのに、懐かしいな」

「…そう…だね…」

昼過ぎの茹だる様な暑さの中、それを避ける為に入った駄菓子屋の日除けの影で、ラ

ムネ瓶を片手に水路ではしゃぐラウラを眺める。

遊び場は学園島にもあるが、こういつた田園風景は存在しない。何かを見付けたラウラが、乳白色と錆色の二色のそれを掲げて、此方に走り寄ってくる。

「母様、カエルだ！ 学園のよりでかいぞ！」

「…おおう……」

ラウラが己の顔程もあろうかというウシガエルを掴んで、真琴にそれを見せる。

「飼つていい？」

「…んー？」

真琴も蛙は苦手ではない。むしろ、アマガエルくらいなら、愛嬌があつてかわいいとも思っているし、蛙程度で悲鳴を挙げる人間は、この町には居ない。

しかし、ウシガエル級になると話は別となる。

そう、ウシガエルは鳴くと五月蠅い。すっごい五月蠅い。

それを学園寮の部屋で飼うのは、流石に御免である。

「ラウラ、今日は放しなさい。明日は、もっと広い所に行くから……！」

「本当か、箒?!」

「ああ、本当だとも」

ウシガエルを振り回すラウラに、箒が穏やかな笑みを湛えて、二人で水路にウシガエ

ルを放しに行く。その二人を見ながら、真琴は余ったラムネを飲み干した。

「…二人…共行こ…う……」

「うむ」

「うん」

駄菓子屋で水道を借り、泥を洗い流した二人と共に、田舎道を歩く。

先程よりほんの少しだけ日が傾き、生温い風に少しずつ涼が混ざり始める。夏の盛り
の昼間と夕方との間の時間、恐らくは一番人が動き出すだろう時間に、三人は並んで歩く。

「母様、あれはなんだ？」

「あれは…コン…ビニ…」

「見たことないぞ！」

ラウラが個人経営のコンビニに興奮し、その独特な品揃えに目を輝かせる。

「はっはっはっ、ラウラ。ここも、また明日だ。今は真琴の家に行こう」

「わかった！」

鼻を鳴らし、ラウラが真琴にしがみつく。

結構勢いよく抱き着いたのだが、真琴は軽く抱き止め、普段通りに抱き上げる。

「ふんふん！」

しがみついて擦り着いてくるラウラを、軽く揺すり背を一定のリズムでゆつくりと叩

く。

そうすると、次第にラウラの動きが緩くなり、丸くなって真琴にしがみつき動かなくなる。

「ふふ、穏やかな寝顔だな」

箒の言う通りに、ラウラは真琴の腕の中で眠っていた。

「さあ、行こう」

「…うん…」

夕暮れが迫り、朱色に染まり始める町、人通りの少ない道を歩いていけば、嘗て見慣れた道に入る。

毎日毎日、I S 学園に入学するまで通い続けた道は、あの時とまるで変わらず、二人を迎える。

「変わらない、な」

「そう…だね…」

夕暮れの道には、幾らか涼しくなった風が吹き抜け、青い田を揺らす。

何時か見た風景の中、真琴と箒は談笑しながら歩いていくと、二人の前で表示枠が開いた。

ほーきぎ？ 『ん？ どうした？』

ほなみん？ 『あれ？ 間違い？』

ほーき？ 『む、これは失礼をした』

ほなみん？ 『いやいや、いーよいよよ。こっちの操作ミスだし。さて、ていちゃんの番号は……』

閉じた表示枠を、箒はもう一度開く。見ればかなりの量の通知が貯まつてる。それは真琴も同じだった様で、ハードラックダイアモンド社からの通知もあった。

「箒ちゃん……新型……」

「うむ、新型のフレームが完成したらしいな」

「どう……かな……?？」

「カタログスペックでは、運動性と追従性に秀でているな。近接、高機動型に使われるだろうな」

他にも、真琴最前の作家の新刊発売予定日や、イギリスの「俊狼」と呼ばれるパイロットが、欧州キャノンボール・ファストで完封優勝したという報せ、ドイツのEos ACリーグのチャンピオンの来日等、様々な通知が来ていた。

「着いたな」

「……うん……」

二人の前には、極一般的な一軒家があった。

熊谷真琴の生家であり、箏を呼んだ彼女の母が住む家。その扉にあるインターホンを押すと、軽快な音が鳴り、中から足音が近付いてくる。

「お帰り、久しぶりの里帰りはどう？」

「ただ…いま…母さん……」

真琴よりも頭一つ低い女、熊谷真尋くまがや まひろが柔らかな笑みを浮かべ、三人を出迎えた。

RE：三十一冊目

熊谷真琴は、約半年ぶりに見る母に、いつの間にか手を引かれ、少しだけ懐かしさを覚える家の中に入る。

「ほらほら、早く上がりなさいな」

言葉のままに、家にかかる。懐かしい、たった半年の時間で、そんな事を思うのはどうなのだろうか。

そんな事を真琴は考えていたが、ふと腕が軽い事に気付いた。

「とうか、真琴、箒さん？ このカワイイ娘は誰かしら？」

母、真尋の腕にいつの間にか、眠るラウラが抱かれていた。

確かに己にしがみつき、確りと抱き上げていた筈なのに、ラウラは現在母の腕に抱かれている。

「あらあら真琴？ ダメよ、ちゃんとしないと」

手を伸ばす真琴を、ユラユラフラフラとした不確かな動きで避け、曲げた中指を親指で押さえながら、真琴に向ける。

「もう、ダメな子」

激突音、否、炸裂音が響いた。

白夏? 『ふと、表示枠を開いたら、砲撃音が響いたで御座る』

白猫? 『右に同じく』

すずね? 『更に右に同じく』

蒼雫? 『え、今の何の音ですか?』

髪飾? 『砲撃?』

ほーき? 『お義母様のデコピンの音だぞ』

すずね? 『デコピンの音じゃないわよ!』

ほーき? 『熊谷家ではよくある事だ』

白猫? 『え、毎日砲撃?』

白夏? 『なにそれこわい』

ほーき? 『ははは、よくあるよくある。その証拠に、ほら』

箒が表示枠を向ければ、片手で額を押しやる真琴が、しかし平然としながら、眠るラウラを抱き抱える真尋に、その長い腕を伸ばしていた。

ほーき? 『な?』

白夏? 『デコピンの概念壊れる』

白猫? 『マズイですよこれは』

蒼雫? 『なんだつていい、デコピンのチャンスですわ!』
すずね? 『というか、ラウラ起きないわね』

激音が響く中、平然と眠り続けるラウラ。唸りを挙げて真琴の腕が迫るが、真尋は何も気にせず回避。代わりに空いた手でデコピンを打ち込む。

「あう……」

「もう、相変わらず頑丈ね」

二連撃、激音が二回響けば、真琴の頭も二回後ろに弾かれる。だが真尋の言う通りに、真琴は止まらない。

「返……して……」

「ダーメ」

しかしそれは真尋も同じ。狭い廊下の中で、両者一進一退の攻防を続ける。だが、ここは家だ。

「真琴、御義母様。それ以上はいけない」

蒂が両者の間に、するりと入り込む。足音無く、動きの機先すら見せなかった。呆け

る真琴だが、真尋は違った。

「あら？ あらあら？」

腕に抱いていたラウラを、真琴自身にも気付かせずに彼女の腕の中に戻し、いつの間にか自分達の間に居た葦の顔を覗き込む。

「あ、これ柳韻君の技ね。でも、芳泉君もちよつと入ってるかしら？ 同じ三馬鹿でも、冬悟君は欠片も無いわね」

彼、そんな技使えないしね。父である柳韻の他の二人、一人は皆でよく行く喫茶店の店主で、もう一人は父とよく仕事している名前だった。

「御義母様」

「でも、少し更識も入ってるかしら？ IS学園で学んでるみたいね」

葦の手を取り、その場でぐるりと回る。踊る様に身を回す長身は、葦も自分も広くな
い廊下の、何処にも触れる事無く、追隨する葦を見定める。

「ふふん、半年すれば目にも見よかしら？ ……一応は合格ね」

「御義母様には敵いません」

「当然、私は熊谷真尋よ？ “荒熊” 熊谷真琴の母親、それで真琴？」

「……………ピィ……………」

音も無く、まるで最初からそこに居た様に、真尋が真琴に詰め寄っていた。先程まで、

帚と手を取り合っていた筈なのに、帚も呆気に取られて反応出来ていない。

そして、また気付けば、真尋の手が真琴の頬に添えられていた。

「貴女はなんで、技の一つや二つ、覚えてないのかしら？」

「おふぶ……」

真琴の反論を許さぬと、真尋は真琴の顔を挟み、もみくちやにする。

「まったく、仮にも熊谷の娘が自己の研鑽を疎かにするなんて、まあインドアの貴女が、
『荒熊』なんて派手な名前前で呼ばれてるから、少しはマシになったのかしら？」

「えふぶ……」

なんとか離れようと、真琴がもがくが、一向に離れられる気配は無い。

むーむーと足掻く真琴を他所に、真尋はその剛力をものともせず、平然と言葉を続け
ていく。

「インドアなのはお父さん譲りね。やっぱり、似るわね」

「それならば、御義母様もでは？」

「あら、そうね。私には劣るけど」

いまだに脱出の兆しすら無く、自分より頭一つ低い真尋に頬を揉まれ続ける中、真琴
の腕の中で眠るラウラが目を覚ました。

「ふあ……、……母様が二人？」

「あらあ？」

「…………ええ…………」

「ふむ」

真尋と真琴は、母娘という事もありよく似ている。見分けるのは簡単だ。単純に真琴の方が背が高く、体つきも真琴の方が大きい。と言つても、真尋も普通よりは高く大きいので、それ程に差は無い。

故に、ラウラが見間違えても仕方ない事だ。

「あらあらあら、まあまあまあ」

そして、真尋が再びラウラをいつの間にか抱いていた。

音も無ければ、気配も無く、本当に気付けばラウラも、真琴から笑顔の真尋に抱かれていた事に驚いてる。

「真琴、蒂さん。貴女達、いつの間にこんな大きな娘を？」

「だれー？」

まだ寝惚けているのか、眠たそうな口調のラウラ。その問いかけに、真尋はますます笑顔顔を深くし、ラウラを抱き締める。

「あらあらあら、何かしらこの娘つたら、私史上始まつて以来の抱き心地……」

「うきやー」

「…母さん……ラウラ…違う……」

「まさかの認知拒否……！ 真琴、貴女に一体何があつたの?!」

「いえ、御義母様。落ち着いてください」

目を見開いて、真琴に詰め寄る真尋と、それを宥める蒂。ラウラがきよとんと、それらを眺める。

そして、ある言葉を口にする。

「母様に似てる」

「そうよー、私は真琴の母親よー」

「母様の母様……、婆様？」

瞬間だった。

「真琴、蒂さん？ 貴女達、この娘にどの様な教育を？」

笑顔の真尋がそこに居た。

RE : 三十二冊目

さて、熊谷真尋とはどういった人物なのか。箒は思案する。

身内鼻負も入るが、人外の域にある技を持つ父と、その友人達。そんな彼らを片手間で張り倒し、人の極致に至る肉体。そして、おおよそ傷付ける術があるのか怪しい精神。語る者が居るなら、*「ブリュンヒルデ」*織斑千冬と並ぶ、この星が産んだ理不尽と語るだろう。

「婆様じゃないのー?」

「そうよー、婆様じゃないのよー」

「じゃあ誰?」

「真琴のお母さんよー」

「母様の母様……、……大母様?」

その星が産んだ理不尽の胸に、ラウラが埋まった。目にも止まらぬ速度で、真尋が抱き締め、その胸にラウラが埋まった。

「もう、なにこの子。カワイイ……!」

何というか、すごい光景だなど、箒は思う。背丈は娘の真琴の方だが、胸囲は母の真

尋が勝る。

つまり、真琴でも埋まらなかつたラウラが、真尋だと埋まるのだ。

んもんも言つて、バタバタもがくラウラを、真尋は満面の笑みで抱き締める。

「本当、なにこの可愛さ……！」

「うもも……」

抱き締める真尋、もがくラウラ。じたばたと足搔いて、真尋の胸から顔を出す。

「ぶへ……」

「あらあらあら、もう、本当にうちの子にしちやおうかしら」

ラウラを取り戻そうと、真琴が手を伸ばすが、何故かどういふ動きなのか、その手は

ラウラどころか、真尋にすら届かない。

ただラウラを抱き締めて、愛でていられるだけにしか見えないのに、一体どういう動きだ。

箒は疑問するが、相手は熊谷真尋。こちらの常識は通用しない。

「御義母様、そろそろ」

「あら、そうね。じゃあ、晩御飯にしましょう」

抱いていたラウラを、気づけば真琴に預け、真尋は盆に硝子の器を乗せて、ポーズまで決めていた。

意味が分からない。

「今日は暑いから素麺よ。めんつゆは和風、中華風ね。あ、薬味も色々あるわよー」

氷水に浮かぶ素麺に満たされた器、更に各種薬味が乗った盆を持ちながら、その場できると回る。

ただそれだけなのだが、山と盛られた薬味はおろか、氷水にめんつゆすら、器から一滴も溢れていない。

昔に箸が聞いたところ本人曰く、熊谷なら出来て当たり前前らしいが、真琴が同じ様な事が出来ていたところを見た事が無い。

「錦糸玉子にきゅうり、葱、生姜、山葵、海苔、椎茸の甘煮、あ、紫蘇に胡麻。中華風は叉焼、煮玉子、メンマにキクラゲ、変わり種に小エビ、胡麻油に辣油はどうかしら？」

テーブルに積まれていく量は、明らかに四人分ではない。まさしく山となった素麺が、大量の薬味と共に、テーブルを占拠する様は圧巻だが、熊谷家では当たり前前の光景だ。

「それで？ 学校はどうなの？ この子ったら、また本の中に埋もれて過ごしてない？」
「…母…さん…ちよつと……」

「あなたは昔から、何かあったらお父さんに、新しい本をねだって……。せつかくの私譲りの体も、宝の持ち腐れに、箒さんがいなくなったら、どうなっていたか」

「ははは、御義母様。真琴なら心配無用です。私にラウラ、他にも真琴を一人にする者が

居ない」

フォークで素麵を手繰り、口に運ぶラウラの頭を撫でれば、きよとんとした顔でラウラが見上げる。

器には叉焼とキクラゲ、どうやらラウラが選んだのは、中華風というよりは、醤油ベースの冷やし中華のタレ。

だが、味は醤油が強いので素麵によく合う。

小エビに叉焼に玉子、薬味の山にラウラもご機嫌でフォークを手繰っていく。

箸も鰹出汁ベースのめんつゆに、葱に海苔生姜に椎茸と入れ、素麵を束と箸で掴み取り、勢いよく啜る。

「箸、スゴいな」

まだ麵を上手く啜れないラウラが、箸に憧れに似た視線を向ける。真似をして素麵を啜るが、どうにも上手くいかず、結局フォークでスパゲッティの様に手繰る。

中々上手くいかないラウラを、微笑みながら箸は次の素麵へと、箸を伸ばす。だが、見れば素麵の山が一つ消えている。

「あのね、真琴。あなたがお父さん似で、そういうのが苦手なのは分かるわ。けど、それならそれなりの道を選びなさい」

「う…………でも…選ばれ…………たから…」

「真琴、あなたのやりたい事をやりなさいな」

真面目な話をしながら、素麺の山が見る見る間に減っていく。というより、消えていく。

あつという間に、空になった器。そして、再び満たされる大量の素麺。白い山が盛られては削られ、削られては盛られを繰り返し、山が尽きる気配が無い。

「あなたの人生、やりたい様にちゃんと生きなさいな。それはそうと、あなたが居ると減りが早くて助かるわー。ほら、頂き物の素麺二箱目よー」

真面目な話をしながら、箸は止めない。熊谷家は代々健啖家で、中でも真尋真琴親子は飛び抜けているらしい。

箸が次は紫蘇でもと、薬味皿に箸を伸ばす。その間にも、素麺の山は削られていく。「そう言えば、そろそろ学園祭に、何とかってレースでしょ？ 大丈夫なの？」

素麺を追加しながら真尋が問えば、真尋が頷く。まあ、大丈夫だろうと、箸も同様に頷く。

何があつても、何時もの通りに騒ぐだけだ。

「大丈夫です。何時も通りですよ」

「あら、そうなの？」

「そう……」

真尋は少し思索した様子で、新しく入れ直しためんつゆに山葵を落とす。

嘘を吐いても益はない。事実、事故が起きた等の話は聞いていない。ならば、子を信じるのも親の役目か。

「なら、今度見に行きましよう」

「……え……」

「あらあら、真琴。何か見られたら困るものでもあるの？ あるのね？」

「……な……何……で確定……」

「あなたの親だからよー」

不純異性交遊は、この娘の性格から有り得ない。では同性は、まあ、箒の性格上有り得ない。

食費は学園持ちだとすると、隠しそうな事は一つだ。

「真琴、あなた今週だけで何冊買ったの？」

さつと、顔ごと目を逸らす真琴。さて、この反応の場合は、一冊二冊ではない。箒を見れば、くつくつと笑いを堪えている。

この反応は成る程、つまり十はいつている。

「真琴？」

「……………」

震えだした。この本好きは、一体誰の影響だろうか。間違はなく、夫の影響。さてさて、どうするか。

「母様、いっぱい本買った」

「…ラ…ラウラ…」

「リュックいっぱい買った。私も買った」

まさかのラウラの裏切りに、真琴が慌て出す。

「あらあら、真琴。本を買ってもいいけど、買いすぎるなって、言ったわよね？」

「…うう…」

きよとんとした顔で見上げるラウラ、とうとう限界がきたのか吹き出す筈。

震えながら、真琴が臨戦態勢に入る。しかし、抵抗は無意味で、瞬時に無力化される。

「さて、真琴。正直に言いなさい、何冊買ったの？」

「ううう…」

「十？ いや、二十ね。買いすぎよ」

デコピンの音が響き渡る、そんな夕食だった。

RE：三十三冊目

「じゃあ、真琴。今日の氏神様のお祭りに出なさいな」

「……え……？」

夏休み、だからといって、開放的にも活動的にもなる訳もなく、真琴は何時もと変わらず、自室ヘヤノスミスの隅で本の山に埋もれていた。

「何………で……？」

「奉納相撲の女相撲に、出る筈の人が急に出られなくなつたつて話でね。代わりに出なさいな」

「……でも………本……」

「いいから、お行きなさいな」

猫の様に襟首を摘ままれ、手荷物と共に部屋から引き摺り出されていく。無論、真琴も全力で抵抗するが、真尋の力に勝てず、ついには家から放り出される。

「箒さんに話は通してあるから、しっかりやりなさい」

上から簡易廻しを巻いている。

神社の神木の影に隠れる様にして、2 m近い真琴が文庫本を読む姿は、通りすがりの人々を驚かせたりしている。

「さて、真琴。そろそろだ」

「……うー……」

「ははは、そうむくれるな。……御義母様から聞いた話だが、優勝は図書券、しかも結構な額らしいな」

「……やる……」

優勝賞品を聞かされ、俄然やる気を出す真琴を見ながら、箒はまず真尋が関わっているだろうと考えた。

考えたが、考えたところで、何か実害があるという訳も無く、単純にあのままでいれば、真琴は一步も家から出る事無く、夏休みを終えていただろう。

箒が連れ出すという手もあつたが、それは真琴の意思とは言えない。

今の状況がそうかと問われるとあれだが、こうしてやる気になつているからいいだろう。

「ふんす……」

鼻息荒く、土俵に上がる。身長ほぼ2 mの真琴が、土俵に上がれば、普段以上に威圧

感が出る。

はてさて、一体どこまで出場者が残るのか。

「へ？」

「おいおい、熊谷さんとこの娘か」

近隣住民からの驚きの声が聞こえる中、行司の合図で二人が土俵の中心で向かい合う。

まず一回戦は、立ち会いで勝負が決まっていた。体格差が桁違い過ぎたのだ。立ち会いで、そのまま軽く持ち上げられて、土俵の外に下ろされた。

二回戦も、立ち会いで真琴の手を避けはしたが、真琴を押し出す事が出来ずに、体力が尽きて棄権。

そして続く三回戦は、

「あ？ マジでクマかよ」

「……タカちゃん……」

「お前帰ってたのか。つうことは、ああやっぱり、箒も居たな」

吊り目がちの、良く言えば快活そうな、悪く言えばヤンキー風の少女、真琴と箒の中学生時代の同級生である、*“鷹山・美那”* がこちらを見上げていた。

「てかよ、帰ってくるなら、連絡くらい寄越せって」

「……」め……ん……」

「箒もだぞー！」

観衆から、聞きなれた笑い声と気軽な謝罪が聞こえる。

まったくと、鷹山はため息を吐いて、真琴に再び視線を戻す。

鷹山も、十代として身長は低くはない。むしろ、高身長の種類に入る。格闘技経験のある体は、かなりの力強さを感じさせる。

だがそれも、真琴の前では霞んでしまう。

——まったく、相変わらずの体格だよな——

出会った頃は、まだ鷹山の方が身長は勝っていた。だが、気づけばこれだ。

ちよつと生物として、おかしいんじゃないだろうか。

というか、身長だけでなく、胸やらなにやらのサイズもおかしくないか。何食ったらそうなる。

「まあいいや、クマ。あたしが勝ったら、たこ焼きお前の奢りな」

「……じゃあ私が……勝ったら焼き……そば……タカちゃんの奢り」

「いいぜ、来いよ」

発揮用意と、行司の合図に二人の右手が下りていく。

土俵につき、軍配が視界から消えた瞬間、真琴は右手を伸ばした。

はつきり言ってしまうえば、体のどこかが当たれば、真琴の勝ちが決まっている。自身の身体能力は理解しているし、当たれば押し出せ、掴めばそのまま持ち上げられる利き手を出すのは、当然の判断だった。

「すぐに右は変わってねえな……！」

右を掻い潜った鷹山が、同時に前に出ていた右足に手を伸ばす。身長も力も体重も、身体的な要因は速度以外は全て真琴が上だ。

だから、前に出た足を取って、バランスを崩して転ばせる。下手に暴れられる前に勝負を決める。

そう考え、足を取ったのだが、取った足が動かない。

失策、そう感じて離れようとしたが、その時には既に手遅れだった。

「あく、優しくな？」

「…焼きそば…よろしく……」

「はいよ……」

意図も簡単に持ち上げられ、そつと下ろされる。

優勝は出来なかったが、懐かしい面子に会えたので、良しとしよう。

鷹山が土俵を降りると、もう一人の懐かしい顔があった。

「ははは、お疲れ」

「まったく、お前も真琴も、どうしてこう、事前連絡つてのが出来ねえのか」
「何、気にする事は無い。学園ではよくある事だ」

「何がどうなつてんだ、IS学園」

今日、何度目かのため息を吐けば、プラスチックのカップが差し出される。
かき氷だった。

「みぞれか」

「緑色のみぞれがよかつたか？」

「素直にメロンって言えよ」

「味は一緒だから、構わんだらう」

見れば、箸が手に持つかき氷には小豆が乗っていた。

「てめ、その小豆分けるよ」

「いいが、私にも焼きそばだ」

「ああ、くそ。聞いてやがつたか」

「ははは、予想が当たつたか」

「この野郎……」

ストローを裂いて作ったスプーンで、氷をちびちびと食べていると、どうやら最後の取り組が終わつたらしく、真琴が賞品の包みを片手に、土俵を降りてきた。

「よし、着替えたら飯食いに行くか。他の連中も来てるだろうしな」

しかし財布、大丈夫かな。

鷹山はこれからを考え、頭の中で計算したが、どうにも明るい未来は見えなかった。

RE：三十四冊目

「しっかし、I S学園ってのはどうなんだ？」

真琴の着替えを待つ間、鷹山がたこ焼きを片手に、箒に問う。

また、いきなりだなと箒は、鷹山の持ったこ焼きを一つ取り、口に運ぶ。

「あ、おい」

鷹山が抗議するが、一つくらいで目くじら立てるなど、牛串の屋台を指差す。

「一本七百年を奢ってくれよう」

「なんで、上から目線だよ」

「はっはっはっ、なに気にするな」

箒は焼き上がったばかり牛串を、纏めて買い上げると、串が束となつてはみ出たプラトレイの、串が飛び出ている側を鷹山へ向ける。

角切りにされた牛肉が、醤油味の甘辛いタレに漬けられ、黒い焼き色を照り返している。

「また随分と張り込んだな」

「ふむり、どうセイタチとツバメも来ているのだろう」

「当たり前だろ」

串の肉を食べれば、硬く筋っぽい食べ応えのある食感と、牛肉特有の血肉の味に甘辛い醤油ダレが混ざり、口に広がる。

「二味、いや七味が欲しいな」

「飲んべえのオヤジか、お前は」

「いやな、学園ではこう、シンプルに直接的というか、まあ単純にジャンクなメニューが無くてな」

「ハンバーガーとか、あるんじゃないかねえのか？」

「あるにはあるぞ。某ファーストフードではなく、専門店が出てきそうな豪勢なやつがな」

「あく、それはなんか変化球だな」

噛み応えのある肉を噛みながら、神社の境内にある石垣の端に腰掛ける。

箸の言う、シンプルなジャンクフードというのは、世間一般のチェーン店が提供する大量生産品で、専門店が提供するこだわりの一品ではない。

「こう、薄いパテにやけに黄色いチーズ、どことなく消毒液の気配を感じる気がする野菜に、やたら味の濃いケチャップとソース」

「あと、パサパサのパンズな」

「ははは、美味しきの気配を感じない表現なのに、何故かな。たまに食べたくなる」

更に贅沢を言えば、厚切りではなく細切りのポテトが欲しい。と、箒が言うと、本当に鶏肉使つてるかたまに疑いたくなるナゲツトはどうよ。と、鷹山が言う。

「それも欲しいが、それなら氷まみれのコーラも要るな」

「ああ、それだ」

時刻は昼間から夕方へ移り、屋台や街灯にも、ちらほらと灯りが灯り始める。日が陰り、人工の光に照らされながら、その様に話していると、不意に二人をぬうつと影が被つた。

「…箒ちゃん…タカちゃん…」

普段通りのシャツに、ロングスカート姿の真琴が、ぼんやりと二人を見下ろしていた。

周囲からは少し異様とも見える光景だが、箒と鷹山からすれば当たり前の光景だ。

口が少し開いているから、牛串を寄越せという事だろう。箒の手にあるトレイから、牛串を一本取り、手を伸ばして真琴の口に入れる。

空腹だったのか。あつという間に串の肉が無くなる。

見れば、箒が次の串を渡している。

ここに鮎川と燕谷が揃えば、中学の頃から続くお馴染みの光景となる。

だが今は違う。そうではない。

「クマ、その小せえのはなんだ？」

「え……………？ ……ラウラ…」

よし、名前は分かった。名前はラウラ、銀髪と黒い眼帯の目立つ外国人の子供。問題は何故、そのラウラが真琴の足にしがみついて、こちらを威嚇する様に見えるかだ。さて、どうしたものか。真琴に子供がくつついているのは、なにもこれが初めてではない。

以前にも、何度か似た様な事があった。しかし、それは全員が地元の顔が知れた子供だけで、ラウラの様な、外国人の子供は初めてだ。

「よしよしよし、クマ。どっから連れて来たか知らんが、大人しく元の場所に返してこい」

「え……………ドイツに……………？」

「んー？」

ラウラはドイツ人の様だ。だが、何故にドイツ人が極東の島国、そのド田舎の夏祭りに居るのか。

箒が顔を明後日の方角に向けて、笑いを堪えているのが気になるが、今は友人を誘拐犯にしない事が優先だ。

「…タカちゃん……………」

「動くな、動くなよー、クマ」

垂らしていた前髪の房を、指でかき上げて、鷹山が真琴にじわじわと迫る。

大丈夫だ。肉体のスペックとしての瞬発力や速度は、真琴の方が上だが、小回りや柔軟性に関してはこちらが有利。

タツクルからテイクダウンを取るのとは不可能、打撃や投げで勝てる訳も無い。ならば一息に絡んで極めるしかない。

真琴のリーチは広く、掻い潜るのは至難の技だが、自分ならやれる。

鷹山が腰を落とし、真琴が動きを見せる前に、一気に極めようとした時、小さな姿が二人の間に割って入った。

「やめろー！ 母様をいじめんな Yankeeー！」

「ヤン……?! ははき……、はあ!!？」

「ぶっは……！」

構えた鷹山の前にラウラが、若干涙目で立ち塞がり、ラウラの発言に鷹山が混乱して、真琴と箒を交互に見た。そこで、限界が来た箒が堪らず吹き出し、腹を抱えて笑い出し、真琴は涙目のラウラを抱えて狼狽えた。

数人、通行人がこちらを見てくるが、そんなものを気にしている場合ではない。

「いや、待て。母、母だったか？ チビスケ」

「は、母様は母様だぞヤンキー！」

「あたしやヤンキーじゃねえんだが、まあいいや。箒……！」

「はっはっはっ、まあ色々あったのだ。気にするな」

「いや、気にするなってお前な」

昔から、何かと騒動が起きては、中心に居たりするのが箒と、大概巻き込まれる真琴だが、今回のこれは一体どういう事か。

真琴は日本人、ラウラはドイツ人だ。正確な年齢は分からないが、体格的には自分達より下なのは確かだ。

科学技術の発展した昨今、同性同士で子を為す事も、難しいが不可能ではない。だが、箒と真琴の貞操観念は、乱れたものではないと、鷹山は記憶している。しかし、世界中から人材の集まるIS学園、何らかの影響を受けて、過ちを犯してしまった可能性もある。

もし、仮にそうだとしても年齢が合わず、人種も合わない。というか、ラウラはドイツ人だ。

「タカちゃん……？」

真琴にしがみつくとラウラと、笑いの止まらない箒、この状況に狼狽えたままの真琴。この三人の関係性に、頭の中で長考を重ねた鷹山は、一つ答えを出した。

「……箒、イタチとツバメにはまだ会ってねえよな？」

「ふふ、ああ、まだだとも」

「よつしや、あの二人で遊ぶぞ」

「この現在を知らない友人二人をからかって遊ぶ、だ。」

「ははは、どうからかうかによるが、……しかし、タカ」

「あ？」

「……なんでもない。後で話そう」

「おう、また面倒くさそうな事考えてんだろ？ お前らがそれでいいなら、あたしは何も

言わね」

「すまん」

「気にするなど、鷹山は少し冷めた牛串を二本取り、一本を己に、もう一本をラウラに

差し出す。

「ほれ、あたしは鷹山・美那。箒とクマとは中学からの付き合いだ」

「……ラウラ、ラウラ・ボーデヴィツヒ」

「そっか」

牛串を齧りながら、ラウラがむすつとした表情で返事をする。

さて、このチビスケをどうしてくれよう。鷹山は考える。

真琴と箒が連れてくるという事は、ラウラには問題は無いという事だ。何やら難しい事情を抱えていそうだが、そんなものは知った事ではない。

久々に帰ってきた友人二人が、少し変わった仲間を増やしていた。ただそれだけの事だ。

この後、屋台を巡回しているもう二人と合流して、久々に夜通し騒ぐのも悪くないかもしれない。

「食ったか」

「食べた」

「よし、真琴、箒。射的やろうぜ射的。負けた奴は、焼きもろこし奢りな」

「……………え…いいの?」

「ははは、真琴のリーチだと、圧勝されるがな」

「あ? クマは代わりにチビスケがやるんだよ」

「ふえ?」

「さーて、チビスケ。お前が負けたら、クマはあたしら全員に焼きもろこし奢る事になるぞお?」

「ひ、卑怯だぞヤンキー!」

「はははは、聞こえねー」

難しい話はその時に、聞けたら聞けばいい。そうでなくても、態々掘り返す話でもなかろう。

抗議に暴れるラウラの頭を片手で押さえ、鷹山は射的の屋台がある参道へと足を向けた。

RE : 三十五冊目

しかし、今年は賑わっている。

鷹山はいか焼きを頬張りながら、祭りの通りを眺め、離れた屋台から、こちらへ戻ってくる長身に手を振り、通知を報せる携帯端末を開く。

「あたしらは夏休みでも、世間様は忙しいな」

『加賀美インダストリアル、世界初の飛行可能EoSを開発。代表取締役加賀美ハヤト氏「これよくないですか!？」』

『東京奥多摩でバランの妖精が目撃される』

『世界的富豪オーフィリア家当主来日、来日理由は最愛の人を迎えに来た?』

『オーフィリア家当主グレイ・オーフィリア氏来日の影に、謎の人物? “リンドウ”とは何者なのか』

『人気コンビ舞元力一、チャリでベトナム縦断?』

『桃鉄ソロプレイ、ヘルエスタ王国第二皇女陰キヤ確定か?』

「最後のは、放つといてやれよ」

「え……何が……？」

「ああ、気にすんな」

ニユースと届いたメールを確認し、携帯端末を閉じた鷹山が顔を上げると、真琴が数本のペットボトルを入れた、やけに張った袋を提げて、こちらを覗き込んでいた。

長身で長髪の真琴が、膝を曲げずに、背を丸める様に腰を曲げると、中々にホラーテイストになるのだが、鷹山はもう馴れている。

黒い髪のカーテンを気にする事無く、真琴が提げているビニル袋から、透明な炭酸飲料のペットボトルを引き抜くと、水と氷の混ざった音がした。

「サービス良いじゃねえか」

「イタチ……のおばさんが……くれたの……」

「イタチの？ つー事は……」

「おーい、タカー。つて、クマ帰ってんじやんか。箒とツバメは？」

「話が早えよ、イタチ」

半袖のツナギに、歯車の模様の入ったシャツ。そして、腰には中身の張ったウエストポーチ、頭にはこれまた歯車の模様のバンダナを巻いている。

夏だから、全体的な布地は薄めなのだが、シンプルなシャツとズボンの二人に比べ、重

装備感が強い。

「イタチ……久し……振り……」

「やつほやつほ、ひっさしぶりー。どうよ、あっちでの箒との生活はさ?」

「えっ……とね……?」

鮎川・理穂、いたちがわりほ通称イタチ。

真琴と箒、鷹山とつるんでいた残りの二人の内の一入であり、いつも人好きのする笑みを浮かべている。

「いやー、オヤジの奴が安請け合いですから、あっちこっち走り回った。んで、クマー、箒との生活とか、ISはどうなのさ?」

「はっはっはっ、それに関しては私から話そう」

「あ、箒、おひさー。金魚に綿飴持つて、焼きそばたこ焼きは祭り満喫し過ぎじゃない? ……つか、その銀髪ロリ誰よ?」

「ぴゃっ!」

真琴に次ぐ長身の鮎川が、その長い体を曲げて、箒の上着の裾を掴んでいたラウラを怪訝な顔で覗き込む。すると、さっと箒の後ろに隠れてしまい、頭に着けたヒーロー物のお面が揺れた。

「ふむり、ラウラだ」

「オツケー、ラウラね。IS学園の?」

「如何にも、IS学園のラウラだ」

「オケオケ、IS学園のラウラね」

「そうだ。ほら、ラウラ。イタチだ」

「……ラウラ・ボーデヴィツヒ」

それだけ言うと、ラウラは真琴へ目掛けて走り去ってしまう。

そして、

「母様ー」

「そっかー、クマが母さ……、はあっ?!」

ここで鷹山が吹き出し、真琴は不思議そうな顔で、ラウラを抱き上げた。

「く、くく、クマ?」

「イタチ……どうした……の……?」

「は、はは、母様つて?」

「母様は母様だぞ?」

「な、お? え、うん? ……タカー!!」

すると、鼬川は息を吐いて、腹を抱えながら、声を殺して笑っていた鷹山の首を、額を擦り合わせる距離までしがみつく様に引き寄せる。

「いや、どういう事よ？」

「さて、どういう事だろうなあ？」

「待つて待つて、本当にクマの子供？ そしたら、相手は箒？ いやいやでも、あの箒が手え出すか？ というか、ヤバイよタカ。ツバメがこれ知ったら……！」

「まあ、落ち着け。あれはだな……」

「誰が、何を知ったら、ヤバイのかしら？ イタチ、タカ？」

その突然の声に、イタチの頭が壊れた人形のように、ゆっくりと動く。

振り向いたその先には、柔らかな笑みを浮かべる友が、はし巻きの乗ったトレイを手にしていた。

蜜色の、少しだけ色の濃い肌と、鷹山とは違い、冷たさを感じさせる鋭利な瞳。

長く艶のある髪を靡かせ、はし巻きのトレイを鷹山に渡して、確かな足取りで箒の前へと歩む。

「お久し振り、箒」

「はっはっはっ、久し振りだな。ツバメ」

ツバメ、つばめ燕谷・カリナ。

シンプルなシャツと、タイトジーンズに長い足を包み、快活に笑う箒の前に立つ彼女だが、その表情は久々の友との再会を喜ぶというよりは、何か仇敵との再会した様な、い

やはり友と再会した様な、そんな何とも言い難い表情だった。

「箒、まずはお帰りなさい。そして、箒。今の話はどういう意味かしら？」

「ふむり、ツバメよ。今の話とは？」

「箒、私は自分のIS適性の低さを、これ程までに恨んだ時は無いわ」

深い溜め息を吐いて、腕を組んで額を押さえる。

「やれやれと、また息を吐くと、鷹山がはし巻きを齧りながら、声をかけてくる。

「おーい、これ食つてもいいの？」

「タカ、食べてもいいけど、事の重大さを理解してるの？」

「あー……、理解してるしてる。クマと箒がチビスケ連れて帰ってきたって話だろ」

「そう、それよ！ ほら、クマ。貴女もこっちに来なさい」

「え……うん……」

両手にはし巻きを握ったラウラを抱えて、真琴が燕谷に近寄る。

「箒、私は私の無能を憎むわ」

「はっはっはっ、中々に大それた話になってきたな？」

「ええ、本当にね」

そう言ううと燕谷は、両手に持ったはし巻きを齧るラウラに向き直る。

「……ツバメ……？」

「まったく……」

燕谷の手が、ゆつくりとラウラに向けて伸び、両頬を軽く摘み上げた。

「こんな愛らしい子と、クマのセットの日々が見られないなんて……!」

「おぶぶ」

「やだ、もち肌とかそんなレベルじゃないわね。どういうスキンケアしたら、こうなるの？」

「はっはっはっ、ツバメ。とりあえず、そこまでだ。ラウラが伸びる」

「あら、ごめんなさいね」

そう言つて、ラウラから手を離すと、燕谷はポケットからウェットティッシュを取り出し、ラウラの口の周りに着いたソースを拭う。

「んむむ?」

「うふふ、あー、本当に恨むわー。IS適性Eを恨むわー」

「え……と……ツバメ……?」

「ああ、そうね。じゃ、改めまして、ラウラちゃん? 燕谷・カリーナ、クマとは中学からの付き合いよ」

宜しくね、とまだ混乱の最中にあるラウラと握手し、空いた手でラウラの頭を撫でる。
「あらあら、サラサラじゃないの。本当に羨ましいわー」

「ツバメ、お前この後は？」

「空いてるわよ。というより、暫くは空いてるわ」

「よし、そんじや各々買い出しをしてから、クマの家集合な」

「え……？」

鷹山がそう言うのと、真琴は聞いてないと、きよとんとした表情を浮かべる。

「実はさつき、真琴のカーちゃんからメールがあつてな。オヤジさんが出先で忘れ物して、それを届けついでに、夫婦で小旅行に行くらしい」

「真琴カーちゃん自由過ぎない？」

「イタチ、何時ものよ」

「……聞いて……ない……」

「ま、色々聞きたい話もあるし、いいじゃねえか」

鷹山がそう言うって、真琴の背中を軽く叩くと、真琴はがくりと肩を落とした。

………背が

3 8 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 0 : 0 9 : 2 7 I D : i u R v P s v s

5

>>>3 7 正気に戻れ。

4 2 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 0 : 0 7 : 5 4 I D : h l c 7 N V 0 b

7

>>>3 7 ここにはお前を差別する者は居ない。

………自分に、正直になれ

5 5 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 0 : 0 8 : 4 4 I D : 2 Q n P j g f M

C

>>>3 7

>>>4 2

有り難う。

やっぱりおつきいよ、 “荒熊”のおっばい

1 59 : 名無しの投稿者 2030 / 8 / 8 0 : 09 : 45 ID : uEYvaoQy
 だよな。身長というか、全身規格外だよな

8 72 : 名無しの投稿者 2030 / 8 / 8 0 : 10 : 43 ID : htEzWLG0

噂だと、本人気にしてるみたいだから、あまり言うのはあれだけどな。
 初めて見た時から、推し選手だわ

g 76 : 名無しの投稿者 2030 / 8 / 8 0 : 11 : 36 ID : DdXCQbae
 >>>72 それな

E 81 : 名無しの投稿者 2030 / 8 / 8 0 : 12 : 50 ID : 5kNDIgm

>>>72 ナカーマ

d 9 0 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 0 : 1 3 : 5 6 I D : a b i + 1 k + 0
 荒熊党の我々に隙は無かった

f N 1 0 3 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 0 : 1 4 : 5 5 I D : E v 7 z A e 6
 アンチも、そんなに居ないよな？

3 g 1 1 0 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 0 : 1 6 : 0 7 I D : Y + 5 L T P B
 アンチは何処でも誰にでも湧く。というか、アンチが居ない方が怖い。

U 4 1 1 7 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 0 : 1 7 : 1 1 I D : y i 3 W G r z
 確かにな。アンチが居なかったら、それもう洗脳だわ

1 3 2 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 0 : 1 8 : 2 5 I D : r R 0 b I B h

6 b

居ても、やわらかアンチな印象だな

1 4 7 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 0 : 1 9 : 0 2 I D : E c 7 / H m M

S X

やわらかアンチ w w w w

1 5 2 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 0 : 1 9 : 4 9 I D : z e D i p X g

z l

やわらかアンチ、指でついたら、そこから腐りそう……

1 6 1 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 0 : 2 0 : 2 8 I D : 3 Q k Y g Z f

L J

やわらかアンチ「荒熊に突っつかれるなら本望」

1 6 2 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 0 : 2 1 : 3 2 I D : d f P T c d P

L X

>>161 それはもうアンチじゃないんよ。ただの信者なんよ

169 : 名無しの投稿者 2030 / 8 / 8 0 : 22 : 21 I D : x x + k p l d
J r

いやまあ、実際問題、荒熊相手に正面からキツイ言葉はなあ……

171 : 名無しの投稿者 2030 / 8 / 8 0 : 23 : 06 I D : D V c j 4 6 0
k p

出ないんだよなあ

180 : 名無しの投稿者 2030 / 8 / 8 0 : 24 : 21 I D : k z M z C e g
w E

え？ にわかだけど、荒熊って普段もそんな怖いのか？

あ、この荒熊スレ初見です

187 : 名無しの投稿者 2030 / 8 / 8 0 : 25 : 17 I D : u 3 n B m l f

G g

初見さんいらっしやい。

ここはやわらかスレだから、過激な発言等は避けましょう

1 8 8 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 0 : 2 6 : 0 0 I D : 0 r L t G Q H

N f

尚、>>36の画像に関しては誰も触れない。

わりと、角度ギリギリじゃね？

2 0 1 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 0 : 2 6 : 5 2 I D : H H U B G u F

G y

>>188 36です。

これ一応、IS委員会の公式サイトにアップされてる画像の中にあつたやつなんよ

...

2 1 2 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 0 : 2 7 : 3 9 I D : 5 D D x a K U

j d

マ？　　I S 委員会始まってんな

2 2 1 : 名無しの投稿者　　2 0 3 0 / 8 / 8　　0 : 2 8 : 1 5　　I D : n P H / n l e

O S

盗撮言われても、言い訳できんぞこれ

2 3 6 : 名無しの投稿者　　2 0 3 0 / 8 / 8　　0 : 2 9 : 2 3　　I D : m 9 J / Y e u

5 y

これ、アリーシャとかの欧州勢の I S スーツと機体だったら、下手したら見えてるゾ

2 3 9 : 名無しの投稿者　　2 0 3 0 / 8 / 8　　0 : 3 0 : 2 9　　I D : m a u h g r j

K 7

あれは欧州勢の I S スーツが、露出多いだけだから……（震え声）

2 5 1 : 名無しの投稿者　　2 0 3 0 / 8 / 8　　0 : 3 1 : 2 9　　I D : K z g K 4 E U

S P

>> 2 3 9　　何で震えてるんですかねえ？

2 5 5 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 0 : 3 2 : 3 1 I D : r i K Z m 6 P

H +

(震えて) 無いです

2 6 2 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 0 : 3 3 : 3 0 I D : h w G / o l

B A

震えてだるるるオオン?

2 7 0 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 0 : 3 4 : 2 9 I D : W / 5 7 u o n

q G

逆に荒熊のスーツは露出少ないってか、無いよな

2 7 3 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 0 : 3 5 : 2 4 I D : X I Z z 8 E Q

F r

ああ、ビビるくらい無いよな

277 : 名無しの投稿者 2030 / 8 / 8 0 : 36 : 02 I D : S5 + U r 4 K

p d

な ピッチリスーツだけど、ハードポイントパーツと防寒用のアウターで、重装甲だから

280 : 名無しの投稿者 2030 / 8 / 8 0 : 37 : 14 I D : R / Z U 2 E o

w b

尚、本人と機体も重装甲。

同じ女として、あの全身の軟質装甲の付き方は、嫉妬を通り越して、既に憤怒の域に達している。

286 : 名無しの投稿者 2030 / 8 / 8 0 : 38 : 19 I D : a n H 2 n J S

z o

>>280 嫉妬憤怒ネキ落ち着いて

299 : 名無しの投稿者 2030 / 8 / 8 0 : 39 : 06 I D : d Z U C Z l p

Y K

>>>286 すぐおちついて、わたしはしようきにもどった!

3 1 2 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 0 : 4 0 : 1 1 I D : j p x l v m N

U 2

もう駄目みたいですぬ

3 2 1 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 0 : 4 1 : 0 1 I D : E 5 H q c P v

v G

嫉妬憤怒ネキは落ち着くまで置いといて、何で荒熊のスーツは重装甲なん?

薄いと溢れるから?

3 2 7 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 0 : 4 1 : 4 1 I D : O r G k 4 m f

P c

>>>321 火の玉ストレートセクハラやめろ。コーヒー鼻に入った。

3 4 0 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 0 : 4 2 : 4 4 I D : + D T U x K f

D t

>>321 確か、本人が露出嫌いだったからの筈。

352 : 名無しの投稿者 2030 / 8 / 8 0 : 43 : 32 ID : PdWemjc
60

はえー、優遇されてんだな？

優遇、でいいの？

365 : 名無しの投稿者 2030 / 8 / 8 0 : 44 : 33 ID : lJ+ / x+ /

bD

>>352 ISスーツに関しては、他企業も開発に躍起になってるから、別にそこまで優遇って訳じゃない。

というより、代表候補生で専用機持ちなら、当たり前レベル

372 : 国営企業屋ニキ 2030 / 8 / 8 0 : 45 : 24 ID : 8EBItMI

x5

俺氏参上！

380 : 名無しの投稿者 2030 / 8 / 8 0 : 46 : 34 ID : onpauw2

zd

ニキ! ニキじゃないか!

まさか、自力で残業から脱出を?!

391 : 名無しの投稿者 2030 / 8 / 8 0 : 47 : 41 ID : erbrkqi

y8

彼はニキではない(無言の腹パン)

401 : 国営企業屋ニキ 2030 / 8 / 8 0 : 48 : 44 ID : MZ0q8p4

gZ

いや、ニキやけど。

残業は(上司に)置いてきた。このスレについて来れそうにないからな!

402 : 名無しの投稿者 2030 / 8 / 8 0 : 49 : 20 ID : pphU5TF

5a

ちな、残業って何?

405 : 国営企業屋ニキ 2030 / 8 / 8 0 : 50 : 02 ID : j8TS / YI
PE

ほら、キャノンボール・ファスト。今年は日本開催だから、会場の設営準備とレースのルート設定に選定。後は根回し、無駄な不正と裏金潰し

419 : 名無しの投稿者 2030 / 8 / 8 0 : 51 : 04 ID : VZ r f n M n
4 /

ニキ、言っていないんそれ？

424 : 国営企業屋ニキ 2030 / 8 / 8 0 : 51 : 57 ID : N F S l u 5 V
u5

かまへんかまへん(天下無双)

正直、スポンサーがハードラックダイアモンド社な時点で、不正とか通じるかつての

430 : 名無しの投稿者 2030 / 8 / 8 0 : 53 : 02 ID : W / 19 H V l

rK

出た！ 必殺ハードラックダイヤモンド社！

442 : 国営企業屋ニキ 2030 / 8 / 8 0 : 54 : 13 ID : D O D y m L /

I O

俺らの希望！

というか、普段の荒熊について>>180の質問について、俺が答えよう。

荒熊の普段は、まるで違う。ソースは担当官の一人である俺。

448 : 名無しの投稿者 2030 / 8 / 8 0 : 55 : 26 ID : 3 S P C T A s

Z 2

>>180です。

そんなに違うんですか？

456 : 国営企業屋ニキ 2030 / 8 / 8 0 : 56 : 08 ID : I s V P A N a

U b

ああ、ハード面はゴジュラス・〇・オーガだが、ソフト面はそこら辺の小動物だ。

471 : 名無しの投稿者 2030 / 8 / 8 0 : 57 : 10 ID : L p q d g p G

e L

つまり？

486 : 国営企業屋ニキ 2030 / 8 / 8 0 : 58 : 06 ID : Y y O j c n f

0 K

可愛い

491 : 名無しの投稿者 2030 / 8 / 8 0 : 58 : 46 ID : C G e J 3 + M

Y h

可愛い

504 : 国営企業屋ニキ 2030 / 8 / 8 0 : 59 : 24 ID : W 0 E e 9 i D

R 7

更にてえてえもある

505 : 名無しの投稿者 2030 / 8 / 8 1 : 00 : 04 ID : n 5 z U J g S

8b

てえてえもある

515 : 名無しの投稿者 2030 / 8 / 8 1 : 00 : 39 ID : AHl m q u s
 x0

ニキ、最近の荒熊は？

521 : 国営企業屋ニキ 2030 / 8 / 8 1 : 01 : 53 ID : 3 X 9 a f P b
 F s

最近は、キャノンボール・ファストに向けて、高速機動訓練がメインだな。

パッケージの方も、高速機動パッケージの最終調整に入ったし、欧州も代表が決まり
 つつあるみたいだ。

528 : 名無しの投稿者 2030 / 8 / 8 1 : 02 : 52 ID : r l R l Q r /
 B T

欧州というと、
“俊狼”か

5 3 2 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 1 : 0 4 : 0 4 I D : x B H u O 9 y
V r

あれは怖い。あの目は、人を殺してる目だ

5 3 6 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 1 : 0 5 : 1 1 I D : R 8 E A K r d

P o

な、あれ目付きヤバイよな

5 3 8 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 1 : 0 6 : 1 0 I D : x 1 3 T o s 2

g z

殺意って、あんな形で見えるんだな

5 4 8 : 国営企業屋ニキ 2 0 3 0 / 8 / 8 1 : 0 7 : 1 8 I D : b x f 4 d U I

q m

本人気にしてるかもしれないから、やめような？

5 4 9 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 1 : 0 8 : 3 3 I D : G G / O C f N

t
M

分かったよニキ

話変えるけど、キャノンボール・ファストって何時だっけ？

5 5 1 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 1 : 0 9 : 3 7

I D : g X q 3 4 Q O

H H

夏明けの冬前？

5 5 7 : 国営企業屋ニキ 2 0 3 0 / 8 / 8 1 : 1 0 : 5 2

I D : i L 8 + f O T

E 8

一応、11月予定だけど、欧州組の予定がな……

5 6 0 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 1 : 1 1 : 3 6

I D : U t P b h F l

o o

どうしたニキ？

5 6 2 : 国営企業屋ニキ 2 0 3 0 / 8 / 8 1 : 1 2 : 5 1

I D : 6 T r F B v /

K a

欧州、代表で揉めてるっぽくてな。

イギリスの俊狼は確実だが、イタリアとかそこら辺が不服申し立てをしてるとか、妙な噂が立ってんだわ

570 : 名無しの投稿者 2030 / 8 / 8 1 : 13 : 56 I D : J Z 6 G b e Q

9 f

あれ、それ言っているの？

576 : 国営企業屋ニキ 2030 / 8 / 8 1 : 14 : 51 I D : M W Y u R 9 W

R 3

もう他のスレにも話は出てるし、週刊誌にも流れてる話だから大丈夫大丈夫。

585 : 名無しの投稿者 2030 / 8 / 8 1 : 15 : 34 I D : P l 5 3 f h U

p p

はえー、話早いところは早いなー

5 9 7 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 1 : 1 6 : 4 0 I D : D R r h q Y E
m e

という事は、我らが荒熊対俊狼が見られるかもって事？

6 1 1 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 1 : 1 7 : 5 2 I D : 5 J d I q l n
I B

可能性は高い

6 2 6 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 1 : 1 8 : 3 5 I D : T k 2 6 + V 8
F J

はい、初見ボーイです。

てえてえの部分の追加情報が欲しいです……！！

6 3 6 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 1 : 1 9 : 3 2 I D : e h J s L p U
D 0
初見ボーイ w w w w

6 3 9 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 1 : 2 0 : 1 9 I D : h D p A n 2 i
u m

有望な奴が来た w w w w

6 4 7 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 1 : 2 1 : 0 4 I D : h 5 T L o K P
d s

ニキ!

6 5 0 : 国营企業屋ニキ 2 0 3 0 / 8 / 8 1 : 2 1 : 5 8 I D : H e Z L H Q I
A p

てえてえ、それはこれだ

画像ファイル《○○／△△△》

6 6 3 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 1 : 2 3 : 0 7 I D : 0 i U b d m J

A G

ア。ツツツ!

671 : 名無しの投稿者 2030/8/8 1:23:46 ID:5r7Aui m

GF

楽園はここにあつた……

675 : 名無しの投稿者 2030/8/8 1:24:33 ID:DmeNyx c

Pt

ヒント!

679 : 名無しの投稿者 2030/8/8 1:25:22 ID:fA22fGh

Ey

死ぬな>>675

685 : 名無しの投稿者 2030/8/8 1:25:58 ID:Zc4ZAx f

Au

あー、そういや、ラウラちゃんと仲良かつタ世な

694 : 名無しの投稿者 2030/8/8 1:26:48 ID:oM4PVi j

d d

>>685 変換バグッてるゾ?

700 : 名無しの投稿者 2030 / 8 / 8 1 : 27 : 25 I D : s S X Y T n f

I V

>>694 仕様だ

しかし、二人抱き合っつてのお昼寝とか

は? キレそう……

705 : 名無しの投稿者 2030 / 8 / 8 1 : 28 : 03 I D : 4 w 2 c R m c

N 7

情緒不安定ニキ、安定して

720 : 名無しの投稿者 2030 / 8 / 8 1 : 28 : 44 I D : g l b q 2 k 0

Y X

すぐくあんていして、おれはしようきにもどつた

7 2 3 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 1 : 2 9 : 2 1 I D : L U p r b X l

P Y

駄目みたいですな

7 2 8 : 国営企業屋ニキ 2 0 3 0 / 8 / 8 1 : 3 0 : 2 7 I D : C C / R g + E

r M

はい、続けてドン!

画像ファイル《△△／○○□□》

7 3 0 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 1 : 3 1 : 1 2 I D : 3 L O q F H I

f Q

キヨンツ!

7 4 1 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 1 : 3 2 : 2 4 I D : q H 9 t u r N

3 u

どうして?

どうしてそう言う事するの?

7 5 3 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8
 1 : 3 3 : 0 4
 I D : J q k F u E P
 u V

軽率なほつペチユーは、南極条約違反です

7 6 8 : 国営企業屋ニキ 2 0 3 0 / 8 / 8
 1 : 3 3 : 5 1
 I D : l b r w k 5 b
 l w

ちな、俺氏はこれを見て浄化された。

7 6 9 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8
 1 : 3 5 : 0 0
 I D : d A p o c o a
 s i

は？

7 7 4 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8
 1 : 3 5 : 5 3
 I D : l H 8 y n z A
 O k

許せねえよなあ！

7 8 9 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 1 : 3 6 : 4 8 I D : I r w f o t T
2 6

あれ? 初見ボーイ反応無くね?

7 9 3 : 名無しの投稿者 2 0 3 0 / 8 / 8 1 : 3 7 : 4 9 I D : m c e k S Q N

s j

まさか……

7 9 4 : 初見ボーイ 2 0 3 0 / 8 / 8 1 : 3 8 : 4 9 I D : O d c b F J 2 Q d

………

死んだよ?

RE：三十六冊目

「つー訳でだ。各自買い出しの後、クマの家集合な」

鷹山がそう言うつてから、早数十分が経ち、熊谷宅は本来三人家族の家とは思えない賑わいを見せていた。

「あー！ お前、それは反則じゃん！」

「スーパーアーマー持ちが言つてら」

「おらあ！」

「ああ！ なんでその距離から吸えんのよ?!」

鮎川と燕谷の喧騒を後ろに、鷹山は熊谷宅の縁側でコーヒーのボトルを傾けていた。安いコーヒー飲料だが、一番ましな味だ。これ以上の安物は、コーヒー味の砂糖水。

「……タカ」

「箒、面倒な話はいいぞ。ラウラはラウラ、そういう結論だろ？」

「ああ、そうだ」

「なら、それでいいよ。お前とクマが面倒見てんだし、あたしやそれでいい」

「すまんな」

騒ぎを他所に、隣に座った箒に鷹山はそう言った。

箒は肝が太い。生半可な事では動じないし、大抵の事は受け入れる。たまに器がでないのではなく、頭が悪いだけかとも思うが、真琴はそうではない。

だから、二人が受け入れているなら、鷹山達は何も言わない。

「んで、どうなんだ？」

「なにがだ？」

「IS学園だよ。なかなか賑やかな話じゃねえか」

「退屈せんで。毎日新しい価値観だ」

「そりゃ良かった」

ペットボトルを一息に空にし、もしかしたらの可能性を考えたが、一瞬でやめた。

全員揃ってIS学園に行った可能性は無い。鷹山は家計、鮎川は家業、燕谷は適性。それぞれに理由があつて、今の立場を選んだ。

それでいい。

もしもの可能性など、考えても意味は無いのだ。

「箒……ちや……、タカちゃん……」

「む、風呂が空いたか。タカ、どうだ？」

湯上がりの真琴が涎を垂らして眠るラウラを抱えて、鷹山と箒の元へ来た。

どうやら、風呂の順番が回ってきたようだ。

「チビ助は電池切れか。箒、先に入りな。あたしは後でいい」

「そうか。では、先にいたどころ」

箒が腰を上げ、柔らかな笑みを真琴とラウラの二人に向ける。

この顔が出来るなら、まあ大丈夫だろう。

箒の背を見送り、鷹山は新しい蚊取り線香に火を点けながら真琴に問うた。

「クマ、毎日楽しいか」

「楽し……いよ……」

「そうか」

この中で真琴と一番付き合いが長いのは鷹山だ。

家が近所で、何かと目立っていた真琴はすぐに良からぬ標的になった。

まあ、やられたらやり返すタイプだったので、大抵は返り討ちにしていたが。

それでも見かねた鷹山がつるむ様になり、鼬川や燕谷が加わり、最終的に箒が加わった。

それからが大変だった。

中学に上がり、真琴が身体の成長と共に攻撃性が薄くなっていくと、調子に乗った連中がちょっとした掛けてくる。

真琴は真琴で、自身の力を理解していたので、下手にやり返す事はしなかった。だから鷹山達が常に一緒に居た。

進学しても変わらないだろうと、そう思っていたが、現実とは違った。

「まあ、IS学園はインテリだからバカは居ねえか」

「でも……いつも……何処か……で爆発……してよ……」

「……テロリストでも居んのかよ」

はて、IS学園とはテロリスト養成学校だったか。

「この前……は整備……課の小屋……が飛ん……だよ」

「いいか、クマ。小屋は飛ばねえ、住むもんだ」

「でも……飛んだ……よ……?」

さて、どうするべきか。

毎日、小屋が爆発して空を飛ぶ学園に大事な友人を預けて良いものか。

やはり、無理にでも奨学金を受けて自分も行くべきだったか。

鷹山がそんな事を考えていると、ラウラがもそもぞと動き出した。

「む……」

「ああ、寝かして来い」

「うん」

「クマ、明日はどうする？」

「明日は…箒ちゃん…と川に行…くよ」

「なら、早く寝ねえとな。イタチとツバメもそろそろか」

見れば鮎川と燕谷もゲームが一段落ついたのか。適当に菓子を摘まみながら雑談をしていた。

「先に寝とけ。あたし達は片付けてから寝る」

「うん…また明日…」

「ああ、また明日だ」

何時か毎日交わした挨拶、それをまた出来る日がこんなに早くに来るとは思わなかった。

毎日が毎日続くとは限らない。

だがそれでも、望む事は間違いではない。

「お？ クマ。寝るの？」

「うん…明日は…川に…遊びに…行くから」

「あら、なら早く寝ないとダメね」

「なら、さっさと片付けろ。つたく、あつという間に散らかしやがって」

「タカも一緒じゃん」

「皆、バラバラになってどっか行く夢。母様と私と箏は最後まで一緒だけど、皆どっか行くんだ」

「……そう……」

多分、ラウラが見た夢はこれから先の事だ。

これから先、学園を卒業すれば皆それぞれの道に進む。

どうやってもそれだけは避けられない。

ラウラと真琴、箏がこうして一緒に居られる時間は、きつとそう長くはない。

その事をどう伝えるべきか。真琴は箏と時々話し合っていたが、やはり答えは一つだけ。

真琴か箏、どちらかがラウラに伝える。

それしかなかった。

「……ラウラ……あの……ね……」

「だから約束したんだ。また皆集まるって」

「……ラウラ……」

「そしたら……また皆、一緒……」

それだけ言って、ラウラはまた眠ってしまった。

ラウラの静かな寝息を聞きながら、真琴がふと目線を上げると、同じく目を覚まして

いた箒と目が合った。

「大丈夫だ、きつと皆バラバラにはならない。一度は離れるだろう。だがそれでも、きつと皆一緒だ」

「そう……だね……」

きつと何時かは皆離れる。それだけは避けられない。

だけど、この毎日が少しでも長く続く事を願う事は間違いではない筈だ。

夏の夜、虫の音を聞きながら左手でラウラを抱き寄せ、空いた右手を箒の手と繋ぎ、真琴はゆつくりと眠りに落ちていった。